財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第22集

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（4）

城根遺跡

曽川1号遺跡（E地区）

牛の皮城跡（第4次）

2008

財団法人　広島県教育事業団

例　言

1　本報告書は，平成14(2002)年度・15(2003)年度・17(2005)年度に調査を実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う城根遺跡（広島県尾道市御調町大町字城根所在）・曽川１号遺跡（Ｅ地区）（同町大町字米田所在）・牛の皮城跡（第４次）（同町大町字二の丸所在）の発掘調査報告である。

2　発掘調査は，平成14年度は日本道路公団中国支社（以下「道路公団」という。）との委託契約により財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）が実施し，平成15年度は道路公団との委託契約によりセンターの業務を引き継いだ財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）が実施し，平成17年度は道路公団（10月から西日本高速株式会社中国支社（以下「西日本高速」という。）が業務継承）との委託契約により調査室が実施した。

整理・報告書作成は，平成17年度に道路公団（10月から西日本高速が業務継承），平成18・19年度に国土交通省福山河川国道事務所との委託契約により調査室が実施した。

3　発掘調査は，次の者が担当した。

平成14年度　城根遺跡

青山透（現・広島県立歴史民俗資料館）・下津間康夫（現・広島県立歴史博物館）

平成15年度　曽川１号遺跡（Ｅ地区）

山田繁樹・梅本健治

平成17年度　牛の皮城跡（第４次）

唐口勉三（現・財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センター）・山田

4　出土遺物の整理・復元・実測・写真撮影・図面の整理は，城根遺跡は青山・下津間・岩本正二（現・財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センター）が，曽川１号遺跡（Ｅ地区）は山田・梅本・鍛治益生・沢元保夫（現・財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センター）・辻満久・唐口が，牛の皮城跡（第４次）は唐口がそれぞれ行った。

5　本書は，Ⅲを岩本が，その他を唐口がそれぞれ執筆し，編集は唐口が行った。

6　第Ⅰ-2図は国土地理院発行の１:50,000の地形図（府中・尾道）を，第Ⅱ-1図は国土地理院発行の１:25,000の地形図（府中・甲山・垣内・三成）をそれぞれ縮小して使用した。

7　本書で使用した方位は，第Ⅲ-2～5図が磁北，その他が座標北である。

8　遺物実測図の土器の断面は，須恵器：黒ヌリ，その他：白ヌキとした。

9　図版と挿図の遺物番号は同じである。

10　曽川１号遺跡（Ｅ地区）・牛の皮城跡（第４次）出土の石器石材の鑑定は，考古地質学研究所柴田喜太郎氏の肉眼観察による。

11　出土遺物・発掘調査資料については，広島県立埋蔵文化財センターで保管の予定である。

目　次

Ⅰ　はじめに……（1）
Ⅱ　位置と環境……（5）
Ⅲ　城根遺跡
　1　調査の概要……（11）
　2　遺構と遺物……（12）
　3　まとめ……（15）
Ⅳ　曽川1号遺跡（E地区）
　1　調査の概要……（17）
　2　出土遺物……（20）
　3　まとめ……（50）
Ⅴ　牛の皮城跡（第4次）
　1　調査の概要……（53）
　2　遺構と遺物……（55）
　3　まとめ……（61）

挿図目次

第Ⅰ-1図　中国横断自動車道尾道松江線路線図……（2）
第Ⅰ-2図　中国横断自動車道尾道松江線建設事業（尾道・世羅）に伴う調査遺跡位置図（1:75,000）……（4）
第Ⅱ-1図　周辺遺跡分布図（1:50,000）……（7）
第Ⅱ-2図　遺跡位置図及び周辺地形図（1:3,000）……（10）
第Ⅲ-1図　城根遺跡周辺地形図（1:2,000）……（11）
第Ⅲ-2図　城根遺跡遺構配置図（1:200）……（12）
第Ⅲ-3図　城根遺跡1号石棺墓実測図（1:40）……（13）
第Ⅲ-4図　城根遺跡2号石棺墓実測図（1:40）……（14）
第Ⅲ-5図　城根遺跡土壙墓実測図（1:40）……（14）
第Ⅳ-1図　曽川1号遺跡周辺地形図（1:2,000）……（18）
第Ⅳ-2図　曽川1号遺跡（E地区）遺構配置図（1:200）及び北側落ち込み土層断面図（1:80）……（19）
第Ⅳ-3図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（1）（1:3）……（26）
第Ⅳ-4図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（2）（1:3）……（27）
第Ⅳ-5図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（3）（1:3）……（28）
第Ⅳ-6図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（4）（1:3）……（29）
第Ⅳ-7図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（5）（1:3）……（30）
第Ⅳ-8図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（6）（1:4）……（31）
第Ⅳ-9図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（7）（1:3）……（32）
第Ⅳ-10図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（8）（1:4）……（33）
第Ⅳ-11図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（9）（1:3）……（34）
第Ⅳ-12図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（10）（1:3）……（35）
第Ⅳ-13図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（11）（1:3）……（36）

第Ⅳ-14図　曽川１号遺跡（Ｅ地区）出土遺物実測図（12）（1:3）……（37）
第Ⅳ-15図　曽川１号遺跡（Ｅ地区）出土遺物実測図（13）（1:3）……（38）
第Ⅳ-16図　曽川１号遺跡（Ｅ地区）出土遺物実測図（14）（1:3）……（39）
第Ⅳ-17図　曽川１号遺跡（Ｅ地区）出土遺物実測図（15）（1:2，1:3）……（40）
第Ⅳ-18図　曽川１号遺跡（Ｅ地区）出土遺物実測図（16）（1:3）……（41）
第Ⅳ-19図　曽川１号遺跡（Ｅ地区）出土遺物実測図（17）（1:3）……（42）
第Ⅴ-1図　牛の皮城跡北郭群地形図（1:700）……（54）
第Ⅴ-2図　牛の皮城跡北郭群５郭調査区遺構実測図（1:200）……（55）
第Ⅴ-3図　牛の皮城跡北郭群５郭土層断面図（1:80）……（56）
第Ⅴ-4図　牛の皮城跡北郭群５郭出土遺物実測図（１）（1:3，1:2）……（58）
第Ⅴ-5図　牛の皮城跡北郭群５郭出土遺物実測図（２）および出土古銭拓影（2:3）……（59）

表　目　次

第Ⅰ-1表　中国横断自動車道尾道松江線建設事業（尾道・世羅）に伴う調査遺跡一覧表……（３）
第Ⅳ-1表　曽川１号遺跡調査地区名称一覧表……（17）
第Ⅳ-2表　曽川１号遺跡（Ｅ地区）出土掲載遺物（石器）一覧表……（42）
第Ⅳ-3表　曽川１号遺跡（Ｅ地区）出土掲載遺物（縄文土器）一覧表……（43）～（45）
第Ⅳ-4表　曽川１号遺跡（Ｅ地区）出土掲載遺物（縄文土器以外の土器と瓦）一覧表……（46）～（49）
第Ⅳ-5表　多孔底土器出土地（広島県内）一覧表……（51）
第Ⅴ-1表　牛の皮城跡北郭群５郭出土掲載遺物（土器）一覧表……（60）
第Ⅴ-2表　牛の皮城跡北郭群５郭出土掲載遺物（石製品・金属製品）一覧表……（60）
第Ⅴ-3表　牛の皮城跡北郭群１～５郭の概要一覧表……（61）

図　版　目　次

遺跡遠景（空中写真，北から）

城　根　遺　跡

図版１　a　遺跡遠景（空中写真，南西から）
　　b　遺跡近景（南西から）
　　c　調査前全景（東から）
図版２　a　調査後全景（東から）
　　b　調査後全景（南東から）
　　c　１号石棺墓側石（南から）
図版３　a　１号石棺墓側石（西から）
　　b　１号石棺墓掘方（西から）
　　c　２号石棺墓蓋石（南から）
図版４　a　２号石棺墓側石（西から）
　　b　２号石棺墓掘方（南から）
　　c　土壙墓人骨検出状況（南から）
図版５　出土遺物

曽川１号遺跡（Ｅ地区）

図版６　a　遺跡遠景（北から）
　　b　遺跡近景（西から）
　　c　調査前全景（東から）
図版７　a　調査後全景（西から）
　　b　調査後全景（東から）
　　c　北側落ち込み土層断面（東から）
図版８　出土遺物（１）
図版９　出土遺物（２）
図版10　出土遺物（３）
図版11　出土遺物（４）
図版12　出土遺物（５）
図版13　出土遺物（６）
図版14　出土遺物（７）
図版15　出土遺物（８）
図版16　出土遺物（９）
図版17　出土遺物（10）
図版18　出土遺物（11）
図版19　出土遺物（12）
図版20　出土遺物（13）
図版21　出土遺物（14）
図版22　出土遺物（15）
図版23　出土遺物（16）
図版24　出土遺物（17）
図版25　出土遺物（18）

牛の皮城跡（第４次）

図版26　a　遺跡遠景（西から）
　　b　遺跡遠景（北西から）
　　c　遺跡遠景（北から）
図版27　a　遺跡近景（西から）
　　b　遺跡近景（南西から）
　　c　調査前全景（南東から）
図版28　a　調査状況（北西から）
　　b　調査状況（南東から）
　　c　調査後全景（南東から）
図版29　a　３・４区間土層断面（西から）
　　b　１・２区間土層断面（西から）
　　c　５・６区間土層断面（南から）
　　d　５・６区間土層断面（北寄り，南から）
　　e　４・２区間土層断面（西から）
　　f　３・１区間土層断面（北西から）
　　g　６・４区間土層断面
　　（東寄り，北西から）
　　h　５・３区間土層断面（西寄り，北から）
図版30　a　東側土塁検出状況（北西から）
　　b　西側土塁検出状況（北西から）
　　c　東側土塁検出状況（西から）
　　d　西側土塁検出状況（北東から）
　　e　東側土塁土層断面（北西から）
　　f　西側通路確認状況（北から）
　　g　東側通路確認状況（東から）
　　h　西側通路確認状況（南から）
図版31　出土遺物（１）
図版32　a　出土遺物（２）
　　b　調査風景（南東から）

Ⅰ　はじめに

中国横断自動車道尾道松江線は瀬戸内海沿岸の尾道市から三次市を経て日本海側の松江市に至る延長約137kmの高速自動車道である。山陽自動車道・中国自動車道・山陰自動車道及び西瀬戸自動車道と接続して中国・四国地方の広域的な交通ネットワークを形成し，沿線地域の産業・経済・文化の発展に重要な役割を果たすことを目的として計画された。

事業者である日本道路公団中国支社尾道工事事務所（以下「道路公団」という。）と広島県教育委員会（以下「県教委」という。）は，平成11（1999）年７月から予定路線内の文化財等の有無及び取扱いについて協議を始めたが，予定路線内には多くの埋蔵文化財の存在が予想された。

県教委の踏査及び試掘調査の結果，尾道市木之庄町，尾道市御調町（旧御調郡御調町），世羅郡世羅町（旧世羅郡甲山町）の予定路線範囲については，家ノ城跡，城根遺跡，牛の皮城跡，曽川１号遺跡，曽川２号遺跡，池ノ奥古墳の存在が明らかとなった。県教委および当該市町教育委員会は道路公団とこれらの遺跡の保存について協議したが，保存できないとの結論に達した。そのため，県教委は道路公団に対し，これらの遺跡等について発掘調査が必要の旨，順次回答した。

これを受けて道路公団は，平成14年７月から工事の優先する個所ごとに文化財保護法第57条の３に基づく埋蔵文化財発掘通知を県教委に提出するとともに，発掘調査の実施を平成14年９月以降，財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）および財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室（以下「事業団」という。平成15年４月から財団法人広島県埋蔵文化財調査センターの業務を引き継ぐ。）に依頼した。センター及び事業団は，発掘依頼のあったこれらの遺跡について順次発掘調査を実施してきている。牛の皮城跡（第１～３次）・曽川２号遺跡については平成17年３月に尾道松江線に伴う発掘調査報告の第１冊[1]，曽川１号遺跡（A～D地区）については平成18年３月に第２冊[2]，池ノ奥古墳については平成19年３月に第３冊[3]として報告した。

第４冊[1]となる本書は平成14・15・17年度にセンター及び事業団が道路公団・西日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）及び国土交通省中国地方整備局福山河川国道事務所と委託契約し，発掘調査及び整理作業を実施した城根遺跡・曽川１号遺跡（E地区）・牛の皮城跡（第４次）の調査成果をまとめたものである。城根遺跡は平成15年１月27日～平成15年３月７日に，曽川１号遺跡（E地区）は平成15年12月１日～平成15年12月19日に，牛の皮城跡（第４次）は平成18年１月30日～平成18年２月24日にそれぞれ発掘調査を行った。発掘資料・出土遺物等の整理については，城根遺跡は平成17年度に，曽川１号遺跡（E地区）は平成16～18年度に，牛の皮城跡（第４次）は平成18年度にそれぞれ行った。今後の埋蔵文化財の資料として，また，当該地域の歴史の一端を知る助けとなれば幸いである。

なお，発掘調査にあたっては，西日本高速道路株式会社中国支社尾道工事事務所，国土交通省中国地方整備局福山河川国道事務所，尾道市（旧御調町）教育委員会及び地元の方々から多大な

るご協力を得た。記して感謝の意を表します。

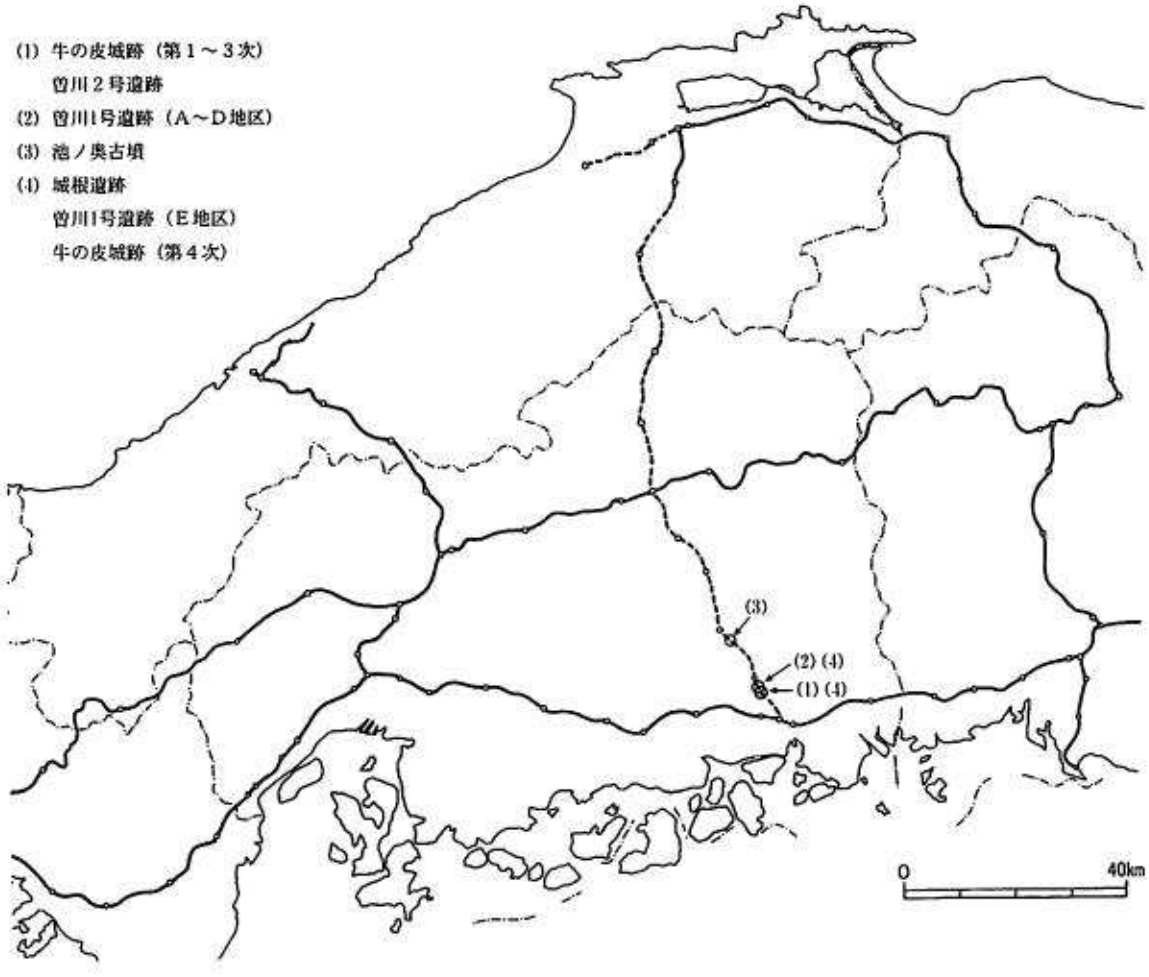
註(報告書)

(1) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曽川2号遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』 2005年

(2) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)　曽川1号遺跡(A～D地区)』 2006年

(3) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3)　池ノ奥古墳』 2007年

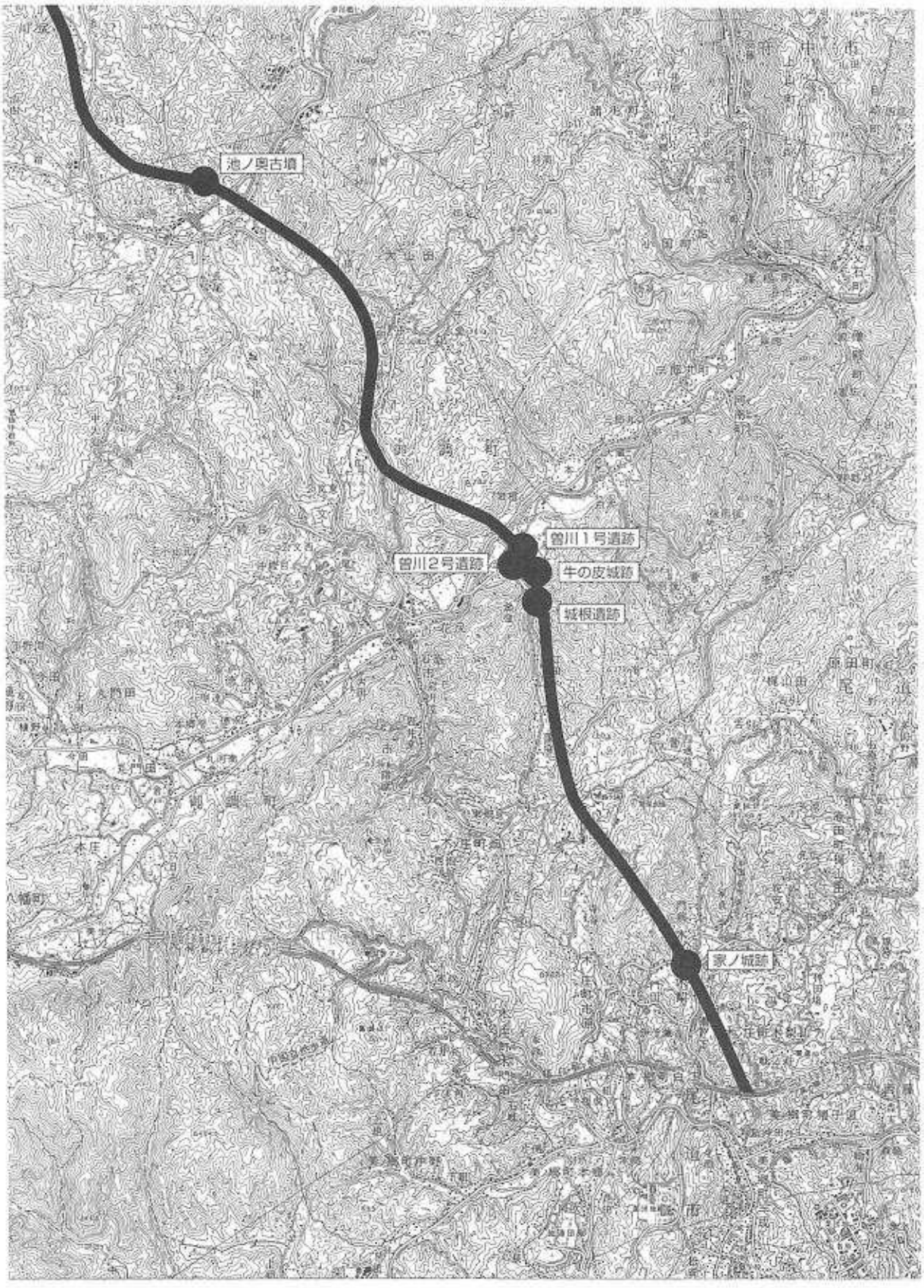
(4) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4)　城根遺跡　曽川1号遺跡(E地区)　牛の皮城跡(第4次)』 2008年



第Ⅰ-1図　中国横断自動車道尾道松江線路線図<(1) ～ (4)は報告書番号を示す>

第Ⅰ-1表　中国横断自動車道尾道松江線建設事業(尾道・世羅)に伴う調査遺跡一覧表

報告書	遺跡名(第　次)		地区名等	調査期間	所在地	時期	内容
(1) 第12集	曽川2号遺跡			平成15年1月20日～ 3月7日	尾道市御調町 大町字西川	古代末～ 中世	集落跡
	牛の皮城跡 (北郭群)	(第1次)	北郭群 畝状竪堀群	平成15年1月20日～ 3月14日	尾道市御調町 大町字二の丸	中世	城跡
		(第2次)	北郭群 1～4郭	平成15年7月7日～ 10月31日			
		(第3次)	北郭群 西竪堀	平成15年11月10日～ 11月28日			
(4) 第22集 (本書)		(第4次)	北郭群 5郭	平成18年1月30日～ 2月24日			
	城根遺跡			平成15年1月27日～ 3月7日	尾道市御調町 大町字城根	古墳時代 か	箱式石棺
(2) 第18集	曽川1号遺跡	(A地区)	(旧・平成14年 度調査区)	平成14年10月21日～ 平成15年1月17日	尾道市御調町 大町字曽川	縄文時代 後期 ～中世	集落跡
		(B地区)	(旧・P2第一 調査区)	平成15年4月7日～ 5月23日			
		(C地区)	(旧・P2第二 調査区)				
		(D地区)	(旧・P1)	平成16年1月6日～ 2月5日			
(4) 第22集 (本書)		(E地区)	(旧・P4)	平成15年12月1日～ 12月19日	尾道市御調町 大町字米田		遺物包含層
		(G地区)	(旧・P3)	平成16年6月7日～ 8月6日	尾道市御調町 大町字曽川・米田		集落跡
		(H地区)	(旧・P3側)				
		(I地区)	(旧・P4側)				
		(J地区)	(旧・P2)	平成17年1月11日～ 3月4日			
		(K地区)		平成17年4月11日～ 7月1日			
	家ノ城跡	(第1次)	南東郭	平成15年9月16日～ 10月31日	尾道市木之庄町 木梨字家城東平	中世	城跡
		(第2次)	南東郭	平成16年5月7日～ 6月11日			
		(第3次)	北郭	平成17年10月17日～ 11月11日			
		(第4次)	北郭	平成18年4月17日～ 7月21日			
		(第5次)	北郭	平成19年4月16日～ 6月15日			
(3) 第19集	池ノ奥古墳			平成16年8月23日～ 10月28日	世羅郡世羅町 宇津戸字天神	古墳時代 後期	横穴式石室



第Ⅰ-2図　中国横断自動車道尾道松江線建設事業（尾道・世羅）に伴う調査遺跡位置図（1：75,000）

Ⅱ　位置と環境

城根遺跡・曽川１号遺跡・牛の川城跡は広島県尾道市御調町大字大町に所在する。

尾道市は広島県東南部に位置し，平成17(2005)年３月に御調郡御調町・向島町と，平成18(2006)年１月に因島市・豊田郡瀬戸田町と合併し，面積約285平方キロメートル，人口15万人を超える市となった。御調町は尾道市の北部にあたり，東は府中市，西は三原市，北は世羅郡世羅町と接している。町の北西側及び南東側は標高300～600ｍ前後の山々が連なり，町域の南西から北東に流れる芦田川の支流御調川とそれに注ぐ小河川が形成した平坦地・谷部に集落が形成されている。

町内の東西には御調川に沿って古代山陽道が通り，南北には高野山領大田荘と倉敷地である尾道とを結び，さらには石見銀山と尾道を結んだ石州街道が通る。この二つの街道が交わるところが市街地を形成する中心部の市（いち）である。このように御調町は古くから交通の要衝であり，本郷平廃寺をはじめ多くの遺跡が存在する。

旧石器時代～縄文時代　町内では旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代の遺跡としては，今回報告の曽川１号遺跡Ｅ地区で後期前半から中頃の土器がまとまって出土したほか，曽川１号遺跡Ａ地区で晩期の土器片が出土している[1]が，今のところ遺構は確認されていない。

弥生時代　弥生時代になると，御調川北岸を中心に，弥生土器や磨製石斧が採集された遺跡が数多く存在する。しかし調査例は少なく，丸門田の本郷平廃寺の調査によって中期の土器が出土している[2]だけである。高尾の高尾１・２号遺跡，高尾西遺跡，土木屋遺跡，神の後口山遺跡，丸河南の大慶寺遺跡，大山田の後呂谷遺跡などの各所で採集された土器は後期のものがほとんどである。曽川１号遺跡では，弥生時代後期～終末期の円形や隅丸方形の竪穴住居跡や土坑を検出しており，この時期には集落が形成されていたことをうかがわせ，備後固有の土器のほかに吉備や山陰からの搬入品とみられる土器が出土していることから，他地域との交流も行われていたと考えられる。曽川１号遺跡と御調川を挟んだ北側の貝ケ原遺跡[3]では古式の特殊器台が出土しており，御調川流域でも墳丘墓に葬られる有力な首長が現れたことを示している。

古墳時代　古墳時代になると，御調川の北側で数多くの古墳が確認されているが，調査例は少ない[4]。中心部の市周辺では埋葬施設が箱式石棺である古墳と横穴式石室の古墳が混在しているが，その他の地域では横穴式石室の古墳がほとんどである。竪穴式石室や箱式石棺をもつものはそれほど多くないが，津蟹の天神山第２号古墳，丸門田の明神山古墳群（８基）・明神山古墳，徳永の高神古墳群（３基）・正尺山古墳群（２基），高尾の高尾第１号古墳・高尾西第３・４号古墳，市の後口山古墳などがある。天神山第２号古墳は竪穴式石室だが，ほかはいずれも箱式石棺と考えられている。高尾第１号古墳と後口山古墳は発掘調査が行われている[5]。前者は直径13.5m，高さ1.5mの円墳の裾に１～２段の葺石を巡らし，内法の長さ1.7mの箱式石棺から人骨が出土している。後口山古墳は内法の長さ1.7mの箱式石棺の中から，人骨と管玉・ガラス小玉が出土し

ている。両古墳ともに５世紀中～末前後に築造されたと考えられている。横穴式石室を埋葬施設とする古墳は，中心部の高尾の高尾西第１・２号古墳，神古墳群（２基），綾目の矢伝古墳群（３基）・七つ塚古墳群（６基），神の神西古墳群（２基），貝ケ原の貝ケ原古墳群（７基）・ムカデ岩山口古墳群（５基），西部の津蟹の隠れ迫古墳群（３基）・城山古墳群（４基）・要谷山古墳，野間の小石古墳群（３基），丸門田の城の東古墳・船岩古墳・市山古墳群（２基）・東中倉古墳群（２基），丸河南の大羽谷古墳群（２基），北部の大山田の梅ノ木古墳群（４基）・小猿古墳・中倉谷古墳・大畑谷古墳，東部の本の狐岩古墳群（６基）・河崎古墳などがある。古墳以外では，須恵器を焼成した津蟹の隠れ迫窯跡がある。

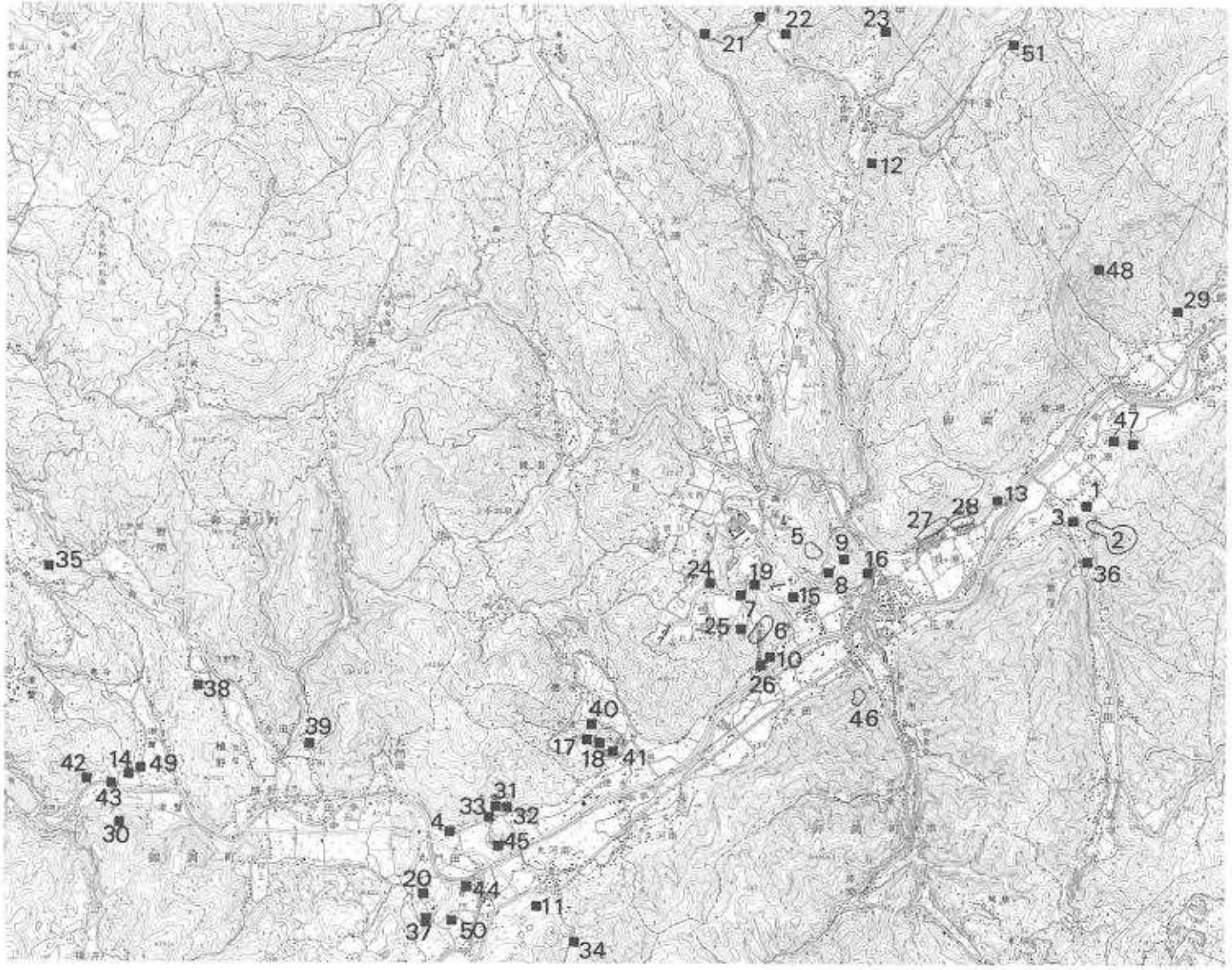
これらの古墳を生み出した集落については調査例が少なく明らかにしがたいが，曽川１号遺跡では６世紀の方形の竪穴住居跡を検出している。

古代　古代の遺跡としては，昭和60～63年度に本郷平廃寺[6]が調査され，７世紀末に創建された備後南部地域で最も古い寺院の一つであることが確認された。集落跡は平成14年度に調査した曽川２号遺跡で，掘立柱建物跡１棟，土坑１基，多数の柱穴を検出した[7]。土坑から柱状高台付皿が備後地域では初めて出土しており，12世紀前後の遺跡と考えられる。曽川１号遺跡Ａ地区では８～９世紀頃の製塩土器の破片が出土している[8]。そのほか，須恵器の骨蔵器を納めた丸門田の合山火葬墓や，瓦が出土した津蟹の切堤窯跡群がある。古代において御調町は備後国御調郡にあたるが，郡衙は確認されていない。また，古代山陽道の「者度駅」が市付近に存在したと考えられている。

中世以降　中世になると，この地域は現在の世羅郡世羅町を中心とした地域に所在した高野山領大田庄とその倉敷地である尾道とを結ぶ南北の交通路となり，近世の石州街道へと発展していく。また山陽道も御調川沿いを東西に通っているため，交通の要衝として栄えた。

備後国は，山名氏が長く守護を務めたため，応仁元（1467）年に始まった応仁の乱に無関係ではなく，山名持豊の西軍，山名是豊の東軍の双方に分かれて戦った。概ね備後南部の外郡と呼ばれた深津・安那・品治・沼隈・御調・葦田・世羅の国人衆は東軍に，内郡と呼ばれた甲奴・神石・奴可・恵蘇・三次・三谷・三上の国人衆は西軍に属した。応仁の乱が終結した後，備後の山名政豊が父持豊から守護を譲り受けたが，政豊が長享２（1488）年に赤松氏に敗れたことや，明応２（1493）年に細川政元が十代将軍足利義材を将軍の座から降ろし，足利義澄を十一代将軍に就けたことにより，政豊とその子俊豊の父子の争いが始まる。この争いは明応８年に政豊が亡くなるまで続き，備後の守護が山名氏であったため，備後の国人達も両軍に分かれて戦った。その後，明応８年に政豊の跡を継いだ致豊は但馬に留まったため，備後への影響力は弱まり，替わって北の尼子氏，西の大内氏の勢力が進出することとなるが，最終的にこの地域は毛利氏の領国に編入された。

明応２年５月に山名俊豊が山内刑部四郎通久に「御調郡之内三吉敷名跡七拾貫文，三吉森光跡弐拾伍貫文，三吉池上跡弐拾伍貫文」の所領を与えるとの文書を送っている[9]ことから，このときまで三吉氏が御調郡内に所領をもっていたこと，政豊方についていたことがわかる。三吉氏は



第Ⅱ-1図　周辺遺跡分布図（1:50,000）

（広島県教育委員会『広島県遺跡地図』Ⅴ（御調郡・世羅郡）　1998年　による。）

近江国から来住した地頭で，鎌倉・室町時代を通じて勢力を伸ばし，応仁の乱や山名父子の戦いの間に，南下して世羅・御調に勢力を拡大したと思われる。この後の16世紀後半頃，このあたりは毛利氏の支配下に入るが，文禄３（1594）年の毛利輝元知行宛行状によると林志摩守元善に御調郡守光氏の旧領が宛行われている[10]ことから，森光（守光）氏の勢力は，この後この地域から失われたと思われる。

中世の山城跡は，植野の末近（せずか）城跡，今田の上田城跡，徳永の福元山城跡，正尺山城跡，市の雲雀城跡，大町の牛の皮城跡，大塔の撰場城跡，津蟹の福丸城跡，丸山城跡（津蟹城跡），丸門田の丸山城跡（勝場山城跡），峠山城跡などがあり，末近城跡[11]と牛の皮城跡[12]で発掘調査が行われている。また，上田城跡及び福丸城跡で牛の皮城跡と同様の畝状竪堀群がみられる[13]。末近城跡は御調川の支流野間川を臨む丘陵上に位置する小規模な城跡で，平成13年に行われた調査の結果，領主の支配拠点というより「村の城」として築かれた可能性が高いとされた。牛の皮城跡は南と北の郭群からなり，北郭群で平成14・15・17年度に４次にわたる調査を行った。

城跡以外の中世の遺跡は，津蟹の天神遺跡，丸門田の明神沖遺跡，千堂の上千堂遺跡がある。上千堂遺跡は平成８年の調査で掘立柱建物跡１棟が検出されたが，詳細な時期は不明である[1]。

註

（1） 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2） 曽川1号遺跡（A～D地区）』 2006年

（2） 川越哲志「本郷平廃寺出土の弥生土器」『本郷平廃寺』広島県御調町教育委員会 1989年

（3） 潮見浩「貝ケ原遺跡出土の特殊器台形土器」『広島県文化財調査報告』第17集 広島県教育委員会 1991年

（4） 広島県教育委員会『広島県遺跡地図』Ⅴ 1998年
以下の古墳のデータはこれによる。

（5） 御調町教育委員会『御調郡御調町高尾古墳発掘調査報告 付 御調町後口山古墳発掘調査概報』 1971年

（6） 御調町教育委員会『本郷平廃寺－昭和60年度発掘調査概報－』 1986年
御調町教育委員会『本郷平廃寺－昭和61年度発掘調査概報－』 1987年
広島県御調町教育委員会『本郷平廃寺』 1989年

（7） 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曽川２号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（1）』 2005年

（8） 註（1）と同じ。

（9） 東京大学史料編纂所「山内家文書五四四」『大日本古文書 家わけ十五』財団法人東京大学出版会 1940年 p. 516・517

(10) 山口県文書館「巻91 林平八５」『萩藩閥閲録』第３巻 1967年 p. 12・13

(11) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『末近城跡』 2002年

(12) 註（7）と同じ。

(13) 広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第３集 1995年 p. 129・132

(14)　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『上千堂遺跡』　1997年

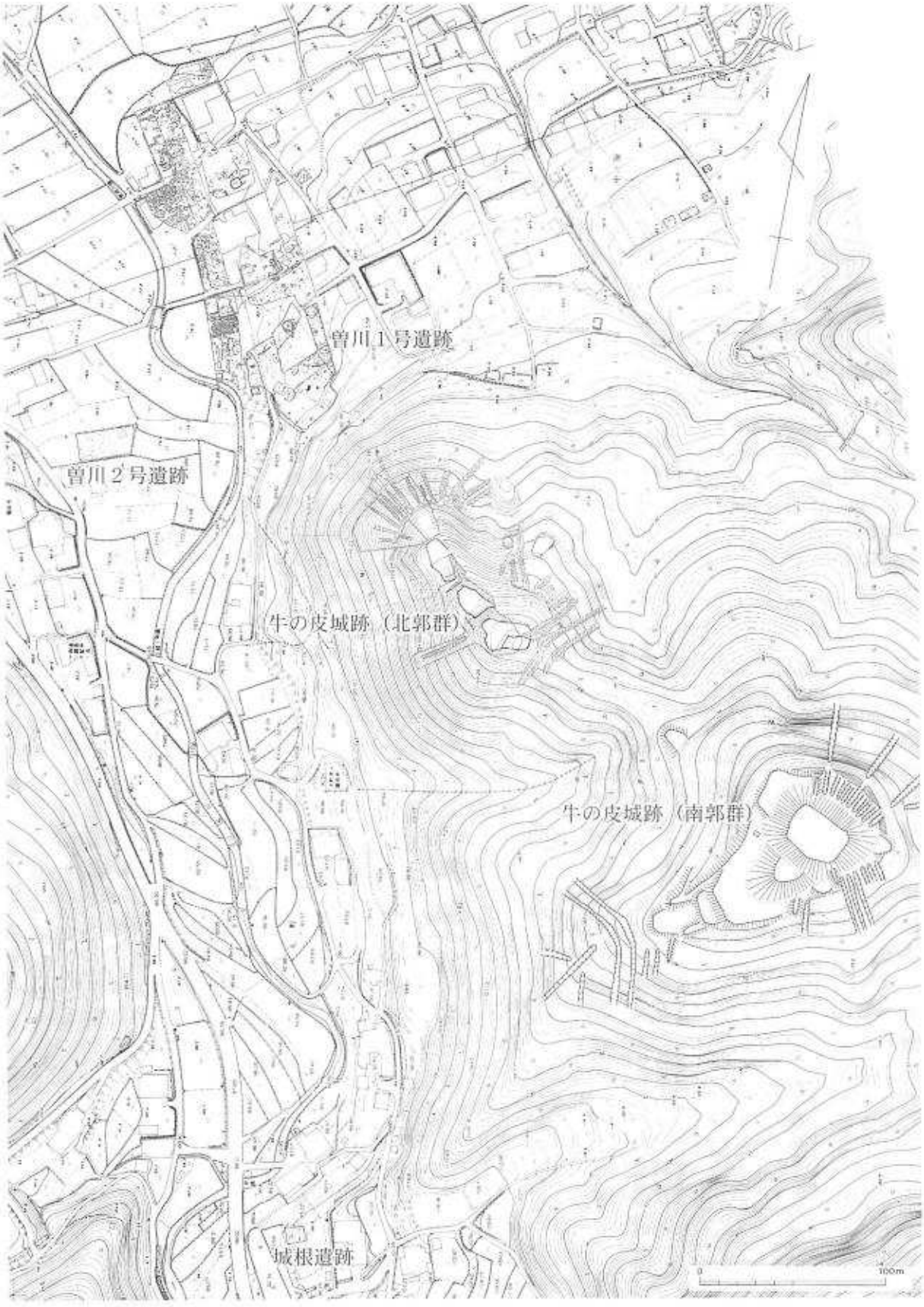
参考文献

『広島県の地名』日本歴史地名大系第35巻　株式会社平凡社　1982年

『角川日本地名大辞典』34広島県　株式会社角川書店　1987年

『広島県史』中世　広島県　1984年

『福山市史』上巻　株式会社国書刊行会　1983年



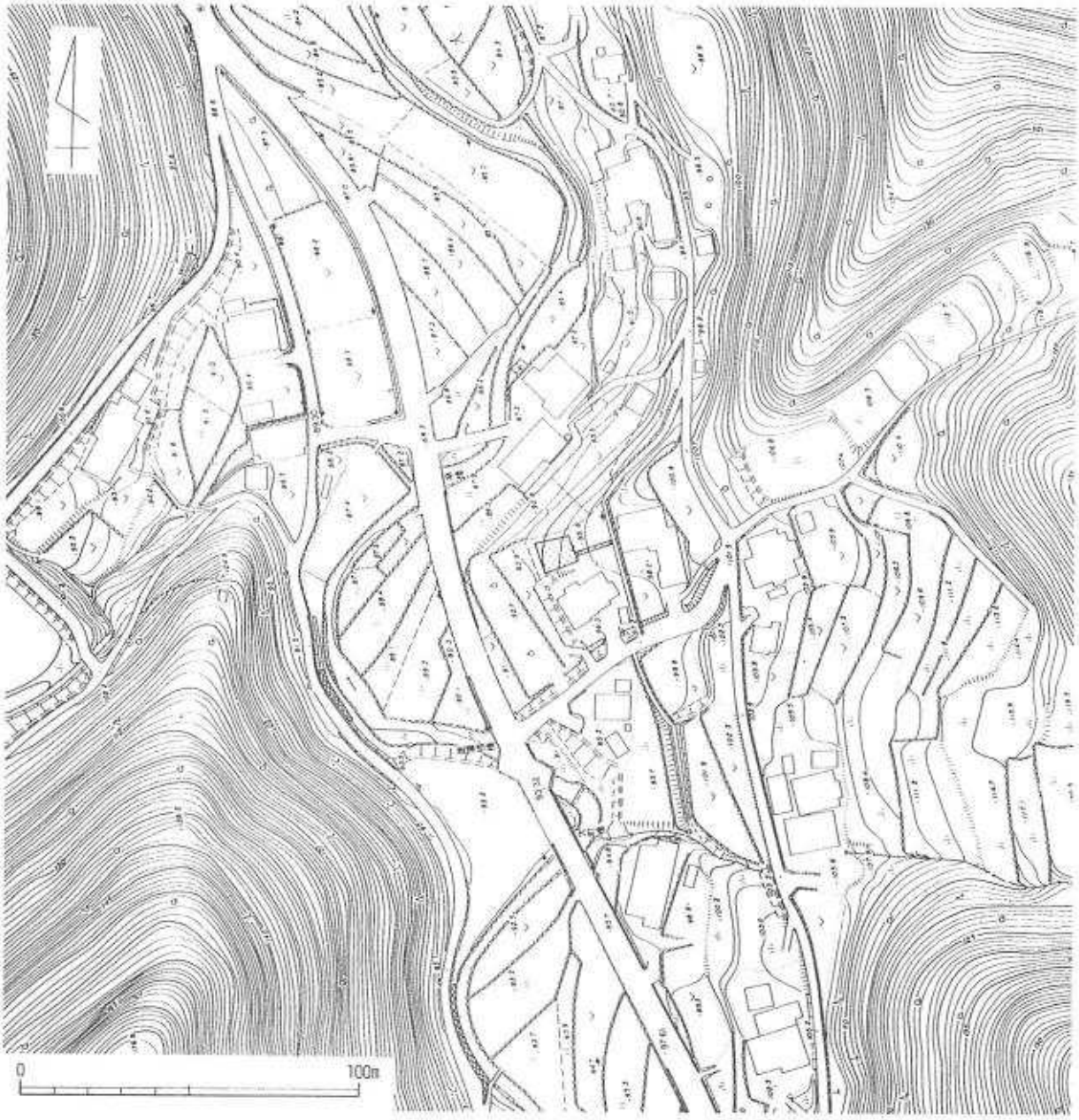
第Ⅱ-2図　遺跡位置図及び周辺地形図（1:3,000）

Ⅲ　城根遺跡

1　調査の概要

（1）　遺跡の状況（第Ⅲ－1図、図版1）

遺跡は，牛の皮城跡のある山（標高 216.7 m）から南西に伸びる丘陵先端の微高地に立地する。西側には丘陵裾を江国川が蛇行しながら流れており，北流して芦田川支流の御調川に注ぐ。遺跡の標高は 95 ～ 97 m，江国川との標高差は約 10 mである。曽川 1 号遺跡の南側約 500 mの位置にあり，調査前は畑地として利用されていた。



第Ⅲ-1図　城根遺跡周辺地形図（1:2,000）（アミ目は調査区）

（2） 調査の方法・概要（第Ⅲ－２図、図版１・２）

平成13年の試掘調査において，表土を約0.1m掘り下げた位置で，箱式石棺墓（１号石棺墓）を確認している。この状況を基に，発掘区を設定した。遺構面までの堆積土は浅いと予想されたので，調査は表土以下を人力で除去した。基本土層は上から暗茶褐色土（畑の耕作土），礫混り黄褐色土（花崗岩風化土，地山）で，遺構は，礫混り黄褐色土上面で検出した。遺構検出面までの堆積層の厚さは，約0.1～0.3mである。

調査の結果，箱式石棺墓２基（１号石棺墓・２号石棺墓），土壙墓１基を検出した。１号石棺墓の石棺は片側の小口石と一部の側石が残存するのみで，多くの石材が抜き取られている。確認できる掘方の状況などから，石棺の内法は長さ約1.7m，幅約0.3mで，成人用のものであろう。２号石棺墓の石棺の大きさは，内法で長さ0.7m，幅0.2 mあり，蓋石が残存している。大きさからみて，小児用のものであろう。２基の石棺墓の間隔は約3.5mで，それぞれの主軸方位はほぼ一致している。１・２号石棺墓とも，副葬品は残存せず，関連する遺物もなく，時期は不明である。断定はできないが，古墳時代前半期の可能性が高い。また，土壙墓は長径1.0m，短径0.5mの長円形のもので，人骨の一部が残存する。時期は不明であるが，近世以降の可能性が高い。

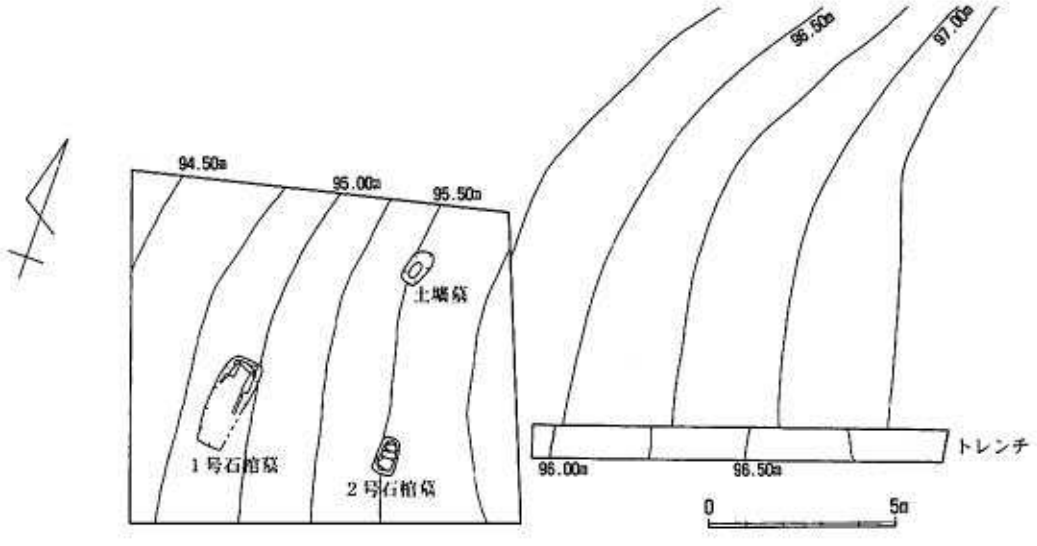
なお，これら３基の墓以外の地点で，遺構の存在や地形・土層を確認するため，トレンチ調査を行ったが，土層は同様な状況であり，遺構は確認できなかった。

２ 遺構と遺物

（１） 遺構

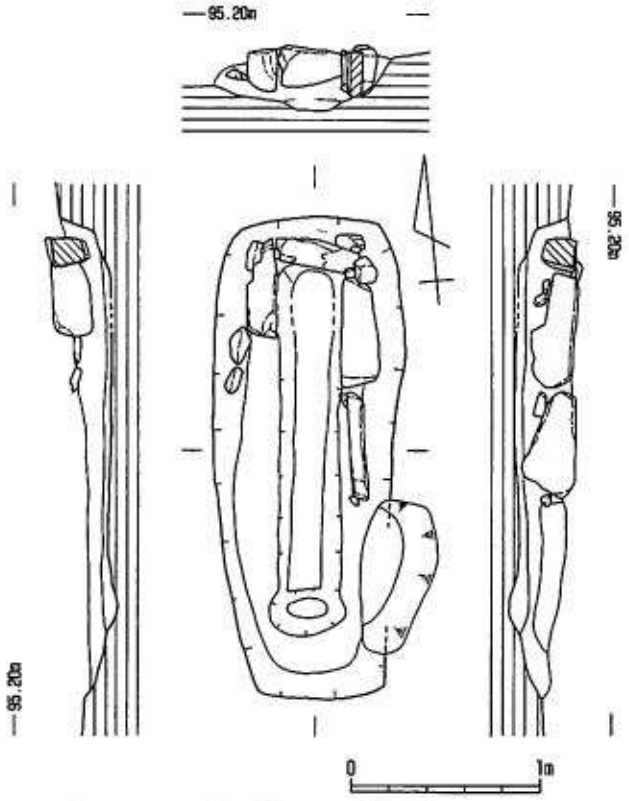
１号石棺墓（第Ⅲ－３図、図版２・３）

尾根線から少し下がった北西斜面に位置する箱式石棺墓である。主軸は尾根線に斜交し，等高線にほぼ平行する。東約3.5mに２号石棺墓がある。



第Ⅲ－２図　城根遺跡遺構配置図（1:200）

北側で３個の側石と小口石１個を検出した。側石は，長辺50～60cm，短辺20～28cm，厚さ７～20cmの表面が平坦な石で，いずれも横方向に据えつけている。小口石は，大きさが長辺45cm，短辺16cm，厚さ14cmである。小口石や各側石の間には，長辺10～20cm，短辺３～７cm，厚さ約５cmの小礫が主に後側から詰められている。石材は，本遺跡周辺に広く分布する花崗岩である。掘方は，南側が撹乱を受けているが，上面形は隅丸長方形で，推定残存規模は，長さ2.5m，幅1.0m，深さ0.3mである。２段に掘り込まれ，２段目は１段目より約５cm深い。１段目は石材の高さを揃えるため土が盛られたところもあり，南小口石の掘方は１段目からさらに約６cm深く掘られている。石を据えた後，石の間は小礫を詰めて補強している。石棺内に土を入れて床面としており，人骨や遺物は出土していない。



第Ⅲ-３図　城根遺跡１号石棺墓実測図(1:40)

石棺の内法の推定規模は，残存している側石・小口石や掘方から判断すれば，長さ約1.7m，幅0.30～0.32m，深さ0.25mである。主軸方向はＮ６°Ｅで，頭位は不明である。なお，蓋石は残存していなかった。２号石棺墓には存在することから，１号石棺墓の蓋石は後世に取り除かれたのであろう。また，墳丘等の存否については，地山を直接掘り込んで作っていること，溝などの施設がみられないことなど否定的要素があるが，周辺は削平を大幅に受けており，どちらとも決め手はない。

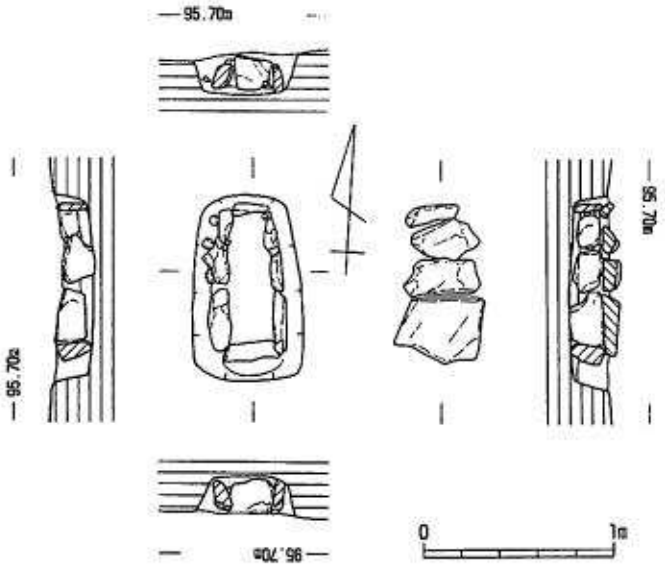
２号石棺墓(第Ⅲ－４図、図版３・４)

尾根線より少し下がった北西斜面に位置する箱式石棺墓である。主軸は尾根線に斜交し，等高線にほぼ平行する。西約3.5mに１号石棺墓がある。

２号石棺墓は１号石棺墓に比べて小形であるが，全体が残存していた。石棺の規模は内法で長さ0.7m，幅0.15～0.2mあり，蓋石が残存していた。蓋石は４枚で，長辺28～45cm，短辺10～35cm，厚さ４～９cmの台形の板石である。棺幅に相応して蓋石は南ほど大きい。蓋石の間は３～４cmの隙間がある。両小口石は１枚，両側石は３枚の板石で構築されている。石の大きさは，南小口石は長辺30cm，短辺18cm，厚さ９cm，北小口石は長辺18cm，短辺16cm，厚さ６cmである。東側石は長辺17～30 cm，短辺12～18 cm，厚さ７cm，西側石は長辺18～32 cm，短辺10～15 cm，厚

さ８～11 cmである。小口石・側石ともそれぞれの石を横長に立てている。

掘方の上面形は隅丸長方形で，規模は長さ1.0m，幅0.45～0.58m，深さ約0.2mである。底面もほぼ平坦な隅丸長方形で，規模は長さ0.85m，南小口幅0.4m，北小口幅0.3mである。この掘方に小口石・側石を据付け，石棺内に厚さ５cmほど土を入れて固め，床面としている。側石のうち東側の南端石と西側の中央石は底面に直接置いているが，その他の石はこれらより縦方向が短い石なので，下に土を入れて高さを調節している。小口石・側石の間は隙間が多く小礫で補強する箇所がある。掘方の基盤となった土層（地山層）は花崗岩が十分風化しておらず，岩盤に近い状態である。石材は，本遺跡周辺に広く分布する花崗岩である。人骨や遺物は出土していない。石棺の主軸方向はＮ２° Ｗである。頭位は幅の広い南と推定される。また，墳丘等の存否は，地山を直接掘り込んで作っていること，溝などの施設がみられないことなど１号石棺墓と同様な状況なので，不明である。

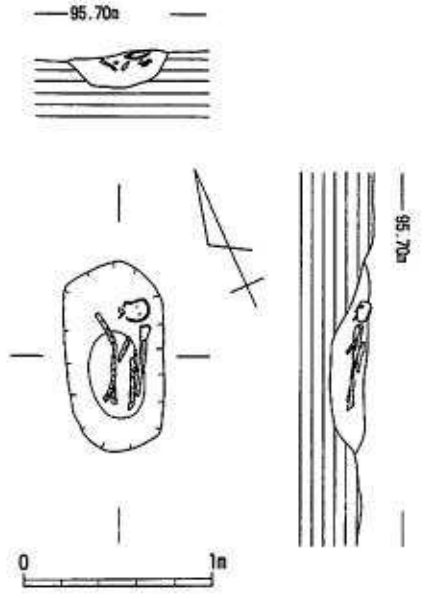


第Ⅲ-4図　城根遺跡２号石棺墓実測図（1:40）

土壙墓（第Ⅲ－5図、図版４）

尾根から少し下がった北西斜面に位置する土壙墓である。主軸は尾根線に斜交し，等高線にほぼ平行する。２号石棺墓の北約４mの位置にある。

上部が削平されており，不明な点が多い。長さ1.0m，幅0.5m，深さ約0.2mの壙内に人骨が残存していた。土壙の埋土は，茶褐色礫混土で，畑の耕作土に近似している。頭を北に，顔はうつぶせ状態であった。主軸方向はＮ24° Ｅである。木棺あるいは布などの痕跡は確認できなかった。遺物は出土していない。



第Ⅲ-5図　城根遺跡土壙墓実測図（1:40）

（２） 出土遺物（図版５）

遺物は土器が少量出土した。出土した場所は，１号石棺墓の上部埋土や調査区全域の地山直上部で，いずれも現代まで耕作していた畑の耕作土である。箱式石

棺墓や土壙墓に直接的に伴うものではない。

出土した土器は細片で摩滅が著しいため，様相が不明な点が多く図示することも困難である。素焼の土器は土師器と推定でき，その他は陶磁器である。図版５の上段は土師器である。１は甕の口縁部，２は甕の胴部と推定するものである。１の厚さは7.0㎜，口縁端部は丸くおさめる。外表はヨコナデ調整，内面はハケ調整し，端部はヨコナデ調整している。焼成は良好で，胎土は１㎜前後の砂粒が多い。色調は淡赤褐色である。２の外表はハケ調整，内面はヘラケズリ，器壁の厚さは1.5～3.0㎜，焼成は良好で，胎土は１㎜前後の砂粒が多い。色調は暗茶褐色・淡赤褐色である。なお，図版５の下段は陶磁器で，近・現代のものである。

３　ま　と　め

調査の結果，箱式石棺墓２基，土壙墓１基を検出した。そのうち土壙墓は人骨の一部が残存する。時期は不明であるが，検出状況や土壙埋土から見て，近世以降の時期の可能性が大きい。ここでは，２基の箱式石棺墓について検討し，まとめとしたい。

（１）　箱式石棺墓の特徴

１号石棺墓の石棺の内法は長さ約1.7m，幅約0.3mで，成人用のものであろう。２号石棺墓の石棺の内法は長さ0.7m，幅約0.2mあり，蓋石が残存している。大きさからみて，小児用のものであろう。２基は舌状に延びる尾根の北西斜面に造られている。御調川を北に遠く望む（約800m離れている）谷間で，谷間が開けた方向の約500m北側には曽川１号遺跡がある。２基の石棺の構築方法は共通する。側石・小口石は横長に設置し，石の間は小礫を詰めて仕上げている。石材は花崗岩で，床面は土である。主軸方向もほぼ共通する。ただ，両者の間隔は約3.5mで，規模が大小の関係にある。墳丘や墓域を画する溝などの構造物は削平が著しくみられない。本来の姿かどうかは不明である。

（２）　箱式石棺墓の時期

１・２号石棺墓とも，副葬品は残存せず，関連する遺物もなく，時期比定に決め手を欠く。石棺の構造，特に小型の石を横長に据え付けることは，弥生時代的な古い様相である[1]が，古墳時代でも存在する。御調町後口山古墳（５世紀中～末頃）や高尾山古墳（５世紀末頃）の箱式石棺の例[2]では，側石を横長に据え付ける場合でも，大型の石であったり縦長に据え付ける石と混在したりして，その構造は相違する。御調町内では城根遺跡と同様な構造の類例はまだ確認していない。城根遺跡の属する御調川流域やその下流域の府中市・福山市新市町では，弥生時代の箱式石棺墓は明確には確認していない[3]が，一部弥生時代終末期に遡る例が報告されている[1]。こうした状況から判断して，城根遺跡の箱式石棺墓の築造時期を，現状では弥生時代終末から古墳時代前半頃と推定しておく。

（3） 曽川１号遺跡との関係

曽川１号遺跡は城根遺跡に一番近い集落であり，弥生時代後期後半から終末の時期の遺構が多い。集落内では，同時期の墳墓は土器棺墓を除いて確認しておらず，墳墓の形態や場所などは不明である。城根遺跡と曽川１号遺跡とは約500m離れているが，城根遺跡は谷間のやや奥で谷間を塞ぐような場所にあり，曽川１号遺跡を見下ろすような立地をしている。城根遺跡は曽川１号遺跡に居住した人々の墳墓であった可能性があり，曽川１号遺跡の解明も含めて，今後の検討課題である。

註

(1) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅱ（本文編） 1993年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『入野中山遺跡』 1994年

(2) 御調町教育委員会『御調郡御調町高尾古墳発掘調査報告　付 御調町後口山古墳発掘調査概報』 1971年

(3) 梅本健治「墳墓からみた地域性」『研究紀録』Ⅸ　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　1999年

(4) 福山市城山Ａ遺跡・同市法成寺サコ遺跡など。
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『城山』 1996年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『法成寺サコ遺跡　法成寺本谷古墳』 1998年

Ⅳ　曽川１号遺跡（Ｅ地区）

１　調査の概要

（1）　遺跡の状況（第Ⅳ－１図，図版６）

曽川１号遺跡は，尾道市御調町大町字曽川・米田に所在する。遺跡は御調川の南側，牛の皮城が築かれた丘陵の裾部に立地し，調査前は竹藪・果樹園・畑地・宅地として利用されていた。西側には御調川に注ぐ江国川が北流し，標高は72～85mで，御調川との比高は12～25mである。

曽川１号遺跡は工事の優先順に調査を行ってきたため，調査箇所が散在し，調査箇所名も統一されていなかった。このため，Ａ～Ｄ地区の報告書作成の際に調査時期の順に地区名を付した（第Ⅳ-１表・第Ⅳ-１図参照）。調査は平成14年度にＡ地区から開始し，平成15年度にＢ～Ｅ地区の調査を行った。これらの調査を通して，縄文時代から中世にかけて長期間にわたり集落が営まれていたことが確認された。

Ｅ地区は，遺跡の北端で丘陵の先端部に位置し，標高が72～73mで遺跡のなかで最も低い地点に立地している。調査前には水田として利用され，湧水が激しい状況で調査を行った。

第Ⅳ-１表　曽川１号遺跡調査地区名称一覧表

調査期間 年度	調査期間 月日	調査時名称	報告名称	事業名	報告書
平成14年度	10月21日～１月17日	平成14年度調査区	Ａ地区	中国横断自動車道尾道松江線建設事業	（2）第18集
平成15年度	４月７日～５月23日	Ｐ２第一調査区	Ｂ地区		
		Ｐ２第二調査区	Ｃ地区		
	12月１日～12月19日	Ｐ４	Ｅ地区		（4）第22集
	１月６日～２月５日	Ｐ１	Ｄ地区		（2）第18集
平成16年度	４月14日～４月28日	防火水槽	Ｆ地区	大町地区防火水槽設置事業	第13集＊
	６月７日～８月６日	Ｐ３	Ｇ地区	中国横断自動車道尾道松江線建設事業	
		Ｐ３側	Ｈ地区		
		Ｐ４側	Ｉ地区		
	１月11日～３月４日	Ｐ２	Ｊ地区		
平成17年度	４月11日～７月１日	Ｋ地区			
	７月11日～10月７日	Ｌ地区		一般国道486号道路改良工事	
平成18年度	９月11日～12月22日	Ｍ地区			

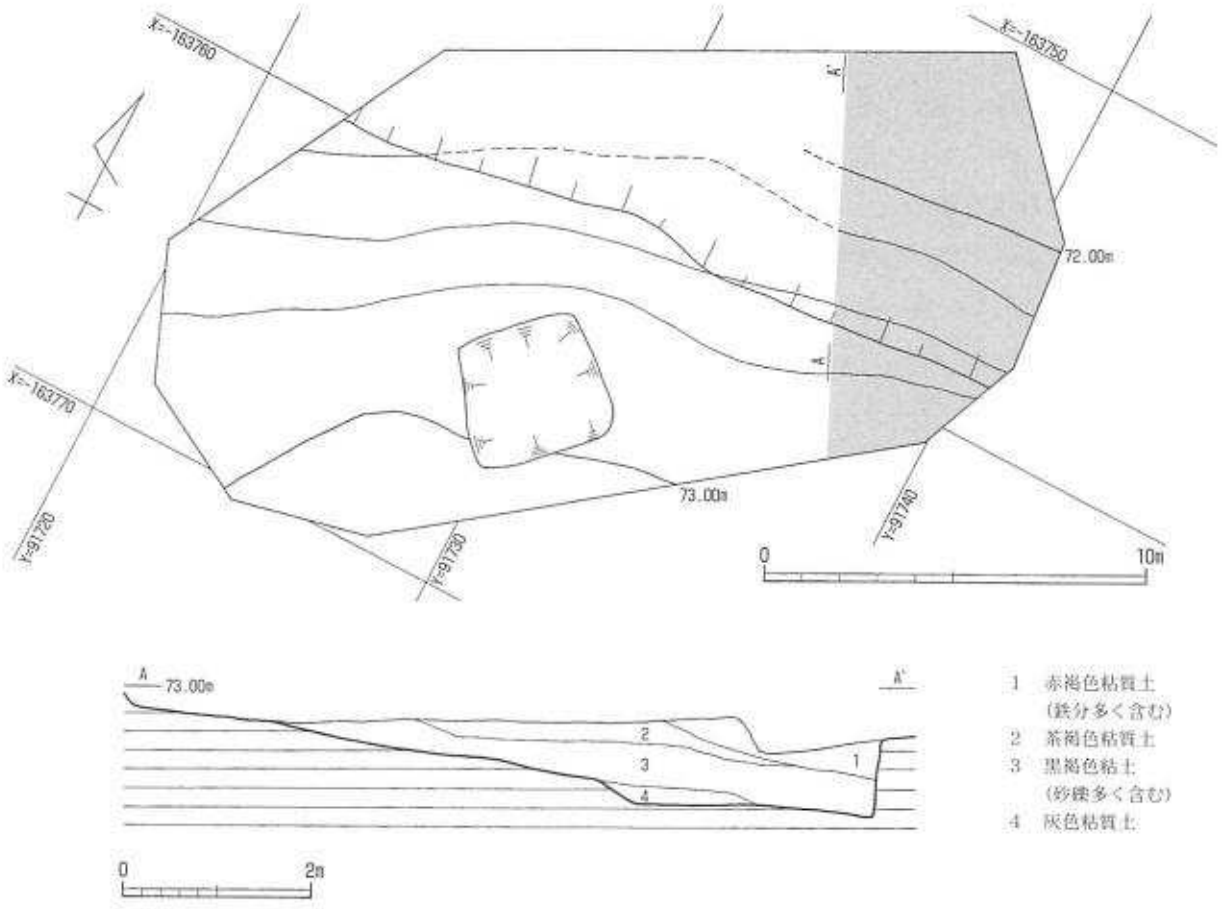
＊　財団法人広島県教育事業団『曽川１号遺跡　大町地区防火水槽設置事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』2005年

第Ⅳ-1図　曽川1号遺跡周辺地形図(1:2,000)

（2） 調査の方法・概要（第Ⅳ－２図，図版７）

Ｅ地区での基本的な土層は耕作土・床土・暗褐色土・地山である。調査は，まず耕作土から暗褐色土まで重機によって表土剥ぎを行い，その後遺構検出を行ったが，住居跡などの明確な遺構は確認されなかった。ただ，調査区北側で広い範囲の落ち込みがみられたため，南北方向の５本のトレンチ（１～５トレンチ）を設定して掘り下げ，さらに調査区の北東隅の１～２トレンチの間を拡張して掘り下げた。その結果，調査区北側で北方向に向かって緩やかに傾斜する落ち込み（以下「北側落ち込み」という。）を確認した。北側落ち込み埋土の基本的な土層は上から赤褐色粘質土・茶褐色粘質土・黒褐色粘土・灰色粘質土・地山である。

出土遺物は土器（縄文土器・弥生土器・須恵器・瓦質土器・陶磁器），瓦，石器（石斧・磨石・敲石・台石）などがある。北側落ち込みの灰色粘質土を中心にした下層から縄文土器が，黒褐色粘土を中心にした中層から弥生時代後期の土器（以下「弥生後期土器」という。）が多く出土した。また，赤褐色粘質土・茶褐色粘質土を中心にした上層や調査区表土から，古代の須恵器や中世の遺物が出土した。



第Ⅳ-２図　曽川１号遺跡Ｅ地区遺構配置図（1：200）及び北側落ち込み土層断面図（1:80）
（アミ目は深掘部分）

2　出土遺物

北側落ち込みからコンテナ75箱分の多量の遺物が出土した。そのほとんどは縄文土器と弥生後期土器であった。縄文土器は小さな破片が多く，弥生後期土器は完形に近いものが多くみられた。須恵器も比較的多くみられたほか，後期以外の弥生土器や輸入陶磁器・陶器・瓦質土器・瓦・石器が若干出土している。ここでは，縄文土器，弥生後期土器，その他の土器と瓦，石器に分けて報告する。

(1)　縄文土器(1～109)(第Ⅳ-2～7図，図版8～12・24)

縄文土器は，主に沈線などで文様を施した有文土器と文様を施さない無文土器があり，無文土器の破片が約8割を占め圧倒的に多い。器形については細片が多く，明確にできる資料は少ないが，深鉢・浅鉢がみられ，深鉢が圧倒的に多いようである。なお，粗製品と精製品とがあるが，遺存状況が悪くはっきりしないものが多い。これらのことから，ここでは有文土器，無文土器，底部，その他に分けて報告する。

有文土器(1～72・90～94)

有文土器は，縄文を有するものと縄文を有しないものがある。

A　縄文を有するもの(1～31・90～94)　1～12は口縁部片，13～21は胴部片であるが，いずれも口縁部から胴部に文様が連続して広がるものと思われる。1～4は口縁端部を上方に著しく肥厚させた波状口縁で，1・2は波頂部に円形の押圧文とその周辺に沈線文を施している。5は口縁端部には刻目文を施し，その下方に「J」字文がみられる。6は口縁部外面に渦巻文を施し，渦巻文の下方には直径1.5cmほどの円孔を穿っている。7は口縁部外面の貼付凸帯の下方に半円の沈線文を同心円状に施している。8は外面に3本沈線を，11・12は口縁部の下方に並行する沈線文をそれぞれ施している。13～20は外面に曲線や直線的な沈線文がみられる。そのうち，13～15は「J」字文，16～18は「J」字文の変化形と考えられる。21は橋状把手を貼付けた胴部片で，直径0.5cmほどの円孔を把手の上下方向に貫くように穿っている。

22～31は口縁部と胴部の間で文様が連続せず，無文の部分が存在する。22～26は口縁端部を上方に著しく肥厚させた波状口縁で，23・24は波頂部に円形押圧文がある。22～24は口縁部外面に沈線による区画文を，25～28は口縁部外面に並行する沈線文を，29・30は口縁部の外面に並行する沈線文を施している。31は口縁部を外側に肥厚させ縄文を施している。

なお，90～94は浅鉢で，口縁部や胴部外面に縄文を有している。90・94は胴部中位から屈曲して外反する形態である。94は屈曲する部分に刺突文を，91は口縁端部に刻目文を施している。90・92は外面に赤色顔料を塗彩しているようである。

B　縄文を有していないもの(32～72)　32～38は口縁部を著しく肥厚させた波状口縁で，38以外は沈線文・刻目文を施している。35は口縁部の波頂部に円形押圧文とその周辺に沈線文を施している。39は口縁部付近と思われる破片で複雑に肥厚しており，端部の一部に刻目文を施している。40～64はやや肥厚するか全く肥厚しない口縁部で，沈線文・刻目文・刺突文を施している。

40～43は波状口縁で，40・41は口縁部の波頂部に円形押圧文を，43は口縁部の波頂部に渦巻文を施している。44～53は口縁端部に沈線文を施し，49以外は刻目文も合わせて施している。54・55は口縁端部に沈線文を，56は口縁部下の外面に縦方向の沈線文を４条施している。57は口縁部外面に横方向の太くて短い凹線文を，58は口縁部外面に竹管状工具による刺突文を，59は口縁部外面下の貼付凸帯に刺突文を施している。60は口縁部外面下の貼付凸帯に刻目文を施し，口縁部内面に刺突文を円形状に施している。61～64は口縁部片，65～72は胴部片で，外面に曲線や直線的な沈線文を施している。

無文土器（73～89・95・96） 沈線などの文様を有さないもので，外面の調整が条痕文の粗製品が多い。口縁部が肥厚するものと口縁部が肥厚しないものがある。

ａ　口縁部が肥厚するもの（77～79）　77は口縁部の内面が肥厚し，78･79は外面が肥厚している。77は口縁端部に刻目文を施している。

ｂ　口縁部が肥厚しないもの（73～76・80～88）　73～76は口縁端部に刻目文を施し，80～88は刻目文を施していない。80～85は口縁部が外反するのに対し，86～88は口縁部が内傾している。83は口縁部下方に細い線状の刺突文を縦に並べている。76は口縁部下方に焼成後の穿孔が１か所みられる。

なお，89は焼成前の穿孔が３か所みられる胴部片である。また，95・96は浅鉢で，無文のものである。緩やかに内湾して立ちあがる形状で，どちらも内面の調整はヘラミガキである。

底部（97～109） 97～103は凹底，104～106は平底である。凹底が圧倒的に多くみられる。凹底のうち，97～101はやや深い凹底，102・103はやや浅い凹底である。平底のうち104はやや凹んでおり，底面に木の葉状の圧痕がみられる。

なお，107～109は焼成前に底部に複数の円孔を穿った多孔底土器である。107はやや大きめの円孔（直径２cm前後）を８個以上，108・109は小さめの円孔（直径0.6～0.8cm）を６個以上ないし９個以上有している。108は浅い凹底である。

その他（図版24ａ～ｄ） ａ～ｄは湾曲する棒状の土製品で，第Ⅳ-３図21のような橋状把手の部分と考えられる。ａ・ｂは幅がほぼ均一であるのに対し，ｃ・ｄは一端が幅広くなっている。この違いは土器本体の取り付け箇所の違いに起因するのかもしれない。ａの片側面に粗い縄文がみられ，ｂ・ｃの中央部に円形の刺突文がある。

（2） 弥生後期土器（110～210）（第Ⅳ-8～15図，図版13～22・24）

弥生後期土器[1]は壺・甕・鉢・高坏・器台・手づくねの椀などがある。

壺（110～126） 複合口縁のものと単純口縁のものがある。

Ａ　複合口縁のもの（110～119・121～124）　口縁端部の立ち上がりが内傾するものと口縁端部の立ち上がりが直立または外反するものがある。

ａ　口縁端部の立ち上がりが内傾するもの（110～119・121）　110・112～117・119・121は口縁部外面に凹線を有し，111は不明瞭である。115は口縁部外面の凹線文の上に２列の竹管文を施して

いる。頸部は110～113・115～119・121はやや長いのに対し，114はやや短く様相を異にしている。111・118・119は頸部に沈線を有し，117は頸部に「ノ」の字状の刺突文を有している。114も胴部上位に117と似た「ノ」の字状の刺突文を有している。胴部は全般的に最大径がやや上位にあり，緩やかに湾曲するものが多い。また，内面の調整は全般的に胴部中位～上位までヘラケズリのものが多い。

なお120は，胴部上位が「く」の字に屈曲する算盤玉の形状で，やや長い頸部に沈線，屈曲部分の上位に凹線を有している。119・120は頸部の沈線や調整および胎土などがよく似ており，同一形態のものと思われる。

b　口縁端部の立ち上がりが直立または外反するもの（122～124）　口縁部の拡張が著しく，口縁部外面には凹線を有していない。頸部はやや短めである。内面の調整は頸部直下までヘラケズリである。124は胴部が緩やかに湾曲し，胴部上位に櫛描きの波状文・直線文を有している。

B　単純口縁のもの（125・126）　125は口縁端部に凹線をもたず，126は口縁端部がやや外側にやや拡張し凹線を有している。頸部はいずれも短く立ち上がり，胴部は126が「く」の字に屈曲する算盤玉の形状で，屈曲部分の上位に凹線を有しており，120の胴部形態によく似ている。

甕（127～139・178～180）　壺と同様に複合口縁のものと単純口縁のものがある。

A　複合口縁のもの（127・128・130・132～135）　これも壺と同様に口縁端部の立ち上がりが内傾するものと口縁端部の立ち上がりがやや外反するものがある。

a　口縁端部の立ち上がりが内傾するもの（127・128・130・132・133）　いずれも口縁部外面に凹線を有している。胴部は最大径がやや上位にあり，緩やかに湾曲している。130は胴部上位に「ノ」の字状の刺突文を施している。133の胴部上位には櫛歯状刺突文を施し，その上方にタタキ目が残っている。胴部内面の調整は胴部中位～上位までヘラケズリである。

なお129・131は，口縁端部の立ち上がりが内傾するものの胴部とよく似ており，本来の口縁部も同様の形態と思われる。131は胴部上位に貝殻腹縁状の刺突文を施している。

b　口縁端部の立ち上がりがやや外反するもの（134・135）　口縁部の拡張が著しく，口縁部外面に凹線を有していない。胴部は最大径が中位にあり，緩やかに湾曲している。胴部内面の調整は頸部直下までヘラケズリである。

B　単純口縁のもの（136～139）　口縁部が頸部から短く外反するもので，136～138は口縁端部上面がやや凹んでいる。胴部内面の調整は，136～138は頸部直下までヘラケズリ，139はヘラミガキである。

なお，178は甕のミニチュア土器で，単純口縁のものである。179・180も甕のミニチュア土器の底部と思われる。

鉢（140～157）　大型・中型のものと小型のものに分けられる。

A　大型・中型のもの（140～148）　複合口縁のものと単純口縁のものがある。

a　複合口縁のもの（140～143）　いずれも口縁部外面に凹線を有し，胴部が「く」の字に屈曲しており，壺120・126の胴部とよく似ている。

b　単純口縁のもの（144～148）　144～146は口縁部を外方に若干拡張し，その上端部に凹線を有する。144・145は胴部が「く」の字に屈曲し，146は胴部上位に凸帯をもつ。一方，147・148は口縁部を丸くまたは尖り気味に終わらせている。胴部は緩やかに立ち上がる形態で，147は胴部外面に浅い凹線をもっている。

B　小型のもの（149～157）　149～152は頸部で屈曲し，胴部最大径が中位にある。149は複合口縁，150～152は単純口縁のものである。149・150は胴部が「く」の字に屈曲し，151・152は胴部が湾曲する。153～157は頸部が短く立ち上がり，単純口縁である。153～156の胴部上位は外側に張り出す。157は胴部を「く」の字に屈曲し，口縁部は大きく外反する。153は平底，157は低い高台をもっている。

高杯（158～171）　やや大型のものとやや小型のものに分けられる。

A　やや大型のもの（158～166）　158～160は杯部片で，158は体部中位で屈曲して立ち上がるもので，口縁端部が外方に若干拡張し，その上面に凹線をもつ。159・160は口縁部が大きく開くもので，159は口縁内面に凹線をもつ。161～166は脚柱部片で，163～166の脚端部は上下に拡張し，その外面に凹線をもつ。164・165の脚柱部に円孔を有している。

B　やや小型のもの（167～171）　167・168は杯部片で，互いによく似た形態である。体部中位が「く」の字に屈曲し，口縁部が上方に大きく拡張している。口縁部および体部中位の外面に凹線を有する。169はほぼ完形のもので，体部中位が屈曲し，口縁部が大きく開いている。169～171の脚端部はいずれも下方に拡張するもので，いずれも脚柱部に円孔を有している。171は169・170とは異なり杯部との接合部分が中空ではなく，充填されている。なお，167・168・171の色調は赤褐色で，よく似た胎土である。

器台（172～177）　172・173は受部・台部の両端が拡張し，その外面に凹線を有する。台部下位にも凹線をもち，その上方に円孔を穿っている。174は受部，175は台部の破片で，175は172に似た形態と思われる。176は台部外面全体に凹線が施され，172・173・175と異なる様相である。

なお，177は鼓形器台の台部片で，筒部外面の下に段をもち，裾部が大きく開いている。

手づくね土器（181～192）　いずれも内外面に指頭圧痕をよく残している。やや丸底気味で体部は丸味をもつものが多いが，182・186は平底気味で体部は直線的である。181～190はやや厚手，191・192はやや薄手である。

底部（193～207）　193～200は平底，201・202はやや上げ底，203は丸底気味である。201は厚手で，200もやや厚手である。なお，204～207は有孔土器である。いずれも平底の底部に直径0.6～1.0cmの円孔を穿ったものである。

脚部（208～210）　208・209は高杯で，208は充填の一部が剥離したもの，209は小型のものと思われる。210は低脚杯の脚部と思われる。

その他（図版24ｅ～ｈ）　ｅ～ｇは籾圧痕の残る土器片である。籾圧痕と思われる痕跡は，甕135・鉢152の胴部外面にも残っている。また，ｈは線刻の土器片である。「ゟ」という形にみえる。

（3） その他の土器と瓦（211～235）（第Ⅳ－15と16図，図版22～24）

弥生土器（後期以外）（211～214）

甕（211～213） いずれも胴部片で，211・212はヘラ描き沈線と刺突文，213は櫛描き沈線を施している。211・212は前期末，213は中期初と思われる。

器種不明の土器（214） 外反する口縁部片で，下部に竹管文を施している。時期は不明である。

須恵器（215～227・229・232）

杯蓋（215～219） 215・216は平坦な天井部から緩やかに内湾し，口縁端部は丸く終わるものである。218・219は平坦な天井部から大きく開き，口縁端部は下方に短く屈曲している。217は天井部に扁平なつまみがつき，219は天井部に輪状のつまみがつく。215・216は古墳時代後期，217～219は奈良～平安時代と推定される。

杯身（220～224） 220は直線的に開く口縁部片，221・222は平底である。223・224は平坦な底部に外側に強く張り出す断面台形状の高台をもつ。いずれも奈良～平安時代と推定される。

壺（225） 長い頸部からラッパ状に口縁部が開くものである。頸部中央に沈線を1条めぐらしている。奈良～平安時代と推定される。

高坏（226） 杯部との接合部分を含む，やや長い脚部の破片である。内面に成形時のしぼり目が残る。奈良～平安時代と推定される。

鉢（227） 扁平で上方に湾曲する把手を有するもので，把手を貼り付けた体部中央に沈線を1条めぐらしている。奈良～平安時代と推定される[2]。

脚部（229） 裾部が大きく開く高杯の低い脚部の破片である。時期は不明である。

甕（232） 頸部が「く」の字に屈曲するもので，胴部外面は平行タタキを施す。時期は不明である。

瓦質土器（228）

鉢（228） 体部は外傾して立ち上がり，口縁部は短く，口縁端部は平坦である。内面にハケ目を施している。中世後半頃と推定される[3]。

輸入磁器（230）

青磁　椀（230） 体部下半から高台部の破片で，高台先端部を除き内外面に緑色の半透明の釉をかけている。龍泉窯系青磁椀Ⅲ類に相当し，13世紀中頃～14世紀初頭と位置づけられている[1]。

陶器（231）

甕（231） 口縁部が緩やかに外反する亀山系の甕で，胴部外面は格子状のタタキを施す。中世前半（鎌倉期）と推定される。

擂鉢（233） 体部は直線的に立ち上がり，口縁部は著しく肥厚する。内面には8条単位の擂り目を施す。時期は17世紀以降のものである。

瓦（234・235）

平瓦（234・235） いずれも凹面は布目痕，凸面は縄目痕を残す平瓦の破片である。奈良～平安時代と推定される。

（4） 石器（236～253）（第Ⅳ－17・18図，図版25・26）

石器は，敲石が多く，石錘・石斧・磨石・台石・刃器が若干出土した。いずれも時期は不明であるが，縄文時代あるいは弥生時代に属するものと思われる。

刃器（236） 部分的に二次加工の痕跡を残す剥片で，側縁部に微細な剥離痕を残している。用途は不明である。

石錘（237・238） 237は長円形状で薄く，238は円柱状でやや分厚いものである。237は重さ64g，238は重さ124gである。いずれも自然石の両端に浅い抉りがみられ，石錘と考えられる。

石斧（239・252） 239は刃部のみ残る破片で，全面がよく研磨されている。252は打製石斧状の石器であるが，全体的に摩滅し，使用痕跡は不明である。

磨石（240・249・250） 240は小型で薄く，249・250はやや大型で厚手のものである。249は長い円柱状で片側の側縁が磨れて平滑である。250は短い円柱状のもので，表面がもろく全体的にひびが入っており，熱を受けているようである。

敲石（241～248・251） 241～244はやや小型，245～248・251はやや大型のものである。241～246は長円形の両端に敲打痕がみられ，251も同様の形態と思われる。247は長方形状，248は三角形状で，247は両側縁と先端部に，248は角の部分に敲打痕がみられる。

台石（253） やや大型のもので，中央部分が浅く窪み石皿状になっている。

註

（1） 本書でいう，弥生時代後期土器の型式や時期，すなわち，後期をⅤ－1期（前葉）・Ⅴ－2期（中葉）・Ⅴ－3期（後葉）および庄内併行期（末）の4期に分けて記述することについては，次の文献による。

財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2） 曽川1号遺跡（A～D地区）』 2006年

伊藤実「備後地域」『弥生土器の様式と編年-山陽と山陰編-』木耳社 1992年

（2） 近隣の三原市小林1号窯跡・同市熊ヶ迫第2号窯跡出土例などによく似ている。

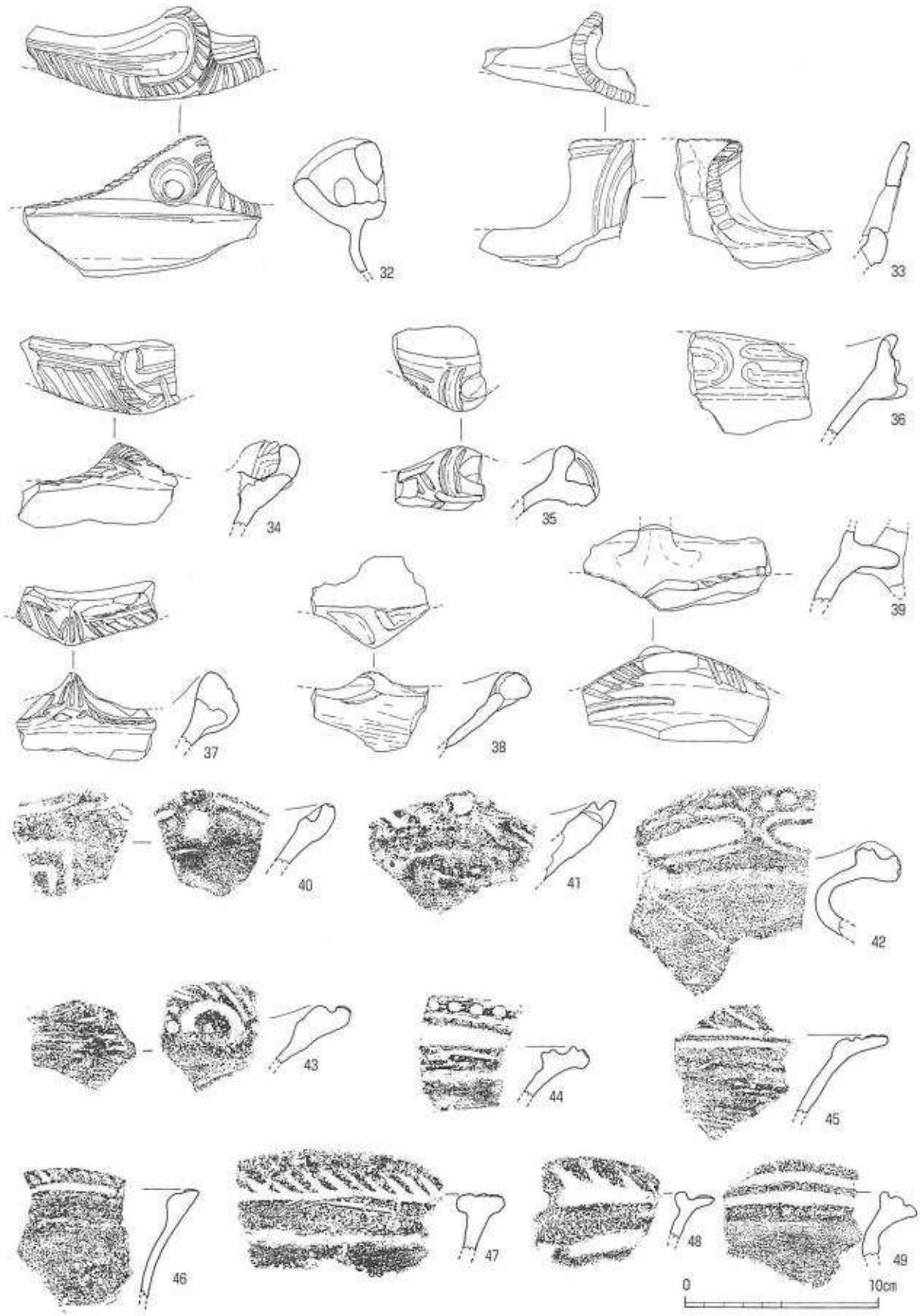
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『小林1号窯跡発掘調査報告』 1984年

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『熊ヶ迫第1～3号窯跡 県営かんがい排水事業（三河地区）に係る発掘調査』 1996年

（3） 228～233については，広島県立歴史博物館 鈴木康之氏のご教示を得た。

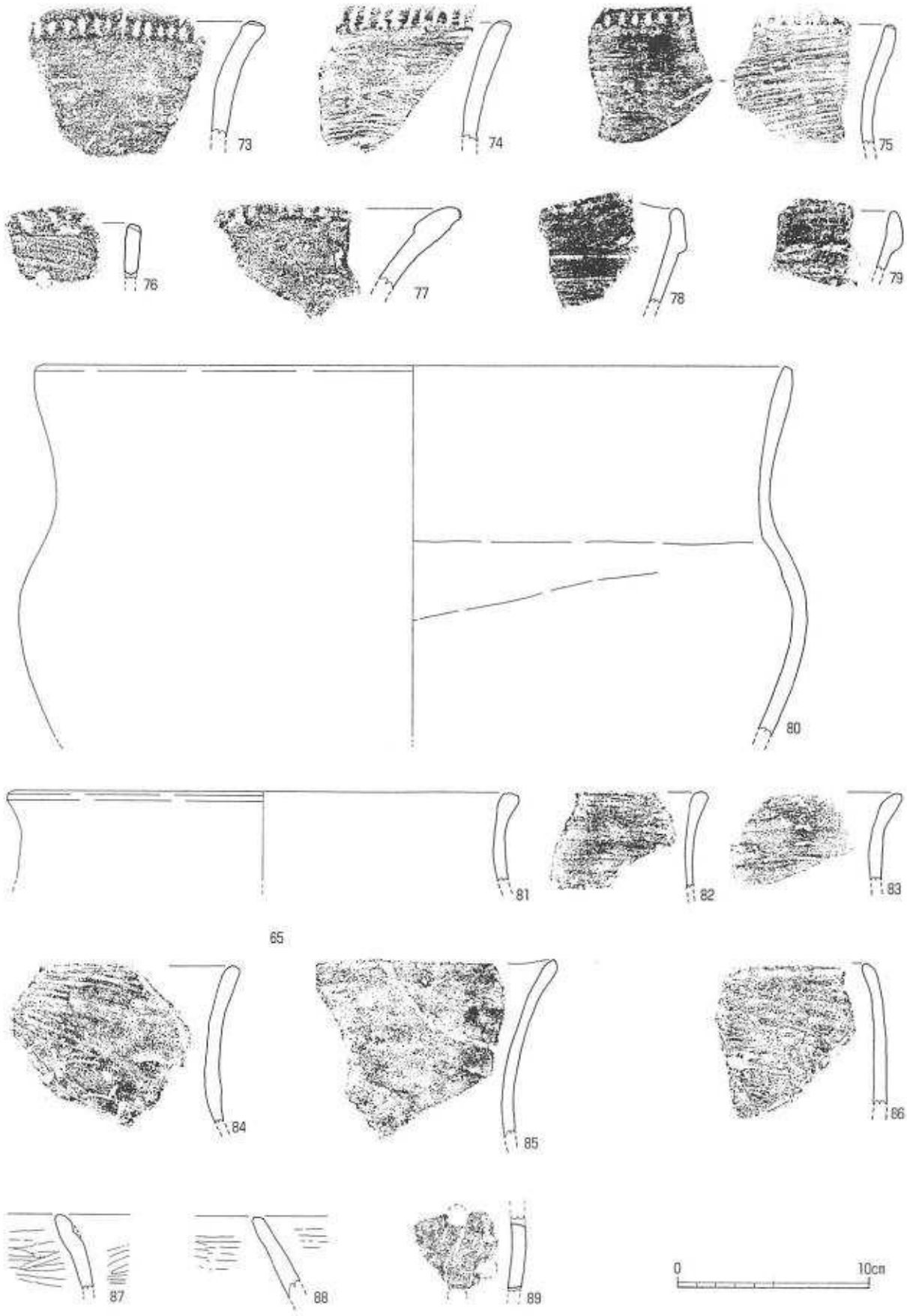
（4） 太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡ⅩⅤ-陶磁器分類編-』 2000年

第Ⅳ-3図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（1）（1：3）

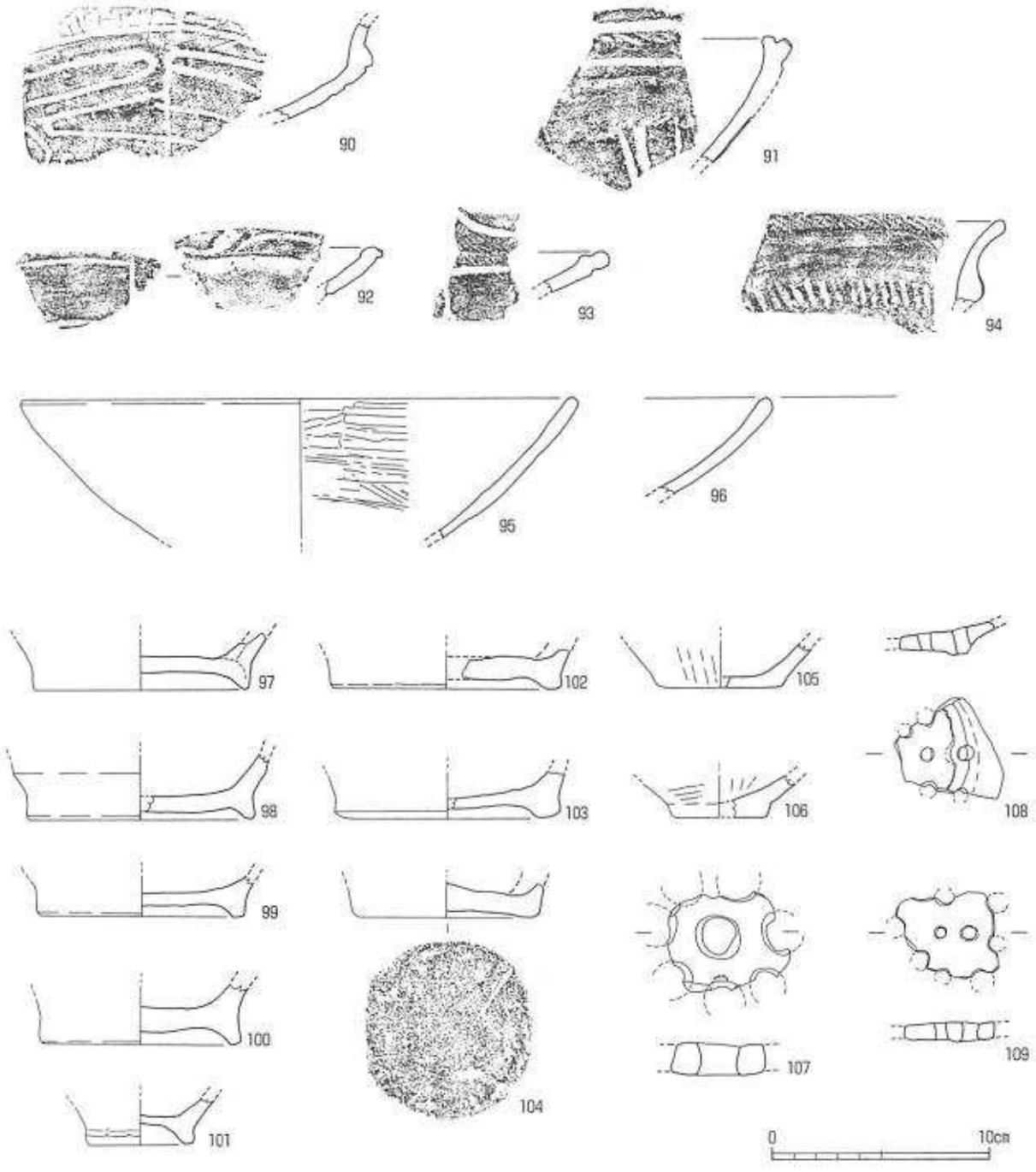


第Ⅳ-4図　曽川１号遺跡（E地区）出土遺物実測図（2）（1：3）

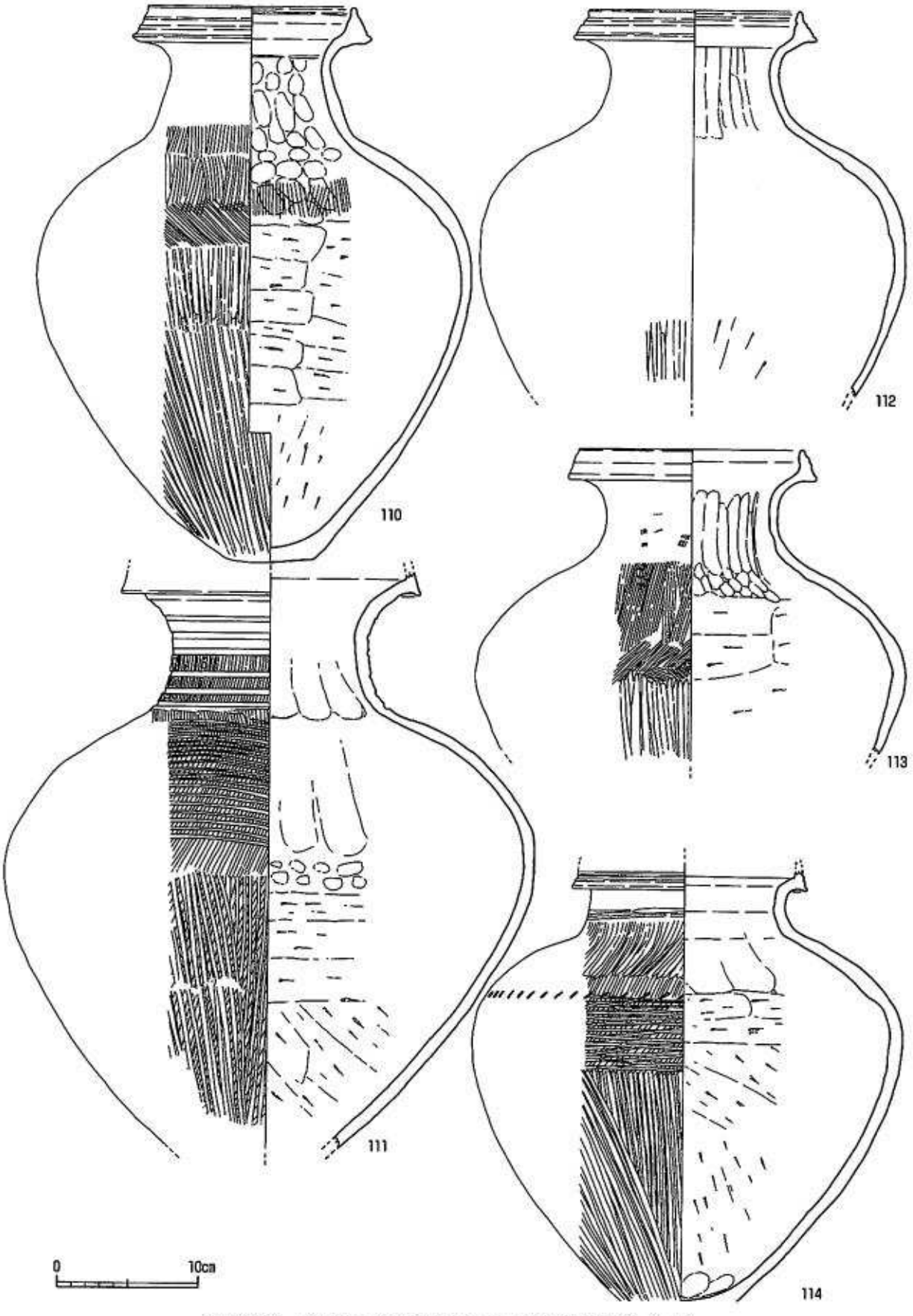
第Ⅳ-5図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（3）（1：3）



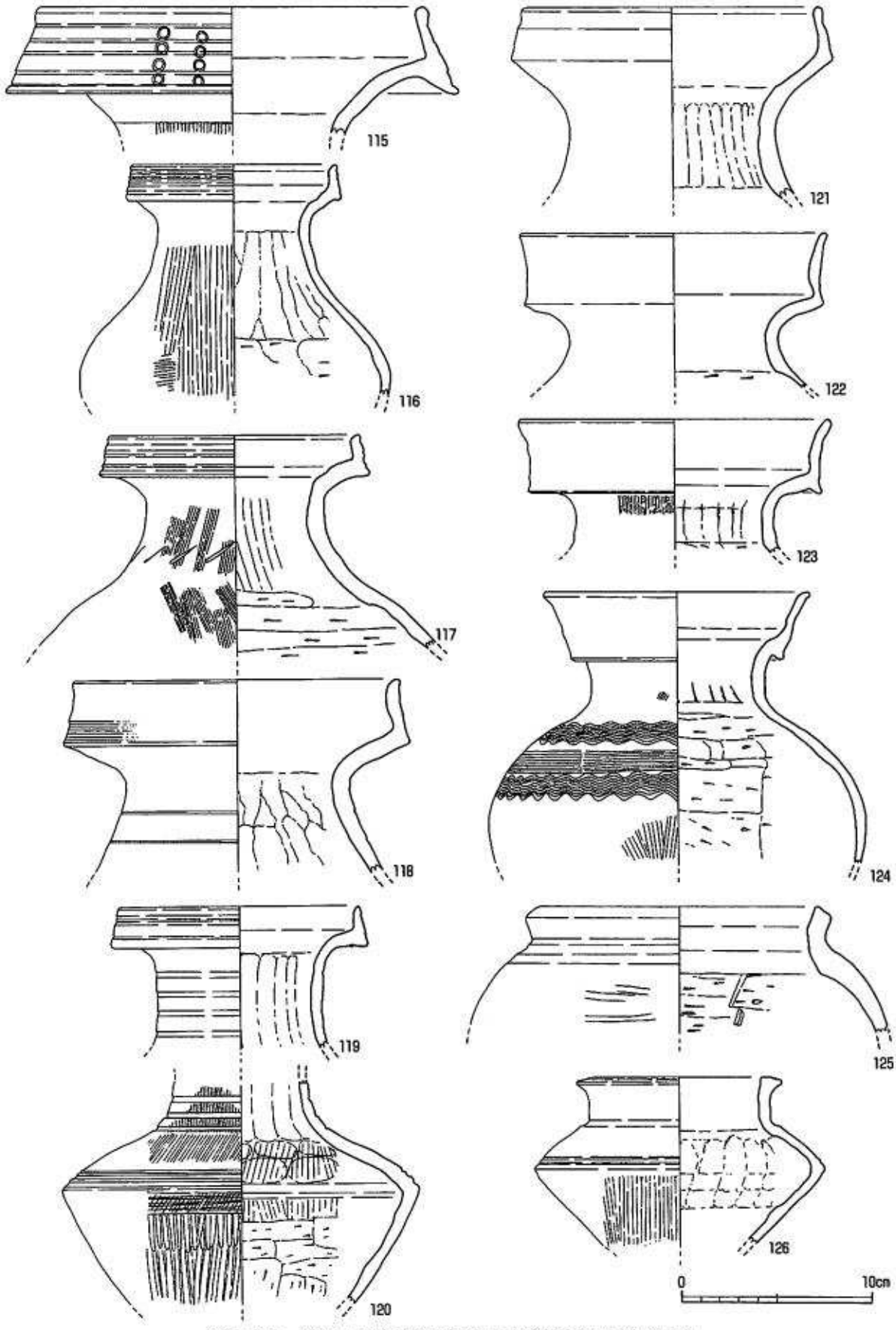
第Ⅳ-6図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（4）（1：3）



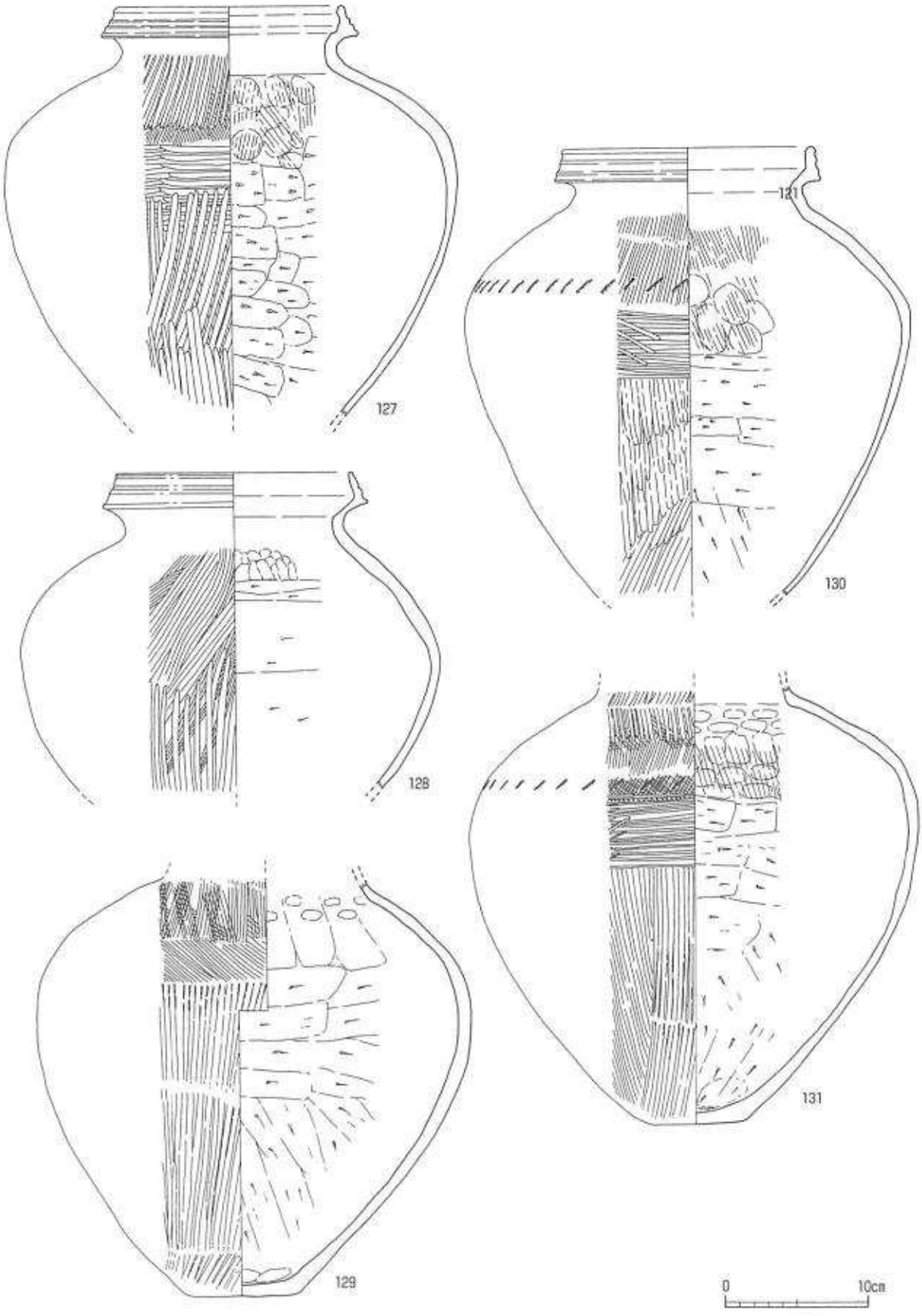
第Ⅳ-7図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（5）（1：3）



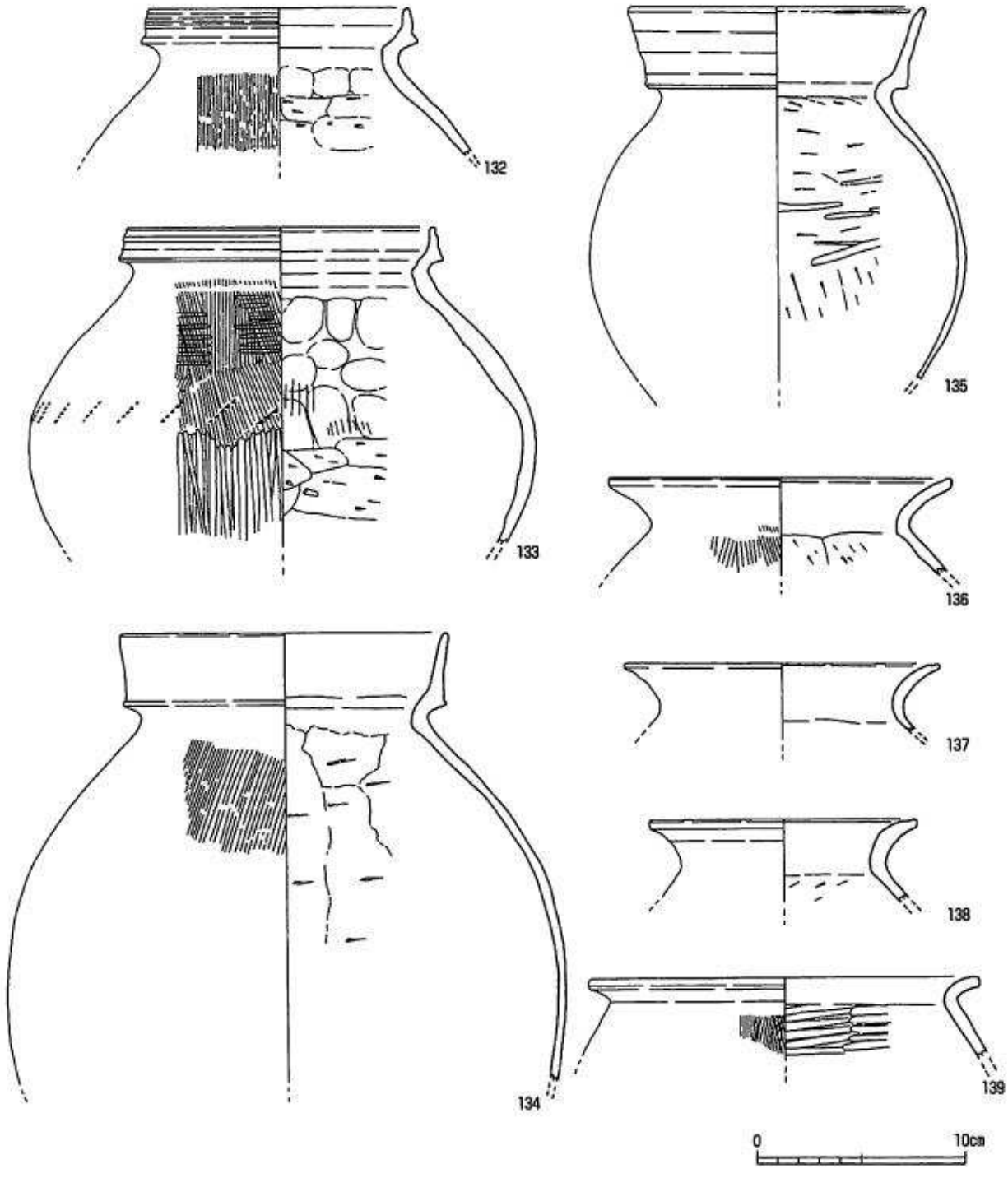
第Ⅳ-8図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（6）（1：4）



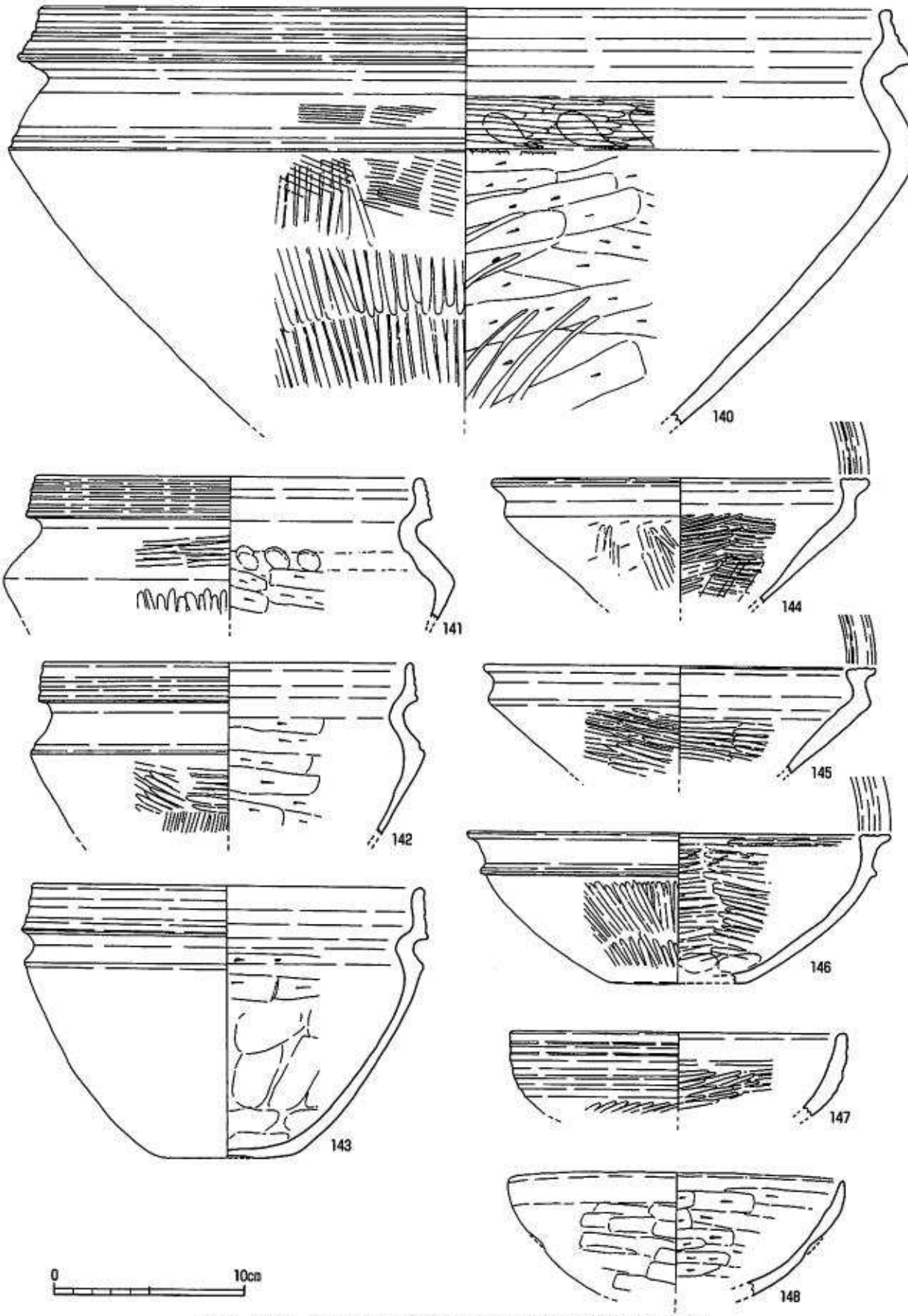
第Ⅳ-9図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図(7)（1：3）



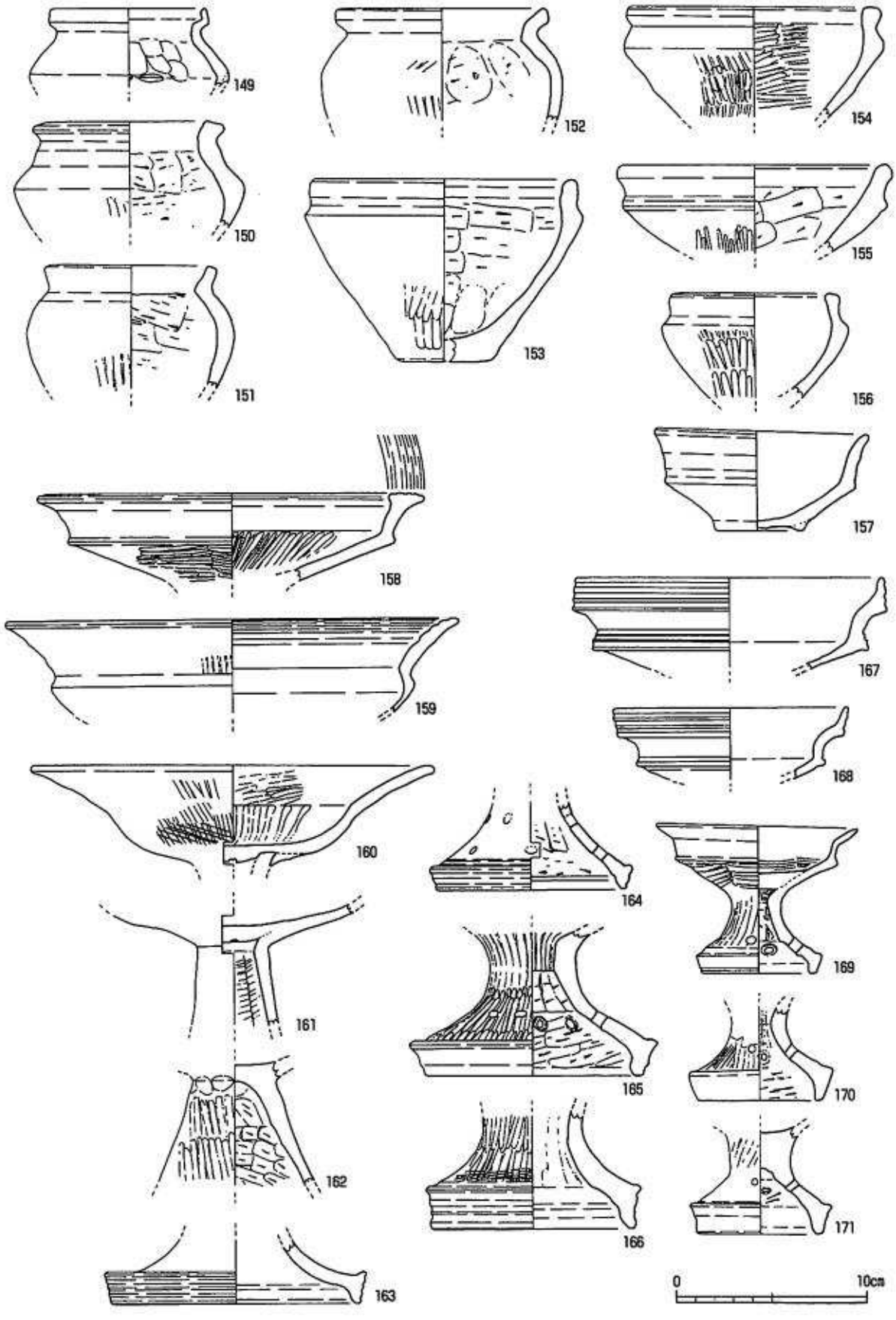
第Ⅳ-10図　曽川１号遺跡（E地区）出土遺物実測図（8）（1：4）



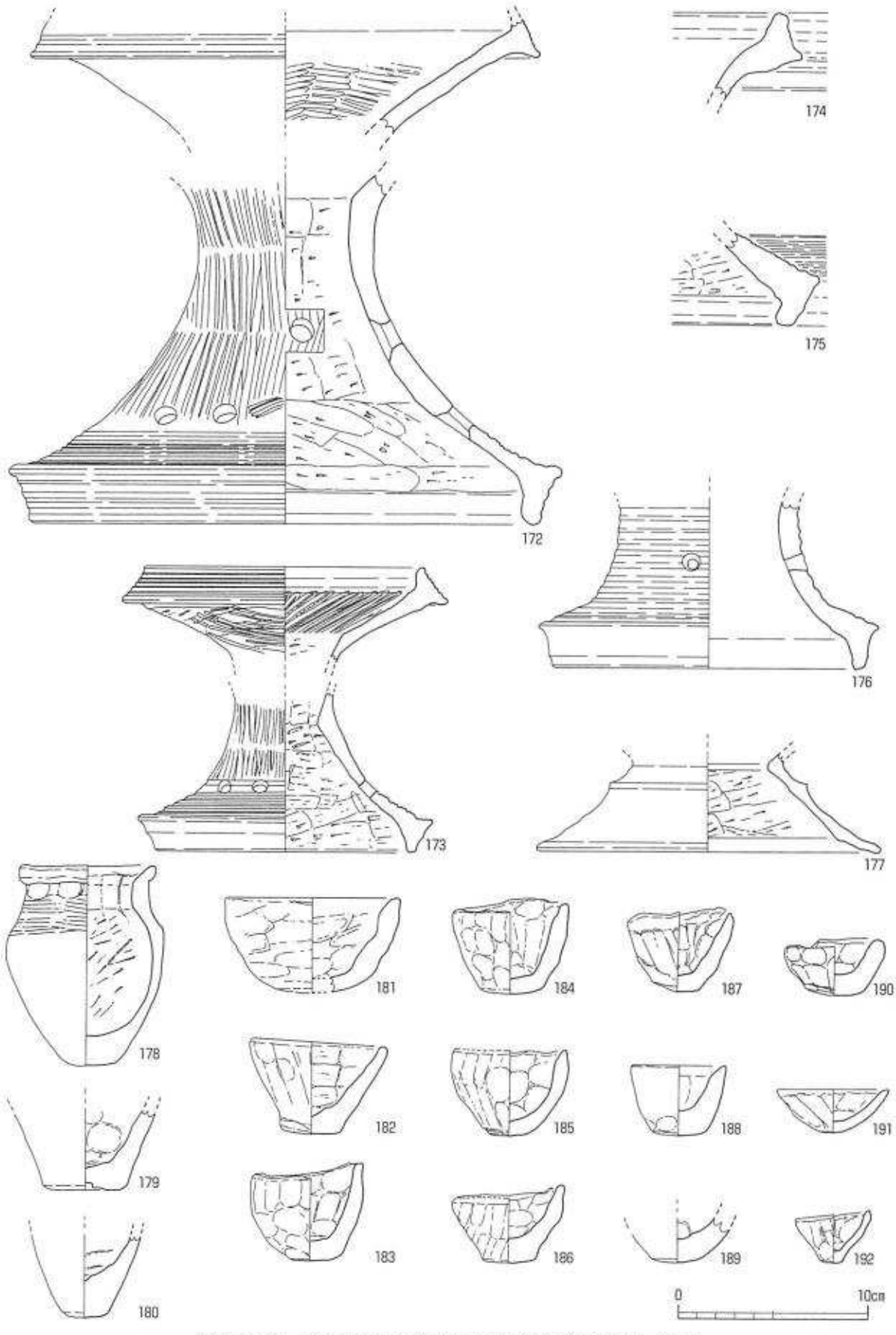
第Ⅳ-11図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（9）（1：3）



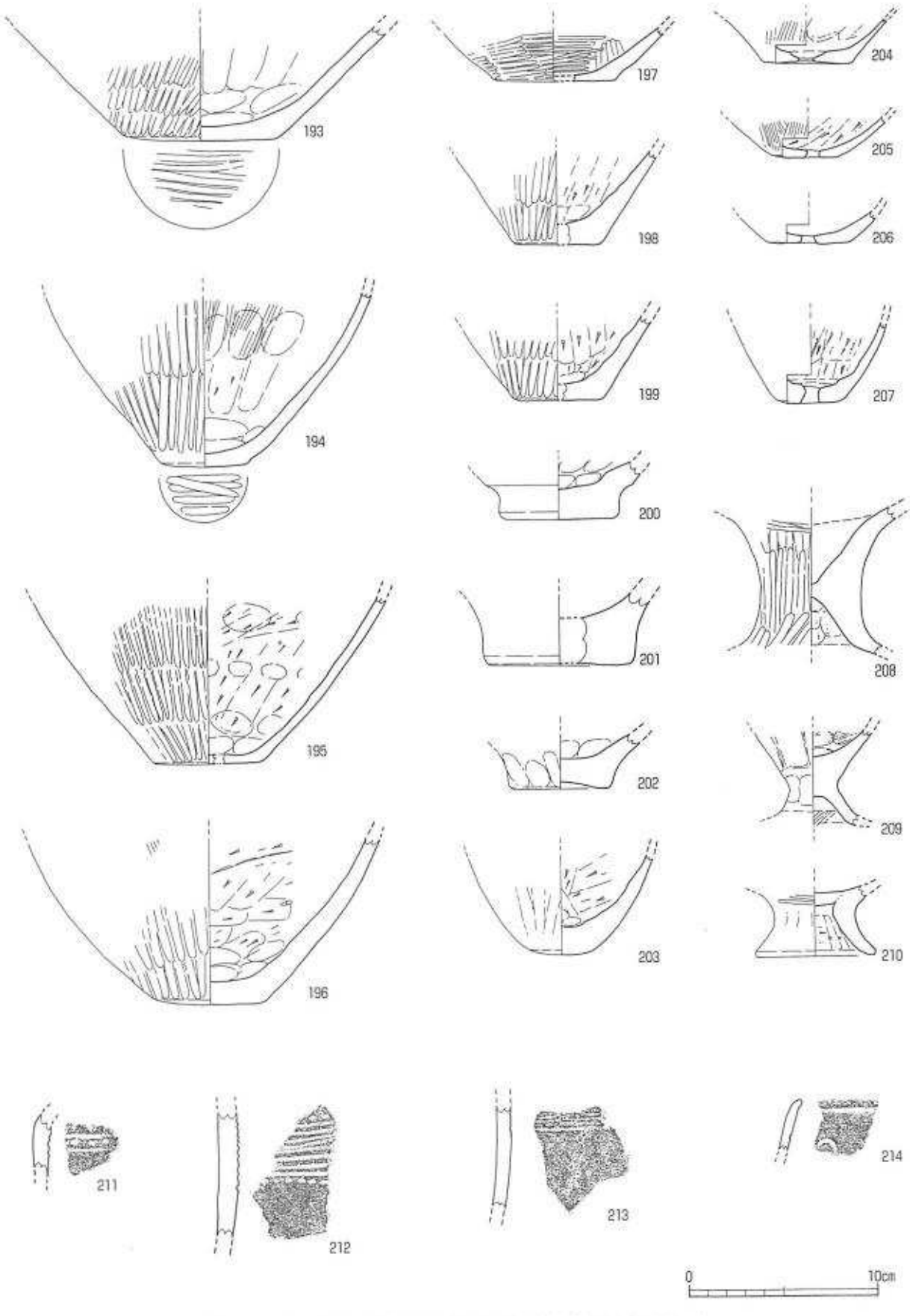
第Ⅳ-12図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（10）（1：3）



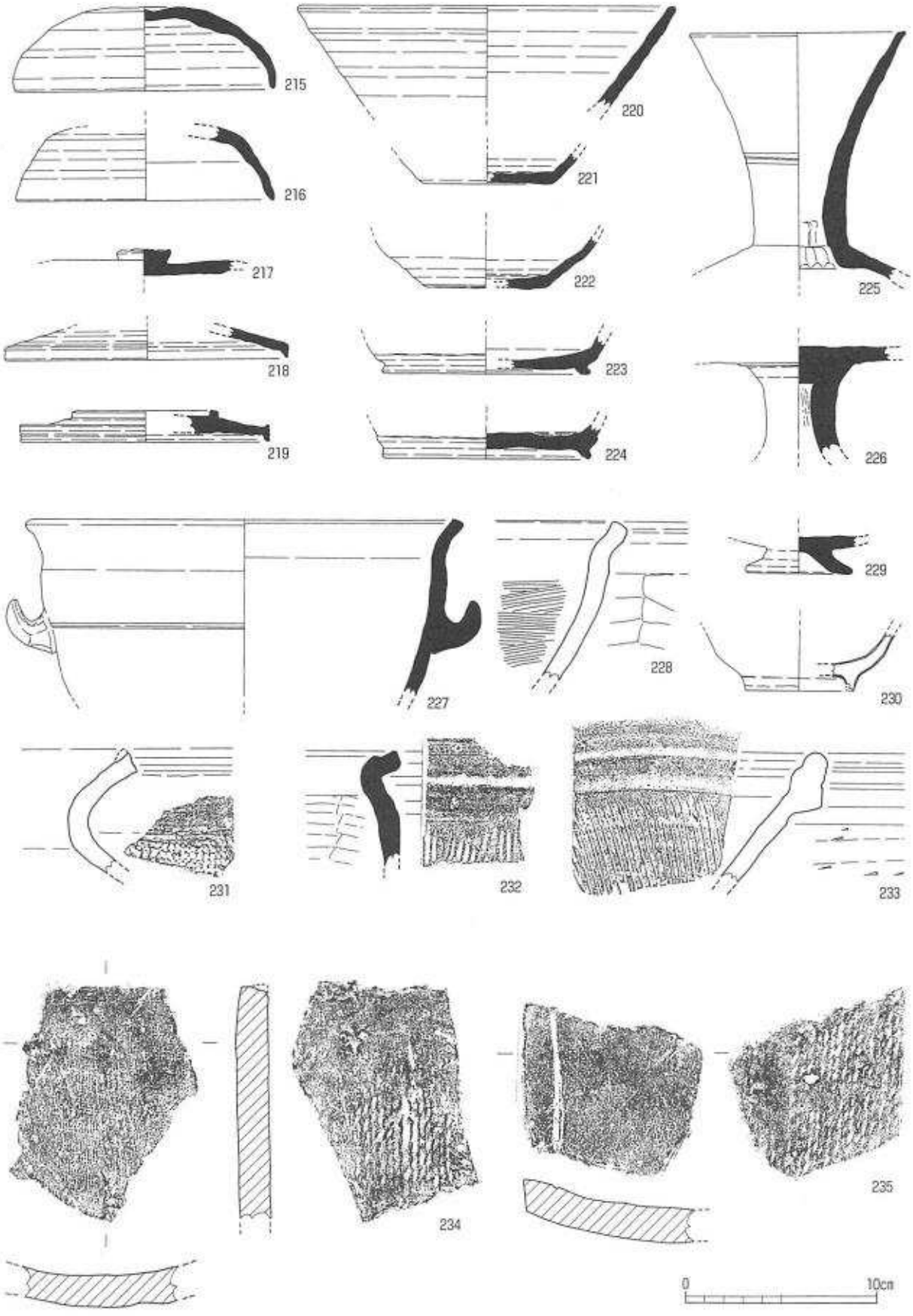
第Ⅳ-13図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（11）（1：3）



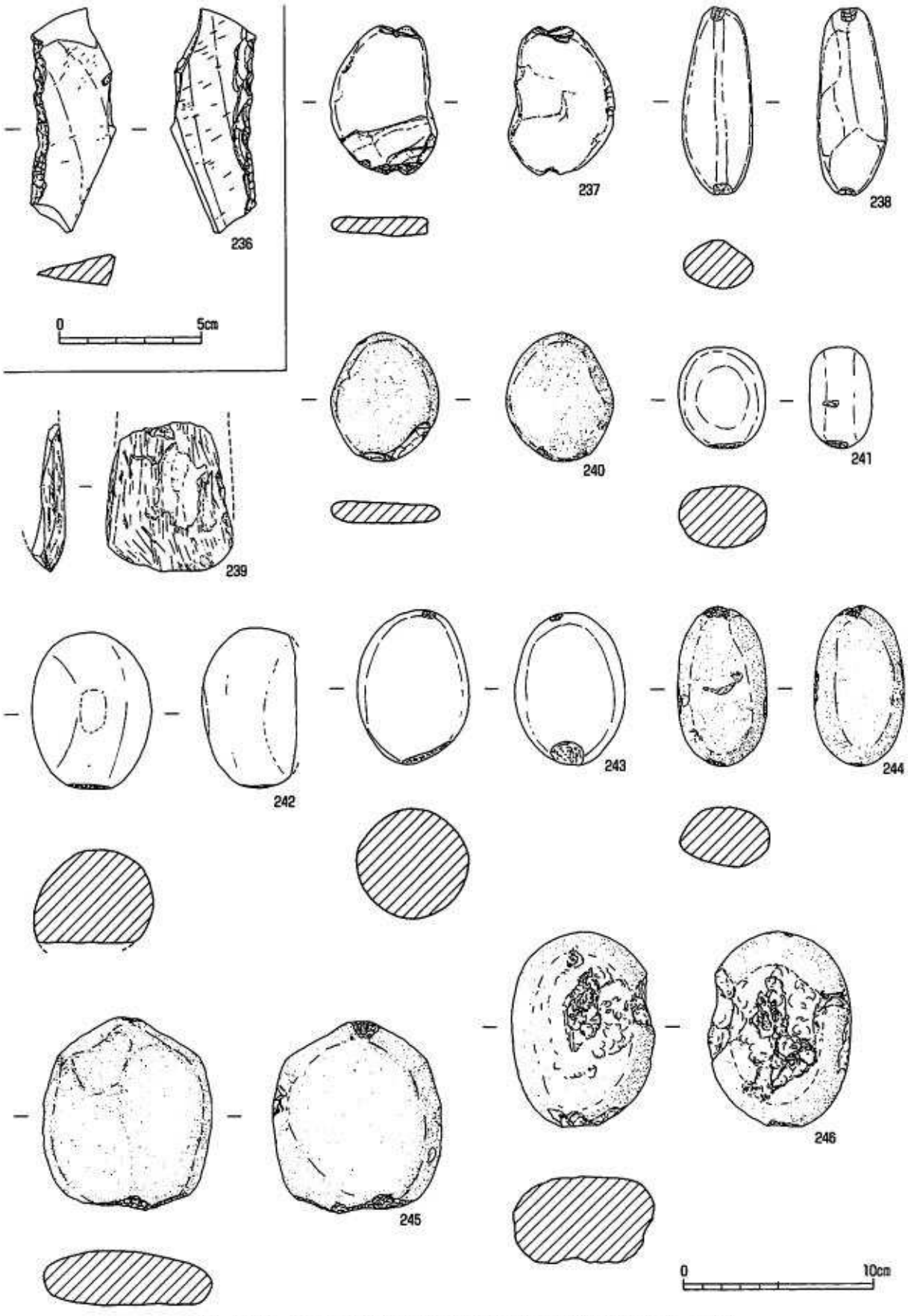
第Ⅳ-14図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（12）（1：3）



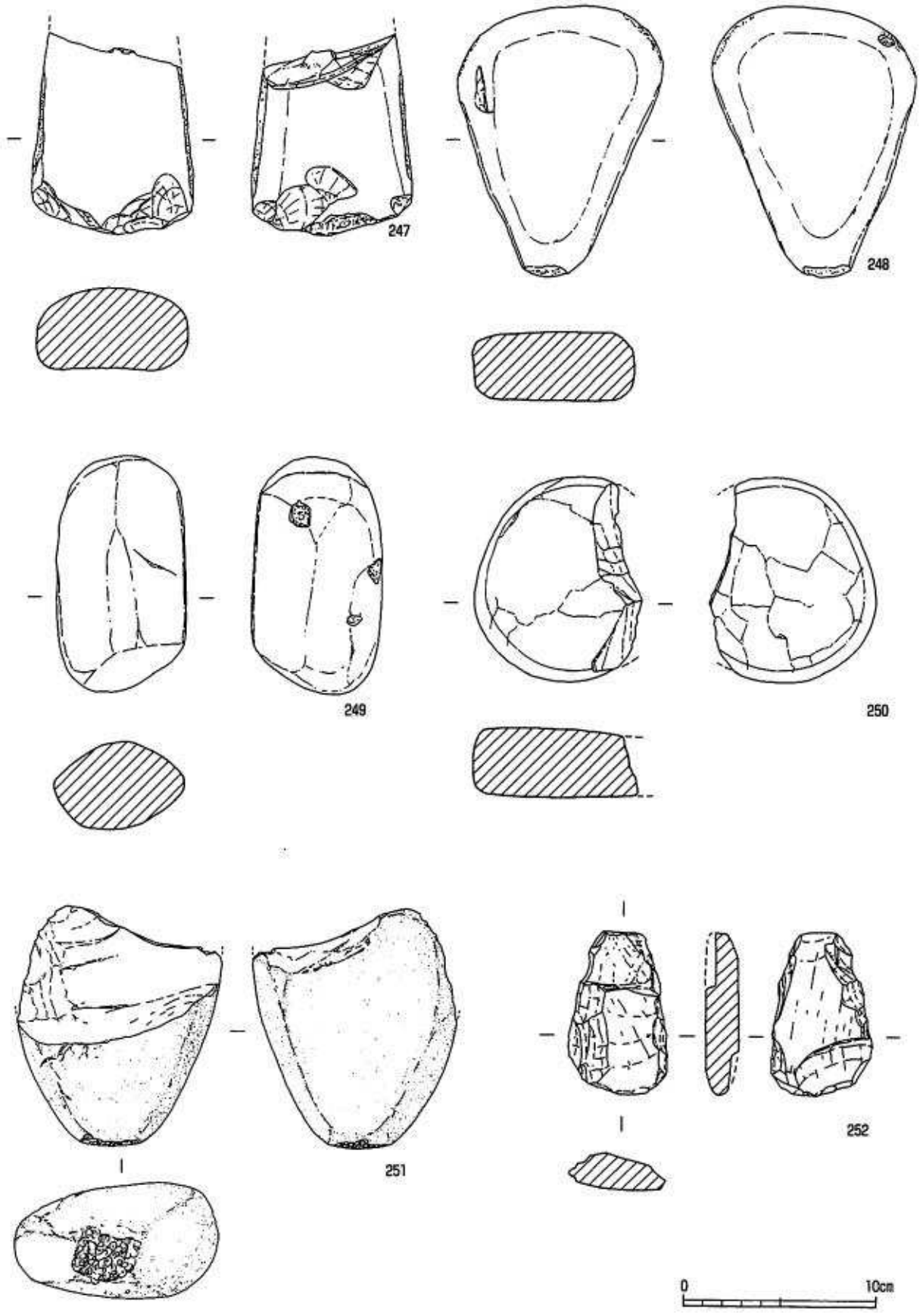
第Ⅳ-15図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（13）（1：3）



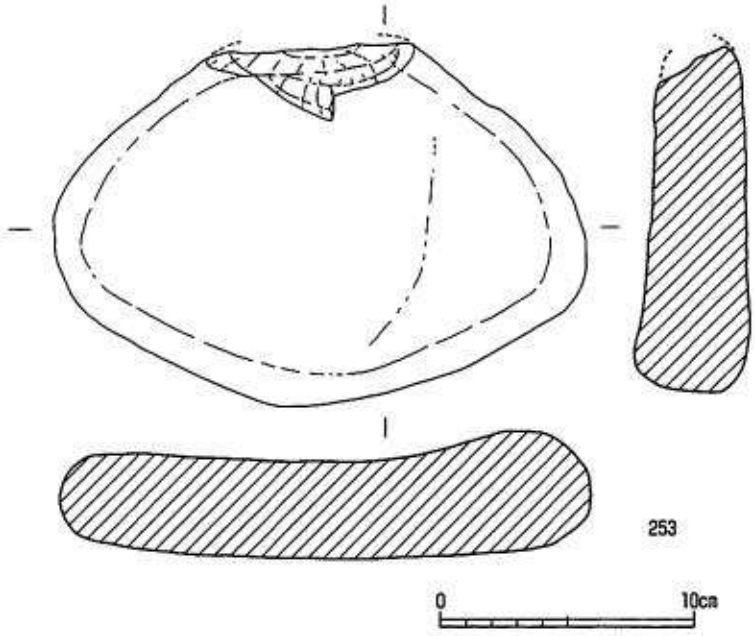
第Ⅳ-16図　曽川１号遺跡（E地区）出土遺物実測図（14）（1：3）



第Ⅳ-17図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（15）（1:2、1:3）



第Ⅳ-18図　曽川1号遺跡（E地区）出土遺物実測図（16）（1：3）



第Ⅳ-19図　曽川１号遺跡（Ｅ地区）出土遺物実測図（17）（1：3）

第Ⅳ-2表　曽川１号遺跡（Ｅ地区）出土掲載遺物（石器）一覧表

＊　単位はcmまたはg．（　）は現状値

番号	器種	計測値 ＊				石材	出土地点		備考
		最大長	最大幅	最大厚	重量				
236	刃器	8.0	2.8	1.1	29	珪質凝灰岩	北側落ち込み	・礫層下	
237	石錘	7.8	5.6	1.0	64	凝灰岩	北側落ち込み		両端に抉りあり
238	石錘	10.0	3.7	2.5	124	珪質凝灰岩	北側落ち込み	・2～3トレ	両端に抉りあり
239	石斧	(7.8)	6.7	(1.6)	(112)	熱変質泥質岩	北側落ち込み		刃部のみ
240	磨石	6.8	5.7	1.2	67	花崗閃緑岩	北側落ち込み	・礫層下	
241	敲石	5.4	4.6	3.7	127	細粒閃緑岩	北側落ち込み	・2～3トレ	
242	敲石	8.3	6.3	(4.9)	(380)	花崗斑岩	北側落ち込み	・1～2トレ礫層下	
243	敲石	8.2	6.0	5.8	360	結晶溶結凝灰岩	北側落ち込み	・2～3トレ	
244	敲石	8.4	4.8	3.1	168	細粒黒雲母花崗岩	北側落ち込み		
245	敲石	10.1	8.9	2.9	380	花崗岩?	北側落ち込み	・礫層下	
246	敲石	10.1	7.6	4.5	480	結晶溶結凝灰岩	北側落ち込み	・礫層下	
247	敲石	(10.5)	8.5	4.2	(600)	結晶凝灰岩	北側落ち込み	・1～2トレ礫層下	
248	敲石	14.0	10.7	3.6	760	珪長岩	北側落ち込み	・1～2トレ礫層下	
249	磨石	12.3	6.8	4.6	500	脈石英	北側落ち込み	・1～2トレ礫層下	
250	磨石	10.6	(8.8)	3.6	(460)	珪質凝灰岩	北側落ち込み	・1トレ	
251	敲石	(12.2)	(10.2)	(6.0)	(830)	角閃玢岩	北側落ち込み	・礫層下	
252	石斧?	8.5	5.3	2.0	99	熱変質泥質岩	北側落ち込み	・礫層下	
253	台石	21.1	(14.3)	4.5	(2,030)	石英閃緑岩	北側落ち込み	・1～2トレ礫層下	

第Ⅳ-3表　曽川1号遺跡（E地区）出土掲載遺物（縄文土器）一覧表

番号	種別・器種	調整	色調	胎土	出土地点	備考
1	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：磨消縄文，RL＋沈線，ミガキ 内面：ナデ，ミガキ	外面：淡黄褐色 内面：黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・2～3トレ	口縁端部に刺突文，口縁部外面に円形押圧文，波状口縁
2	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：磨消縄文，RL＋沈線，ナデ 内面：ナデ，ミガキ	外面：黄褐色 内面：黄褐色	粗砂含む	北側落ち込み ・1～2トレ下層	口縁部外面に円形押圧文 波状口縁
3	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：RL・LR＋沈線，？ 内面：？	外面：明黄褐色 内面：黄白色	粗砂含む	北側落ち込み ・1～2トレ最下層	波状口縁
4	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：RL＋沈線 内面：ナデ，ヨコナデ	外面：茶褐色～明黄褐色 内面：淡茶褐色～淡黒褐色	粗砂多含	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	波状口縁
5	縄文土器　浅鉢 口縁部	外面：磨消縄文，RL＋沈線 内面：ミガキ？	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	粗砂含む	北側落ち込み ・1～2トレ下層	口縁端部に刻目文 波状口縁
6	縄文土器　浅鉢 口縁部	外面：RL？＋沈線？，ナデ 内面：ミガキ	外面：淡黒褐色 内面：淡黒褐色	細砂含む	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	口縁部下に穿孔 波状口縁
7	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：RL＋沈線 内面：ヨコナデ？	外面：黄褐色 内面：黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ	
8	縄文土器　浅鉢 口縁部	外面：RL＋沈線，ナデ，ミガキ 内面：ヨコナデ	外面：灰白色 内面：灰白色	砂粒少含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
9	縄文土器　深鉢？ 口縁部	外面：撚糸文？，RLr・LRl，ナデ 内面：ナデ，ミガキ？	外面：茶褐色 内面：茶褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ最下層	
10	縄文土器　深鉢？ 口縁部	外面：LR＋沈線 内面：ナデ	外面：黄褐色 内面：暗褐色	細砂含む	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
11	縄文土器　深鉢？ 口縁部	外面：RL＋沈線，ナデ，ミガキ？ 内面：ナデ	外面：茶褐色 内面：茶褐色	細砂含む	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
12	縄文土器　深鉢？ 口縁部	外面：RL＋沈線，ナデ 内面：ナデ	外面：橙褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	
13	縄文土器　深鉢？ 胴部	外面：RL＋沈線，ミガキ？ 内面：ヨコナデ？	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
14	縄文土器　深鉢？ 胴部	外面：RL＋沈線，ミガキ 内面：ヨコナデ	外面：淡黒褐色 内面：淡黒褐色	粗砂含む	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
15	縄文土器　深鉢？ 胴部	外面：RL＋沈線，ミガキ 内面：？	外面：黄褐色 内面：淡黄褐色	粗砂多含	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	
16	縄文土器　深鉢？ 胴部	外面：RL＋沈線，ミガキ？ 内面：ナデ？	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・2～3トレ	
17	縄文土器　深鉢？ 胴部	外面：RL＋沈線，ミガキ 内面：ナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色～暗褐色	粗砂含む	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	
18	縄文土器　深鉢？ 胴部	外面：LR＋沈線，ミガキ 内面：ナデ	外面：橙褐色 内面：橙褐色	粗砂多含	北側落ち込み ・下層	
19	縄文土器　深鉢？ 胴部	外面：RL＋沈線，ミガキ 内面：ナデ？	外面：暗茶褐色 内面：黒褐色	粗砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ最下層	
20	縄文土器　深鉢 胴部下部	外面：RL？＋沈線，ナデ 内面：ナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
21	縄文土器　深鉢 胴部上部	外面：RL＋沈線，ナデ 内面：ナデ	外面：淡黒褐色 内面：淡茶褐色	粗砂多含	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	楕状把手あり，その上下に穿孔
22	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：RL＋沈線，ナデ，ヨコナデ 内面：ナデ，ミガキ	外面：黄褐色 内面：淡黒褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	波状口縁
23	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：RL＋沈線，条痕文 内面：ナデ，ミガキ	外面：淡茶褐色 内面：淡黄褐色	細砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	口縁部外面に円形押圧文 波状口縁
24	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：RL＋沈線，ナデ，ヨコナデ 内面：ナデ，ヨコナデ	外面：淡茶褐色 内面：黒褐色	細砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	口縁部外面に円形押圧文 波状口縁
25	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：RL＋沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	細砂多含	北側落ち込み ・2～3トレ	波状口縁
26	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：RL＋沈線，ナデ，ヨコナデ 内面：条痕文	外面：淡茶褐色 内面：淡黄褐色	細砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	波状口縁
27	縄文土器　深鉢？ 口縁部	外面：RL？・LR？＋沈線，ヨコナデ？ 内面：ヨコナデ？	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	粗砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
28	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：RL＋沈線，ナデ？，ヨコナデ？ 内面：？	外面：灰白色 内面：灰白色	粗砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ	
29	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：RL＋沈線，ミガキ 内面：ミガキ	外面：淡黄褐色～黒褐色 内面：淡茶褐色	細砂多含	北側落ち込み ・下層	
30	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：RL＋沈線，ミガキ 内面：ナデ？	外面：淡黄褐色～黒褐色 内面：黒褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	
31	縄文土器 口縁部	外面：RL，条痕文 内面：条痕文	外面：淡黄褐色～淡茶褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	赤色顔料・漆塗の可能性
32	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：沈線，ナデ？ 内面：ヨコナデ，ナデ	外面：淡黄褐色～淡茶褐色 内面：黄褐色	細砂多含	北側落ち込み ・2トレ	口縁端部に刻目文 波状口縁
33	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：沈線，？ 内面：ヨコナデ？	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	粗砂多含	北側落ち込み	口縁端部に刻目文 波状口縁
34	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：沈線，ナデ，ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：淡灰白色 内面：淡灰白色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	口縁端部に刻目文 波状口縁
35	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：沈線，ナデ？ 内面：ナデ，ヨコナデ？	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・2～3トレ	口縁部外面に円形押圧文 波状口縁
36	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：凹線，沈線，ヨコナデ？ 内面：？	外面：淡黄褐色～淡赤褐色 内面：黄褐色～赤褐色	粗砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ	波状口縁
37	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：沈線，ナデ，ヨコナデ 内面：ナデ，ヨコナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	細砂含む	北側落ち込み ・1～2トレ下層	口縁端部に刻目文，墨彩？ 波状口縁
38	縄文土器　浅鉢 口縁部	外面：ナデ？，条痕文？ 内面：ナデ？	外面：灰白色 内面：灰白色	細砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	波状口縁
39	縄文土器 口縁部付近？	外面：？ 内面：？	外面：淡茶褐色 内面：淡茶褐色	粗砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ最下層	端部に刻目文
40	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：沈線，？ 内面：ミガキ	外面：黄褐色 内面：淡茶褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	口縁端部に円形押圧文 波状口縁

番号	種別・器種	調整	色調	胎土	出土地点	備考
11	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：？ 内面：？	外面：灰白色 内面：灰白色	粗砂多含	北側落ち込み ・2～3トレ	口縁端部に円形押圧文・刻目文 波状口縁
12	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：回線，沈線，ヨコナデ 内面：？	外面：淡黄褐色 内面：灰白色	粗砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ盛下層	口縁端部に刺突文 波状口縁
13	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：沈線，ナデ，条痕文 内面：？	外面：淡黄褐色 内面：黄白色～淡橙色	砂粒多含	北側落ち込み ・2～3トレ	口縁端部に刺突文・刻目文 波状口縁
14	縄文土器　浅鉢 口縁部	外面：沈線，ナデ，ヨコナデ 内面：ナデ，ヨコナデ	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	細砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	口縁端部に刺突文 塗彩？
15	縄文土器　浅鉢？ 口縁部	外面：沈線，ヨコナデ 内面：ナデ，ヨコナデ？	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	細砂・雲母含む	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	口縁端部に刻目文
16	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：沈線，？ 内面：？	外面：淡茶褐色 内面：淡茶褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・2～3トレ	口縁端部に刻目文
17	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：沈線，？ 内面：ヨコナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	口縁端部に刻目文
18	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：沈線，？ 内面：？	外面：黒褐色 内面：淡茶褐色	細砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ盛下層	口縁端部に刻目文
19	縄文土器　深鉢？ 口縁部	外面：沈線，？ 内面：ヨコナデ	外面：淡黄褐色 内面：黒褐色	細砂多含	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	
20	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：沈線，ヨコナデ 内面：ヨコナデ？	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒少含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	口縁端部に刻目文
21	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：沈線，ナデ，ヨコナデ 内面：ナデ，ミガキ	外面：淡黄褐色 内面：黄褐色	砂粒少含	北側落ち込み ・3トレ	口縁端部に刻目文
22	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：沈線，？ 内面：？	外面：茶褐色 内面：茶褐色	細砂多含	北側落ち込み	口縁端部に刻目文
23	縄文土器　浅鉢？ 口縁部	外面：沈線，ナデ，ヨコナデ？ 内面：ヨコナデ，ミガキ	外面：淡茶褐色 内面：淡茶褐色	細砂含む	北側落ち込み ・1～2トレ下層	口縁端部に刻目文 波状口縁？
24	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：沈線，？ 内面：？	外面：黄褐色 内面：黄褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・2～3トレ	
25	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：沈線，ヨコナデ？ 内面：ヨコナデ？	外面：灰白色 内面：灰白色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
26	縄文土器　深鉢？ 口縁部	外面：沈線，？ 内面：ヨコナデ	外面：淡黄褐色 内面：暗褐色	粗砂多含	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	
27	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：回線，ナデ，ヨコナデ 内面：？	外面：淡黄褐色 内面：灰白色	粗砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
28	縄文土器　浅鉢 口縁部	外面：沈線，？ 内面：ナデ？	外面：淡黄褐色 内面：淡灰白色	粗砂含む	北側落ち込み ・1～2トレ下層	口縁部下に刺突文
29	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：？ 内面：？	外面：黄褐色 内面：黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部下の貼付凸帯に刺突文
30	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：ヨコナデ 内面：沈線，ヨコナデ	外面：黒褐色 内面：暗褐色	砂粒多含	北側落ち込み	口縁部下の貼付凸帯に刻目文
31	縄文土器　浅鉢 口縁部	外面：沈線，ナデ 内面：ナデ	外面：橙褐色 内面：淡黄褐色	砂粒含む	北側落ち込み	波状口縁？
32	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：沈線，ナデ？ 内面：ナデ？	外面：橙褐色 内面：橙褐色	粗砂多含	北側落ち込み	波状口縁？
33	縄文土器　浅鉢？ 口縁部	外面：沈線，？ 内面：？	外面：淡茶褐色 内面：淡茶褐色	粗砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	波状口縁？
34	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：沈線，条痕文？ 内面：ヨコナデ	外面：茶褐色 内面：茶褐色	砂粒多含	北側落ち込み	
35	縄文土器　深鉢 胴部	外面：沈線，ナデ 内面：ナデ？	外面：橙褐色 内面：橙褐色	粗砂多含	北側落ち込み	
36	縄文土器　深鉢 胴部	外面：沈線，ナデ 内面：ナデ	外面：橙褐色 内面：橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み	
37	縄文土器　深鉢 胴部	外面：沈線，？ 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：黄褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
38	縄文土器　深鉢 胴部	外面：沈線，ナデ 内面：ナデ	外面：黄褐色～淡茶褐色 内面：淡黄褐色	砂粒・雲母含む	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
39	縄文土器　深鉢 胴部	外面：沈線，ナデ？ 内面：ナデ？	外面：橙褐色 内面：橙褐色	粗砂多含	北側落ち込み	
40	縄文土器　深鉢 胴部	外面：沈線，ナデ？ 内面：ナデ	外面：淡橙褐色 内面：暗褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
41	縄文土器　浅鉢？ 胴部	外面：沈線，？ 内面：ナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡灰褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
42	縄文土器　深鉢 胴部	外面：沈線，ナデ 内面：ナデ？	外面：暗褐色～黒褐色 内面：橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み	
43	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ，ミガキ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	粗砂多含	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	口縁端部に刻目文
44	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：条痕文 内面：条痕文	外面：淡黄褐色 内面：黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	口縁端部に刻目文
45	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：条痕文 内面：条痕文	外面：淡黄褐色～暗褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	口縁端部に刻目文
46	縄文土器　深鉢？ 口縁部	外面：条痕文 内面：条痕文	外面：橙茶褐色 内面：暗茶褐色	細砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ	口縁端部に刻目文 胴部に焼成後の穿孔（1か所）
47	縄文土器　深鉢？ 口縁部	外面：ナデ？ 内面：ナデ？	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み	口縁端部に刻目文
48	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：ヨコナデ，条痕文 内面：ミガキ？	外面：暗褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・2～3トレ	
49	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：ヨコナデ 内面：？	外面：淡黄褐色～黒褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み	
50	縄文土器　深鉢 口縁部～胴部	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：暗褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
51	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：ナデ，条痕文 内面：条痕文	外面：暗褐色 内面：暗褐色	砂粒多含	北側落ち込み	

番号	種別・器種	調整	色調	胎土	出土地点	備考
82	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：ナデ，条痕文 内面：条痕文?	外面：黒褐色 内面：黒褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
83	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：条痕文 内面：?	外面：暗褐色 内面：灰褐色～黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	口縁部下方に刺突文
84	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：条痕文 内面：ナデ	外面：橙褐色 内面：淡橙褐色～灰褐色	粗砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ最下層	
85	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡黄褐色～黒褐色 内面：淡黄褐色	粗砂多含	北側落ち込み ・2～3トレ	
86	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：条痕文? 内面：ミガキ	外面：茶褐色 内面：茶褐色	粗砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ最下層	
87	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：ナデ，ミガキ 内面：ナデ	外面：淡橙褐色 内面：橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ最下層	
88	縄文土器　深鉢 口縁部	外面：ミガキ? 内面：ミガキ	外面：淡黄褐色～黒褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・黒灰色粘土	
89	縄文土器　深鉢? 胴部	外面：ナデ? 内面：ナデ?	外面：橙茶褐色 内面：暗茶褐色	粗砂含む	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	焼成前の穿孔（3か所）
90	縄文土器　浅鉢 胴部	外面：RL＋沈線，ヨコナデ，ミガキ 内面：ヨコナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	外面に赤色顔料塗彩
91	縄文土器　浅鉢 口縁部	外面：磨消縄文，LR?＋沈線 内面：ミガキ?	外面：淡茶褐色 内面：淡茶褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ最下層	口縁端部に刻目文
92	縄文土器　浅鉢 口縁部	外面：LR?＋沈線，ミガキ 内面：ミガキ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	細砂含む	北側落ち込み ・2～3トレ	外面に赤色顔料塗彩
93	縄文土器　浅鉢 口縁部	外面：RL＋沈線，ミガキ 内面：ミガキ	外面：茶褐色～黒褐色 内面：茶褐色～黒褐色	細砂多含	北側落ち込み ・最下層	
94	縄文土器　浅鉢 口縁部～胴部	外面：RL，ヨコナデ 内面：ミガキ	外面：淡黄褐色 内面：黒褐色	細砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	胴部外面に刺突文
95	縄文土器　浅鉢 口縁部	外面：条痕文 内面：ミガキ	外面：淡黄褐色～黒褐色 内面：淡黄褐色～黒褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・2トレ	
96	縄文土器　浅鉢 口縁部	外面：ナデ，ミガキ 内面：ミガキ	外面：淡黄褐色～淡黒褐色 内面：黄褐色	細砂少含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
97	縄文土器 底部	外面：? 内面：?	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ最下層	
98	縄文土器 底部	外面：? 内面：?	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・2～3トレ	
99	縄文土器 底部	外面：? 内面：?	外面：淡褐色 内面：淡褐色	粗砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
100	縄文土器 底部	外面：? 内面：?	外面：淡褐色 内面：淡褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
101	縄文土器 底部	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：暗褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
102	縄文土器 底部	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・2トレ	
103	縄文土器 底部	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：黄褐色 内面：黄褐色	砂粒少含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
104	縄文土器 底部	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：暗褐色～黒褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ	底面に木の葉状圧痕
105	縄文土器 底部	外面：ナデ，ミガキ? 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：淡黄褐色	粗砂含む	北側落ち込み	
106	縄文土器 底部	外面：ナデ? 内面：ナデ?	外面：黒褐色～淡黄褐色 内面：黒褐色	粗砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	
107	縄文土器　深鉢? 底部	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	粗砂含む	北側落ち込み ・1～2トレ下層	多孔底土器（8個以上） 直径2cm前後
108	縄文土器　深鉢? 底部	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ下層	多孔底土器（6個以上） 直径0.6～0.8cm
109	縄文土器　深鉢? 底部	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：赤褐色 内面：赤褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・2～3トレ	多孔底土器（9個以上） 直径0.6～0.8cm
a	縄文土器 楕状把手?	外面：ナデ?	外面：暗灰褐色	砂粒多含	北側落ち込み	片側面に粗い縄文あり
b	縄文土器 楕状把手?	外面：ナデ?	外面：淡褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・2～3トレ	中央部に円形刺突文（直径0.8cm）
c	縄文土器 楕状把手?	外面：ナデ?	外面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	中央部に円形刺突文（直径0.6cm）
d	縄文土器 楕状把手?	外面：ナデ?	外面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ最下層	

第Ⅳ-4表　曽川1号遺跡（E地区）出土掲載遺物（縄文土器以外の土器と瓦）一覧表

＊1 胴径：胴部最大径，脚部径：脚端部径，高台径：高台端部径
＊2 単位はcm，（ ）は復元推定値

番号	種別・器種	計測値 ＊1,＊2	調整	色調	胎土	出土地点	備考
110	弥生土器　壺 口縁部～底部	口径：（11.6） 胴径：（30.7） 底径：6.4 器高：39.1	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ハケ目・ヘラミガキ 内面：頸部-ナデ・指頭押圧，胴部-ハケ目・ヘラケズリ	外面：橙褐色 内面：橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・北東隅黒灰色粘土	口縁部外面に回線3条 底部周辺に黒斑あり
111	弥生土器　壺 口縁部～胴部	胴径：37.0	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ハケ目・ヘラミガキ 内面：頸部-ナデ，胴部-ハケ目・ヘラケズリ	外面：橙褐色 内面：橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・北東隅黒灰色粘土	頸部外面に沈線6条
112	弥生土器　壺 口縁部～胴部	口径：（11.8） 胴径：（30.2）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ? 内面：口頸部-ヨコナデ・しぼり痕，胴部-ヘラケズリ?	外面：黄褐色 内面：黄褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部外面に回線3条
113	弥生土器　壺 口縁部～胴部	口径：（15.6） 胴径：（30.6）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ハケ目・ヘラミガキ 内面：口頸部-ヨコナデ・しぼり痕・指頭押圧，胴部-ヘラケズリ	外面：淡黄褐色～淡赤褐色 内面：淡黄褐色～淡赤褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部外面に回線？（3条）
114	弥生土器　壺 口縁部～底部	胴径：30.7 底径：7.3	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ハケ目・ヘラミガキ 内面：口頸部-ヨコナデ・しぼり痕，胴部-ヘラケズリ	外面：橙褐色 内面：橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ	口縁部外面に回線3条以上 胴部に刺突文 底部周辺に黒斑あり
115	弥生土器　壺 口縁部～頸部	口径：（20.0）	外面：口頸部-ヨコナデ・ハケ目 内面：口頸部-ヨコナデ	外面：黄褐色 内面：黄褐色	細砂含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部外面に回線5条，その上に竹管文（4個×2列）
116	弥生土器　壺 口縁部～胴部	口径：（10.6）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ・ハケ目 内面：口頸部-ヨコナデ・ナデ，胴部-ヘラケズリ	外面：橙褐色 内面：橙褐色	細砂含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部外面に回線5条
117	弥生土器　壺 口縁部～胴部	口径：（13.0）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ハケ目 内面：口頸部-ヨコナデ・しぼり痕，胴部-ヘラケズリ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	細砂多含（雲母含む）	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部外面に回線4条 頸部下に刺突文
118	弥生土器　壺 口縁部～頸部	口径：（16.8）	外面：口頸部-ヨコナデ・ハケ目 内面：口頸部-ヨコナデ・ナデ	外面：淡褐色 内面：淡橙褐色	精良	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部外面にハケ目 頸部外面に沈線2条以上
119	弥生土器　壺 口縁部～頸部	口径：（12.6）	外面：口頸部-ヨコナデ・ミガキ? 内面：口頸部-ヨコナデ・ナデ	外面：暗橙褐色～淡黄褐色 内面：暗橙褐色～淡黄褐色	精良	北側落ち込み ・1トレ＋北東隅黒灰色粘土	口縁部外面に回線3条 頸部外面に沈線4条以上
120	弥生土器　壺 頸部～胴部	胴径：18.7	外面：頸部-ハケ目，胴部-ハケ目・ナデ・ミガキ 内面：頸部-ナデ，胴部-ハケ目・ナデ・ヘラケズリ	外面：橙褐色 内面：橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	頸部外面に沈線3条以上 胴部外面に回線3条
121	弥生土器　壺 口縁部～頸部	口径：（15.3）	外面：口頸部-ヨコナデ? 内面：口頸部-ヨコナデ?・ナデ，頸部下-ヘラケズリ	外面：淡橙色～淡黄褐色 内面：淡橙色～淡黄褐色	砂粒含む	北側落ち込み 105・1～2トレ礫層下	口縁部外面に回線？（1条）
122	弥生土器　壺 口縁部～頸部	口径：（15.9）	外面：口頸部-ヨコナデ 内面：口頸部-ヨコナデ，頸部下-ヘラケズリ	外面：暗褐色 内面：暗褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
123	弥生土器　壺 口縁部～頸部	口径：（16.2）	外面：口頸部-ヨコナデ・ハケ目 内面：口頸部-ヨコナデ・しぼり痕，ナデ，頸部下-ヘラケズリ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	精良	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	
124	弥生土器　壺 口縁部～胴部	口径：（13.9） 胴径：（20.0）	外面：口頸部-ヨコナデ・しぼり痕，胴部-ハケ目 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラケズリ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	精良	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下？	胴部外面に櫛描きの波状文・直線文
125	弥生土器　壺 口縁部～胴部	口径：（14.6）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ミガキ? 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラケズリ	外面：灰褐色 内面：灰褐色～暗灰褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・北東隅黒灰色粘土	
126	弥生土器　壺 口縁部～胴部	口径：9.1 胴径：15.2	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-指頭押圧・ヘラケズリ	外面：暗橙褐色 内面：暗橙褐色	細砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ	口縁端部に回線3条 胴部外面に回線2条
127	弥生土器　壺 口縁部～胴部	口径：（15.6） 胴径：（31.6）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ミガキ・ハケ目 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-指頭押圧・ハケ目・ヘラケズリ	外面：橙褐色 内面：橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ	口縁部外面に回線3条
128	弥生土器　壺 口縁部～胴部	口径：16.0 胴径：29.1	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ・ハケ目 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-指頭押圧・ヘラケズリ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	細砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部外面に回線3条 底部周辺に黒斑あり
129	弥生土器　壺 頸部～底部	胴径：30.3 底径：7.8	外面：胴部-ハケ目・ヘラミガキ 内面：胴部-指頭押圧・ナデ・ヘラケズリ	外面：橙褐色 内面：橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1トレ＋北東隅黒灰色粘土	底部周辺に黒斑あり
130	弥生土器　壺 口縁部～胴部	口径：17.1 胴径：31.2	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ハケ目・ヘラミガキ 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-指頭押圧・ハケ目・ヘラケズリ	外面：橙褐色 内面：橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1トレ＋北東隅黒灰色粘土	口縁部外面に回線3条 胴部外面に刺突文
131	弥生土器　壺 頸部～底部	胴径：31.5 底径：7.0	外面：胴部-ハケ目・ヘラミガキ 内面：胴部-指頭押圧・ハケ目・ヘラケズリ	外面：橙褐色 内面：橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ	胴部外面に貝殻腹縁状刺突文 底部周辺に黒斑あり
132	弥生土器　壺 口縁部～胴部	口径：（12.2）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ハケ目 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-指頭押圧・ヘラケズリ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	細砂多含	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部外面に回線3条
133	弥生土器　壺 口縁部～胴部	口径：（14.6） 胴径：（24.1）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ハケ目・タタキ目・ミガキ 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-指頭押圧・ハケ目・ヘラケズリ	外面：橙褐色 内面：橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部外面に回線3条，黒斑あり 胴部外面に櫛歯状刺突文とタタキ目
134	弥生土器　壺 口縁部～胴部	口径：（15.1） 胴径：（26.6）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ハケ目 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラケズリ	外面：橙褐色 内面：橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
135	弥生土器　壺 口縁部～胴部	口径：（14.0） 胴径：（18.0）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-？ 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラケズリ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	胴部外面に輪圧痕?あり
136	弥生土器　壺 口縁部～胴部	口径：（16.3）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ハケ目 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラケズリ・ナデ	外面：暗橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・2～3トレ	
137	弥生土器　甕 口縁部～頸部	口径：（15.2）	外面：口頸部-ヨコナデ 内面：口頸部-ヨコナデ，頸部下-ヘラケズリ?	外面：橙褐色 内面：橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
138	弥生土器　甕 口縁部～頸部	口径：（12.6）	外面：口頸部-ヨコナデ 内面：口頸部-ヨコナデ，頸部下-ヘラケズリ?	外面：暗褐色 内面：暗褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	

番号	種別・器種	計測値	調整	色調	胎土	出土地点	備考
139	土師器 甕 口縁部～胴部	口径：（18.6）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ハケ目 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ	外面：暗茶褐色 内面：暗茶褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・礫層下	
140	弥生土器 鉢 口縁部～胴部	口径：　11.6 胴径：　18.2	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ハケ目・ヘラミガキ 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ・指頭押圧・ハケ目・ヘラケズリ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1トレ＋北東隅黒灰色粘土	口縁部外面に凹線４条 胴部外面に凹線２条
141	弥生土器 鉢 口縁部～胴部	口径：（20.2） 胴径：（23.8）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ナデ・ヘラミガキ 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ナデ・指頭押圧・ヘラケズリ	外面：赤褐色 内面：赤褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ	口縁部外面に凹線５条
142	弥生土器 鉢 口縁部～胴部	口径：（19.2） 胴径：（20.8）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ハケ目・ヘラミガキ 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラケズリ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部外面に凹線３条 胴部外面に凹線１条 底部～胴部下半に黒斑あり
143	弥生土器 鉢 口縁部～底部	口径：　20.1 胴径：　21.1 底径：　7.3 器高：　14.5	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ? 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラケズリ・ナデ?	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部外面に凹線３条
144	弥生土器 鉢 口縁部～胴部	口径：（19.8）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラケズリ・ヘラミガキ 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・礫層下	口縁部上端面に凹線３条
145	弥生土器 鉢 口縁部～胴部	口径：（20.1）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラケズリ・ヘラミガキ 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部上端面に凹線３条
146	弥生土器 鉢 口縁部～底部	口径：（22.3） 底径：　7.2） 器高：　7.9	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ，底部-指頭押圧	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	口縁部上端面に凹線３条
147	弥生土器 鉢 口縁部～胴部	口径：（17.5）	外面：口縁部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ 内面：口縁部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ	外面：暗橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部外面に凹線５条
148	弥生土器 鉢 口縁部～胴部	口径：（17.5）	外面：口縁部-ヨコナデ，胴部-ナデ 内面：口縁部-ヨコナデ，胴部-ヘラケズリ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色		北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
149	弥生土器 鉢 口縁部～胴部	口径：　(8.0) 胴径：（10.4）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ミガキ? 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ナデ・指頭押圧	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
150	弥生土器 鉢 口縁部～胴部	口径：　(8.2) 胴径：（12.0）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ナデ?・ヘラミガキ? 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラケズリ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	
151	弥生土器 鉢 口縁部～胴部	口径：　(8.2) 胴径：（10.8）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ? 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラケズリ	外面：暗橙褐色 内面：暗橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・礫層下	
152	弥生土器 鉢 口縁部～胴部	口径：（10.8） 胴径：（12.6）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ? 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラケズリ・ナデ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	胴部外面に刺圧痕?あり
153	弥生土器 鉢 口縁部～底部	口径：（13.5） 胴径：（14.6） 底径：（5.0） 器高：　9.5	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ? 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラケズリ・ナデ?・指頭押圧	外面：灰褐色 内面：灰褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
154	弥生土器 鉢 口縁部～胴部	口径：（13.0） 胴径：（13.7）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・北東隅黒灰色粘土	
155	弥生土器 鉢 口縁部～胴部	口径：（13.8） 胴径：（14.0）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラケズリ	外面：暗橙褐色 内面：暗橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ	
156	弥生土器 鉢 口縁部～胴部	口径：　(7.7) 胴径：　(9.8)	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ 内面：？	外面：暗橙褐色 内面：暗橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み	
157	弥生土器 鉢 口縁部～底部	口径：（11.1） 底径：　4.6 器高：　5.4	外面：？ 内面：？	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・北東隅黒灰色粘土	
158	弥生土器 高坏 杯部	口径：（20.2）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ 内面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ハケ目・ヘラミガキ	外面：赤褐色 内面：赤褐色	精良	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部上端面に凹線４条
159	弥生土器 高坏 杯部	口径：（23.5）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ? 内面：口頸部・胴部-ヨコナデ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部内面に凹線４条
160	弥生土器 高坏 杯部	口径：（21.0）	外面：口頸部-ヨコナデ，胴部-ヘラミガキ・ハケ目 内面：口頸部・胴部-ヨコナデ・ヘラミガキ	外面：暗褐色 内面：暗褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
161	弥生土器 高坏 杯部～脚部		外面：？ 内面：？	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層	
162	弥生土器 高坏 脚部		外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	外面：淡褐色 内面：淡褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
163	弥生土器 高坏 脚部	脚部径：（13.0）	外面：？ 内面：？	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・2～3トレ	脚端部外面に凹線４条
164	弥生土器 高坏 脚部	脚部径：　(9.8)	外面：？ 内面：ヘラケズリ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	脚端部及び外面に凹線４条 脚柱部に２段穿孔
165	弥生土器 高坏 脚部	脚部径：　11.4	外面：ヘラミガキ・ヨコナデ 内面：ヘラケズリ・ヨコナデ	外面：橙褐色 内面：橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・礫層下	脚端部に凹線１条? 脚柱部に1段穿孔
166	弥生土器 高坏 脚部	脚部径：（10.6）	外面：ヘラミガキ・ヨコナデ 内面：ナデ?・ヨコナデ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	脚端部に凹線３条
167	弥生土器 高坏 杯部	口径：（16.2）	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：赤褐色 内面：赤褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部外面に凹線３条 胴部外面に凹線２条
168	弥生土器 高坏 杯部	口径：（12.2）	外面：ヨコナデ・ナデ? 内面：ヨコナデ	外面：赤褐色 内面：赤褐色	細砂含む	北側落ち込み	口縁部外面に凹線３条 胴部外面に凹線１条
169	弥生土器 高坏 杯部～脚部	口径：（10.0） 脚部径：　6.0 器高：（7.8）	外面：杯部-ヨコナデ・ヘラミガキ，脚部-ヘラミガキ・ヨコナデ 内面：杯部-ヨコナデ・ヘラミガキ，脚部-ケズリ・ナデ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ	脚柱部に１段穿孔（４個） ミニチュア土器
170	弥生土器 高坏 脚部	脚部径：　8.6	外面：ヘラミガキ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	外面：黄褐色 内面：黄褐色	砂粒含む	北側落ち込み	脚柱部に１段穿孔（４個） ミニチュア土器
171	弥生土器 高坏 脚部	脚部径：　8.6	外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	外面：赤褐色 内面：赤褐色	砂粒含む	北側落ち込み	脚柱部に１段穿孔（４個?） ミニチュア土器
172	弥生土器 器台 受部～台部	台部径：　26.0	外面：受部-ヨコナデ・ヘラミガキ?，脚部-ヘラミガキ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ 受部-ヨコナデ・ヘラミガキ，脚部-ヘラケズリ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	口縁部外面に凹線３条以上 台部下位外面に凹線７条 台部の下端部外面に凹線４条 台部に２段穿孔

番号	種別・器種	計測値	調整	色調	粘土	出土地点	備考
173	弥生土器　器台 受部～台部	口径：(11.7) 台部径：(13.6)	外面：受部-ヨコナデ・ミガキ，脚部-ミガキ・ヨコナデ 内面：受部-ヨコナデ・ミガキ，脚部-ヘラケズリ	外面：淡橙褐色～暗橙褐色 内面：淡橙褐色～暗橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1トレ	口縁部外面に凹線6条 台部下位外面に凹線6条 台部に1段穿孔
174	弥生土器　器台 受部		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：橙褐色～黒褐色 内面：橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・礫層下	口縁部外面に凹線3条
175	弥生土器　器台 台部		外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ・ヨコナデ	外面：黒褐色 内面：橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ	台部下位外面に凹線8条以上
176	弥生土器　器台 台部	台部径：(16.2)	外面：ヨコナデ? 内面：ヨコナデ?	外面：橙褐色 内面：橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み	台部外面に凹線10条以上 台部に穿孔（1個）
177	弥生土器　器台 台部	台部径：(18.0)	外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ・ヨコナデ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・礫層下	鼓形器台
178	弥生土器　甕 口縁部～底部	口径：6.8 胴径：8.3 底径：2.8 器高：10.5	外面：口頸部-ナデ・指頭押圧，胴部-ハケ目・ナデ 内面：口頸部-ナデ，胴部-ヘラケズリ	外面：淡黄褐色～黒褐色 内面：淡黄褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・北東隅黒灰色粘土	ミニチュア土器
179	弥生土器　甕? 底部	底径：(3.0)	外面：ナデ 内面：ナデ・指頭押圧	外面：黄褐色 内面：黄褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	ミニチュア土器
180	弥生土器　甕? 底部	底径：(1.9)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：暗橙褐色 内面：暗橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み	ミニチュア土器
181	手づくね土器　椀 口縁部～底部	口径：(9.0) 底径：(3.6) 器高：(5.0)	外面：ナデ・指頭押圧 内面：ナデ・指頭押圧	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み	
182	手づくね土器　椀 口縁部～底部	口径：(7.0) 底径：3.0 器高：5.1	外面：ナデ・指頭押圧 内面：ナデ・指頭押圧	外面：淡橙褐色～暗橙褐色 内面：淡橙褐色～暗橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ	
183	手づくね土器　椀 口縁部～底部	口径：5.0 底径：2.0 器高：5.2	外面：ナデ・指頭押圧 内面：ナデ・指頭押圧	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ	
184	手づくね土器　椀 口縁部～底部	口径：5.6 底径：3.2 器高：1.9	外面：ナデ・指頭押圧 内面：ナデ・指頭押圧	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・礫層下	
185	手づくね土器　椀 口縁部～底部	口径：(5.8) 底径：2.0 器高：1.6	外面：ナデ・指頭押圧 内面：ナデ・指頭押圧	外面：黄褐色 内面：黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・北東隅黒灰色粘土	
186	手づくね土器　椀 口縁部～底部	口径：5.5 底径：2.1 器高：1.1	外面：ナデ・指頭押圧 内面：ナデ・指頭押圧	外面：淡黄褐色～黒褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・礫層下	
187	手づくね土器　椀 口縁部～底部	口径：5.3 底径：2.5 器高：1.5	外面：ナデ・指頭押圧 内面：ナデ・指頭押圧	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・礫層下	
188	手づくね土器　椀 口縁部～底部	口径：(1.8) 底径：2.8 器高：3.7	外面：ナデ・指頭押圧 内面：ナデ・指頭押圧	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒含む	北側落ち込み	
189	手づくね土器　椀 底部	底径：2.6	外面：ナデ 内面：ナデ・指頭押圧	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒含む	北側落ち込み	
190	手づくね土器　椀 口縁部～底部	口径：5.0 底径：2.8 器高：3.0	外面：ナデ・指頭押圧 内面：ナデ・指頭押圧	外面：淡黄褐色～暗褐色 内面：淡黄褐色～暗褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・礫層下	
191	手づくね土器　椀 口縁部～底部	口径：(6.0) 底径：1.3 器高：2.1	外面：ナデ・指頭押圧 内面：ナデ・指頭押圧	外面：淡黄褐色～黒褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
192	手づくね土器　椀 口縁部～底部	口径：(1.0) 底径：1.2 器高：2.8	外面：ナデ・指頭押圧 内面：ナデ・指頭押圧	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・礫層下	
193	弥生土器 底部	底径：8.2	外面：ヘラミガキ 内面：ナデ・指頭押圧	外面：暗橙褐色～黒褐色 内面：暗橙褐色～黒褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
194	弥生土器 底部	底径：(1.6)	外面：ヘラミガキ・ナデ 内面：ハケ目・ナデ・指頭押圧	外面：橙褐色 内面：橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・礫層下	黒斑あり
195	弥生土器 底部	底径：5.8	外面：ヘラミガキ・ナデ 内面：ヘラケズリ・ナデ・指頭押圧	外面：暗褐色～黒褐色 内面：暗褐色～黒褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	黒斑あり
196	弥生土器 底部	底径：6.0	外面：ヘラミガキ・ナデ? 内面：ヘラケズリ・指頭押圧	外面：淡橙褐色～暗褐色 内面：淡橙褐色～暗褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
197	弥生土器 底部	底径：6.6	外面：ヘラミガキ・ナデ? 内面：ヘラミガキ	外面：淡橙褐色～黒褐色 内面：淡橙褐色～黒褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ下層	黒斑あり
198	弥生土器 底部	底径：1.7	外面：ヘラミガキ・ナデ? 内面：ヘラケズリ・指頭押圧	外面：暗橙褐色 内面：暗橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・北東隅黒灰色粘土	
199	弥生土器 底部	底径：1.8	外面：ヘラミガキ・ナデ? 内面：ヘラケズリ・指頭押圧	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・北東隅黒灰色粘土	
200	弥生土器 底部	底径：6.0	外面：ヨコナデ・ナデ? 内面：ナデ・指頭押圧	外面：橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	

番号	種別・器種	計測値	調整	色調	胎土	出土地点	備考
201	弥生土器 底部	底径： (7.6)	外面：ヨコナデ・ナデ？ 内面：ナデ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
202	弥生土器 底部	底径： 5.0	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・北東隅黒灰色粘土	
203	弥生土器 底部	底径： 3.3	外面：ヘラミガキ？・ナデ？ 内面：ヘラケズリ・指頭押圧	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・灰色～茶褐色粘砂	
204	弥生土器 底部	底径： 1.5	外面：ハケ目・ナデ 内面：ナデ・指頭押圧	外面：黒褐色 内面：淡橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・礫層	底部に穿孔
205	弥生土器 底部	底径： 3.5	外面：ハケ目・ナデ 内面：ヘラケズリ	外面：淡黄褐色～暗褐色 内面：淡黄褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ	底部に穿孔
206	弥生土器 底部	底径： 4.0	外面：ナデ？ 内面：ヘラケズリ・ナデ	外面：黒褐色 内面：淡黄褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ	底部に穿孔
207	弥生土器 底部	底径： 3.2	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	外面：淡黄褐色 内面：淡黄褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ	底部に穿孔
208	弥生土器 脚部		外面：ヘラミガキ 内面：ナデ？・指頭押圧	外面：淡橙褐色 内面：黒褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
209	弥生土器 脚部		外面：ナデ？・指頭押圧 内面：ハケ目・指頭押圧	外面：黒褐色 内面：黒褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
210	弥生土器 脚部	脚部径： 6.2	外面：ヘラミガキ？・ナデ？ 内面：ナデ？	外面：橙褐色 内面：橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み	
211	弥生土器　壺 胴部		外面：？ 内面：？	外面：橙褐色 内面：橙褐色	粗砂含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	胴部にヘラ描き沈線２条と刺突文
212	弥生土器　壺 胴部		外面：ヘラミガキ 内面：ナデ？・ヘラミガキ	外面：暗橙褐色 内面：橙褐色	粗砂含む	北側落ち込み ・1トレ	胴部にヘラ描き沈線８条以上と刺突文
213	弥生土器　壺 胴部		外面：ヘラミガキ？ 内面：ナデ	外面：暗橙褐色 内面：明橙褐色	粗砂含む	北側落ち込み ・礫層下	胴部に櫛描き沈線５条以上
214	弥生土器 口縁部		外面：ナデ？ 内面：？	外面：暗橙褐色 内面：橙褐色	粗砂含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	胴部に竹管文（1か所）
215	須恵器　杯蓋	口径： (13.1) 器高： 4.3	外面：回転ヘラ切り・回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：青灰色 内面：青灰色	精良 砂粒少含	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
216	須恵器　杯蓋	口径： (13.1)	外面：ヘラケズリ・回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：青灰色 内面：青灰色	精良 砂粒少含	北側落ち込み ・2～3トレ	
217	須恵器　杯蓋	つまみ径： 2.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：青灰色 内面：青灰色	精良 砂粒少含	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
218	須恵器　杯蓋	口径： (14.8)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡青灰色 内面：淡青灰色	精良 砂粒少含	北側落ち込み ・2トレ	
219	須恵器　杯蓋	口径： (12.9)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡青灰色 内面：淡青灰色	精良 砂粒少含	北側落ち込み ・2トレ	
220	須恵器　杯身 口縁部	口径： (19.6)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡橙灰色～淡青灰色 内面：淡橙灰色～淡青灰色	精良 砂粒少含	北側落ち込み ・3トレ	
221	須恵器　杯身 底部	底径： (6.6)	外面：回転ナデ，回転ヘラ切り・ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡青灰色 内面：淡青灰色	精良 砂粒少含	北側落ち込み ・3トレ	
222	須恵器　杯身 底部	底径： (6.6)	外面：回転ナデ，回転ヘラ切り・ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡青灰色 内面：淡青灰色	精良 砂粒少含	北側落ち込み ・3トレ	
223	須恵器　杯身 底部	高台径： (10.7)	外面：回転ナデ，回転ヘラ切り・ナデ 内面：回転ナデ，ナデ	外面：淡青灰色 内面：淡青灰色	精良 砂粒少含	北側落ち込み ・2～3トレ	
224	須恵器　杯身 底部	高台径： (10.6)	外面：回転ナデ，回転ヘラ切り・ナデ 内面：ナデ	外面：淡青灰色 内面：青灰色	精良 砂粒少含	北側落ち込み ・2～3トレ	
225	須恵器　壺 口縁部～頸部	口径： (11.3)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡青灰色 内面：淡青灰色	精良 砂粒少含	北側落ち込み ・1～2トレ	頸部外面に沈線２条
226	須恵器　高杯 杯部～脚柱部		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡青灰色 内面：淡青灰色	砂粒少含	北側落ち込み ・2～3トレ	
227	須恵器　鉢 口縁部～体部	口径： (22.1)	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒少含	北側落ち込み ・2トレ	体部外面に把手装着
228	瓦質土器　鉢 口縁部～体部		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ハケ目	外面：暗青灰色 内面：青灰色	砂粒少含	北側落ち込み ・2トレ	
229	須恵器 脚部	高台径： 5.3	外面：回転ナデ? 内面：回転ナデ?	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	細砂含む	北側落ち込み ・2～3トレ	
230	輸入磁器(青磁)　碗 体部～高台部	高台径： (5.7)	外面： 内面：	表面：淡緑色 断面：淡青灰色	精良	西側床土	
231	陶器　壺 口縁部～頸部		外面：ヨコナデ・タタキ目 内面：ヨコナデ	外面：淡青灰色 内面：淡青灰色	砂粒含む	北側落ち込み	亀山系
232	須恵器　壺 口縁部～胴部		外面：ヨコナデ・タタキ目 内面：ヨコナデ・ナデ	外面：淡青灰色 内面：淡青灰色	砂粒少含	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
233	陶器　擂鉢 口縁部～体部		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ	外面：暗青灰色 内面：暗青灰色	砂粒少含	北側落ち込み ・2～3トレ	備前焼
234	瓦　平瓦	厚さ： 1.8	凹面：布目・ヘラ切り 凸面：縄目・ナデ	表面：淡灰色 断面：淡灰色	砂粒多含	調査区内	
235	瓦　平瓦	厚さ： 1.8	凹面：布目・ヘラ切り 凸面：縄目・ナデ	表面：暗青灰色 断面：淡灰色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	
e	弥生土器　鉢 胴部		外面：? 内面：ナデ?	外面：明橙褐色 内面：明橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	胴部外面に刺圧痕?あり
f	弥生土器 胴部		外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	外面：明橙褐色 内面：明橙褐色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	胴部外面に刺圧痕?あり
g	弥生土器 胴部～底部		外面：ヘラミガキ 内面：ヘラケズリ	外面：黒褐色 内面：暗灰色	砂粒含む	北側落ち込み ・1～2トレ	胴部外面に刺圧痕?あり
h	弥生土器 胴部		外面：ヘラミガキ? 内面：ナデ?	外面：明橙褐色 内面：明橙褐色	砂粒多含	北側落ち込み ・1～2トレ礫層下	胴部外面に線刻あり

3　まとめ

曽川１号遺跡は御調川の南側の丘陵裾部緩斜面に立地する集落遺跡であり，Ｅ地区は遺跡の北西端に位置する。調査の結果，住居跡などの明確な遺構は確認されなかったが，北方向に緩やかに傾斜する落ち込み（北側落ち込み）を検出した。北側落ち込みからは縄文土器・弥生後期土器・須恵器が多く出土したほか，後期以外の弥生土器と陶磁器・瓦・石器などが若干出土した。ここでは北側落ち込みから出土した縄文土器・弥生後期土器について検討し，まとめとしたい。

（1）　北側落ち込み出土の縄文土器について

縄文土器は北側落ち込み下層の灰色粘質土を中心に出土した。これらは細片が多く完形になるものは無い。また，表面が摩滅したものも多いことから，Ｅ地区より南側の丘陵緩斜面から北側落ち込みに向けて流れ込み，堆積したものと考えられる。

まず，縄文土器の時期について検討する(1)。縄文土器は大きく分けて有文土器と無文土器があり，ここでは，有文土器を中心に検討する。

有文土器は，縄文を有するものと縄文を有さないものがあり，縄文を有するものはさらに口縁部と胴部との間で文様が連続するもの（Ａ）と連続しないもの（Ｂ）がある。

縄文を有するＡ（１～21）の多くは中津式もしくは福田ＫⅡ式に入るようである。そのなかで，８は３本沈線を施した深鉢の口縁部片で，典型的な福田ＫⅡ式に属する。また，13～18は「Ｊ」字文あるいはその変化形と考えられ，中津式もしくは福田ＫⅡ式に入る。21は橋状把手を貼り付けたもので，縁帯文土器(2)に属する。なお，９は外面に撚糸文とみられる縦方向の文様が残る深鉢の口縁部片と考えられ，他の土器と調整・胎土・色調が異なることから，時期は不明である。縄文を有するＢ（22～31）の多くは口縁部と胴部の区別が明瞭になっており，縁帯文土器に該当するようである。なお，浅鉢である90・91も中津式もしくは福田ＫⅡ式と考えられる。

縄文を有さないもの（32～72）のうち32～42・47は，口縁部が肥厚し口縁部と胴部の区別が明瞭になっており，縁帯文土器に属すると考えられる。また，65・66は外面に太い沈線で紡錘形の文様を施した胴部片で，中津式に属すると思われ，56・61・62・67・68も中津式もしくは福田ＫⅡ式に属するようである。

このように，有文土器では中津式・福田ＫⅡ式・縁帯文土器が確認され，後期前半～中頃の時期に入るようである。無文土器の時期ははっきりしないが，概ね有文土器の時期の範囲に入るようである。また，多孔底土器（107～109）の時期は一般的に福田ＫⅡ式前後の後期前半頃に限られている(3)。以上から，今回出土した縄文土器の時期は概ね後期前半～中頃と考えられる。

次に遺跡内および周辺地域との関係をみていく。曽川１号遺跡Ａ地区などで縄文土器が出土しているが，縄文時代の明確な遺構はほとんど確認されていない(4)。ただ，Ｅ地区での縄文土器の出土状況から，後期前半～中頃の時期に曽川１号遺跡が所在する丘陵上において部分的にでも集落が営まれた可能性が考えられる。そのなかで，Ｅ地区は集落の周縁部に位置すると思われる。

なお，備後南部（芦田川水系）での縄文時代遺跡は，洗谷貝塚（福山市）など32か所があり[5]，芦田川およびその支流に沿って分布している。そのなかで芦田川支流の御調川流域ではこれまで確認されていなかったが，曽川１号遺跡で初めて確認されたことによって，後期の時期には芦田川水系を西にさかのぼって御調川流域にも縄文文化が広がっていたことが明らかになった。

最後に，曽川１号遺跡で出土した多孔底土器について若干ふれてみたい。以前より東北・北陸・山陽などで知られており，県内では第Ⅳ-5表のとおり曽川１号遺跡を含めて６か所で確認されている[6]。これらを孔の大きさで分けると，直径２cm前後（Ａ類）・直径0.5～1.0cm前後（Ｂ類）・直径0.3～0.4cm（Ｃ類）の３種類になり，Ｂ類が比較的多いようである[7]。用途については，（ア）「沪過器説」，（イ）「炊飯器説」・「蒸器説」あるいは「酒造器説」，（ウ）「漉器説」などが挙げられている[8]。仮に（イ）「蒸器説」などを考えた場合，孔の大きさの違いは原材料の違いや生成物の違いに関係するかもしれない。いずれにしても前述の孔の大きさの違いはその用途や使用方法の違いに起因するものと思われる。多孔底土器の用途についてははっきりせず，その時期や分布などと合わせて今後の課題である。

（２） 北側落ち込み出土の弥生後期土器について

弥生後期土器は中層の黒褐色粘土を中心に多く出土した。完形に近いものが比較的多く，直近から投棄された様子がうかがえる。これらの土器の概要を従来の時期区分に従ってみていく[9]。Ⅴ-１期は，壺110～114・119・120・126，甕127・130・132・133，鉢144・145，高杯158，器台173などで，胴部が算盤玉形の壺120・126や胴部外面にタタキ目を残す甕133などⅤ-１期の特徴がみられる。Ⅴ-２期は，壺117，甕128，鉢140・141・146，高杯159など，Ⅴ-３期は，壺118・121，鉢142・157，高杯169，器台172などがある。庄内併行期は，壺122～124，甕134～138，鉢143・148，高杯160・167・168，器台177などで，鼓型器台である177など山陰系の影響を受けたものがみられる。また，高坏167・168は備中地域の例に似ており[10]，吉備系の影響もみられる。このようにＥ地区出土の弥生土器は後期を通してみられるが，傾向としてⅤ-１期および庄内併行期のものが多いようである。Ａ～Ｄ地区では後期後葉（Ⅴ-３期）から後期末（庄内併行期）に最盛期で

第Ⅳ-5表　多孔底土器出土地（広島県内）一覧表

所在地・遺跡名	出土点数	孔の大きさによる分類				文献
		Ａ類-直径２cm前後	Ｂ類-直径0.5～1.0cm前後	Ｃ類-直径0.3～0.4cm	その他・不明	
尾道市・曽川１号遺跡	3	直径２cm前後	直径0.6～0.8cm			本書
尾道市・大田貝塚	1			直径0.3～0.4cm		文献（１）
福山市・洗谷貝塚	1				不明	文献（１）
	6	直径２cm前後	直径0.5～0.8cm			文献（２）
福山市・木之庄貝塚	3		直径0.6～0.9cm			文献（１）
福山市・芋平遺跡	1		１cm前後			文献（３）
広島市・比治山貝塚	1				不明	文献（１）

文献（１）　岩野見司・吉岡郁夫「広島県の縄文遺跡より出土せる多孔底土器について」『国大考古学会々報　若木考古』第59号　国学院大学考古学会　1960年
（２）　洗谷貝塚発掘調査団・福山市教育委員会『洗谷貝塚』　1976年
（３）　小都隆「芦品郡新市町芋平遺跡について」『芸備』第４集　芸備友の会　1976年

あるように報告されているのに対し，Ｅ地区ではⅤ-１期のものがまとまってみられ，逆にⅤ-３期のものが少なく，庄内併行期に再び増加する様子がうかがえる。こうしたことから，遺跡の北端周辺においては後期前葉から集落が現れ，後期末にかけて断続的に集落が営まれたものと思われる。なお，完形の甕・高坏のミニチュア土器がみられるほか，手づくね土器の椀が比較的多く出土していることから，集落の周辺部であるＥ地区付近が儀礼的な行為が行われた場所であったか，あるいはそれに関係する場所であった可能性がある。

以上，Ｅ地区から出土した縄文土器・弥生後期土器についてみてきた。特に縄文土器は，御調町内での出土例は少なく，包含層ながら良好な資料になるであろう。また，Ｅ地区が縄文集落の縁辺部にあたり，近くの集落から丘陵先端のＥ地区に縄文土器が多量に落ち込んだものであることが明らかになった。弥生後期土器は曽川１号遺跡のこれまでの調査でも多く出土しており，弥生時代後期前葉から末にかけて断続的に集落が営まれたことをＥ地区の調査で改めて確認した。なお，御調町内では出土例の少ない弥生前期及び中期の土器がみられたことや，古代の須恵器・瓦の出土から遺跡内外に古代山陽道や古代官衙に関係する遺構の存在も想定されることなど，今回のＥ地区の調査では遺跡周辺の様相を考えるうえで貴重な資料が得られた。

註

（１） 縄文土器の型式や時期については次の文献による。
大川清・鈴木公雄・工楽善通編『日本土器事典』雄山閣出版株式会社　1996年

（２） 縁帯文土器について，ここでは，福田ＫⅡ式の後の津雲Ａ式・彦崎ＫⅠ式以降の土器をいう。
泉拓良・玉田芳英「文様系統論-縁帯文土器-」『季刊考古学』第17号　雄山閣出版株式会社　1986年

（３） 小都隆「芦田川水系における縄文時代遺跡の分布について」『考古論集-慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集-』松崎寿和先生退官記念事業会　1977年

（４） 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（２）　曽川１号遺跡（Ａ～Ｄ地区）』　2006年

（５） 註（３）と同じ。

（６） 岩野見司・吉岡郁夫「広島県の縄文遺跡より出土せる多孔底土器について」『国大考古学会々報　若木考古』第59号　国学院大学考古学会　1960年

（７） 愛媛県鶴来が元遺跡出土例３点・高知県松ノ木遺跡出土例１点でも孔の直径が１㎝前後のものが報告されており，いずれもＢ類に入ると思われる。
財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ-小松町編Ⅰ-鶴来が元遺跡』　1994年
高知県長岡郡本山町教育委員会『松ノ木遺跡Ⅴ』　2000年

（８） 註（６）と同じ。

（９） Ⅳ-２章の註（１）と同じ。

Ⅴ　牛の皮城跡（第４次）

１　調査の概要

（１）　遺跡の状況（第Ⅴ-１図，図版26・27）

牛の皮城跡は御調川に臨む標高200m前後の丘陵部に立地し，北郭群・南郭群に分かれている（第Ⅱ-２図参照）。この北郭群は尾道市御調町大町字二の丸に所在し，南東側最高所（標高約166m）から北西側（標高約145m）にかけて連続する大小５段の平坦部（最高所の１郭から順に２～５郭）で構成される。これまでに，平成14年度に北郭群北西側の畝状竪堀群を，平成15年度に郭部分（１郭の約半分と２～４郭）とその西側の竪堀（西竪堀）を調査し，報告（以下「第１～３次調査報告」という。）[1]している。今回の第４次調査は，北郭群５郭の約223㎡を対象に実施した。５郭と麓の畑地との比高は約60mである。

（２）　調査の方法・概要（第Ⅴ-２・３図，図版27・28）

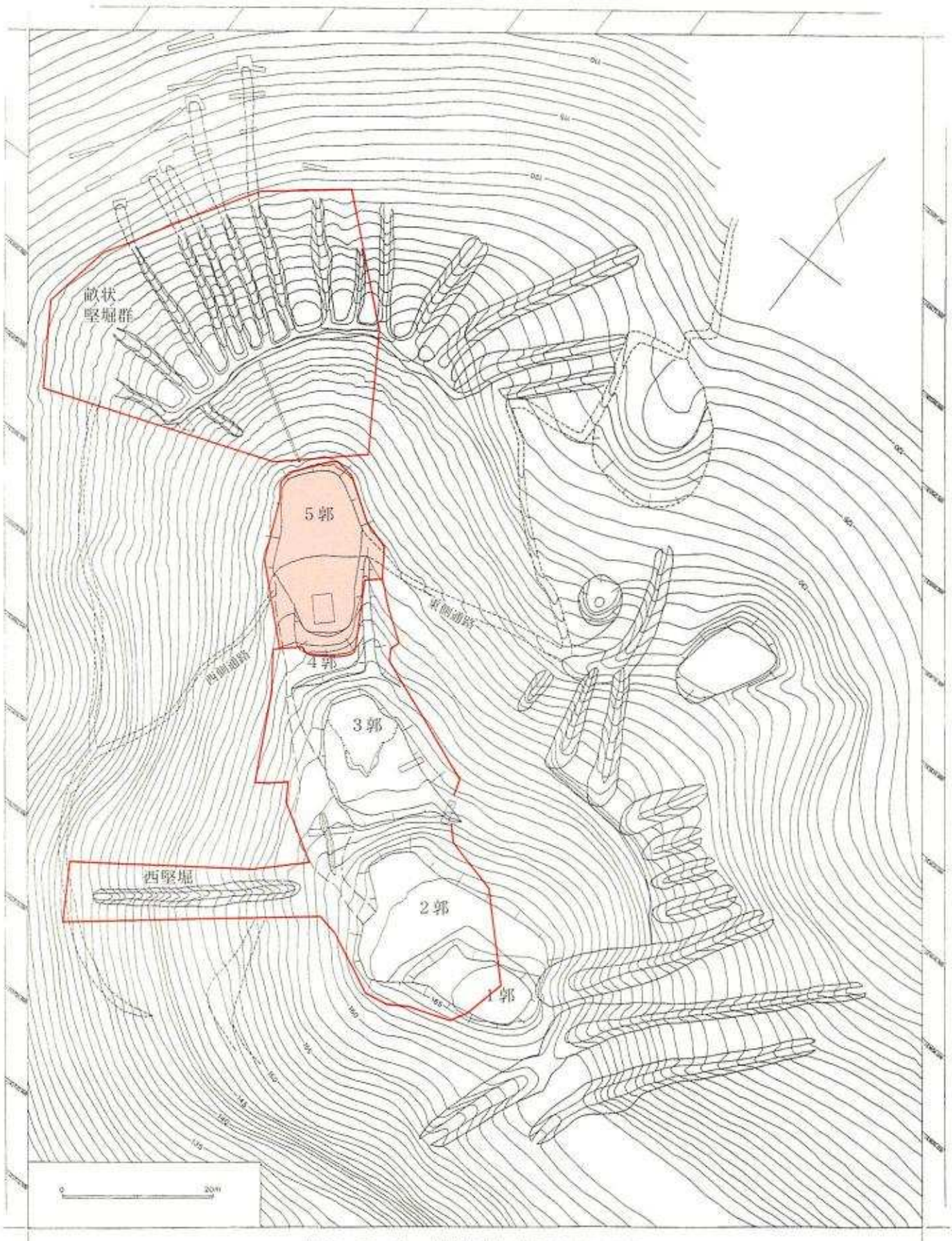
北郭群５郭は南東から北西に長いため，この方向を長軸として「キ」の字に畦を設定し，南西側から北東側に１区・２区・・・６区とブロック名を付けた（第Ⅴ-２図参照）。調査前は神社の敷地として利用されていたため，神社の基礎部分を除去したあと，南側の１・２区から人力で表土剥ぎを始め，遺構検出を行った。なお，調査区北側の５・６区間のトレンチを深掘して盛土の土層の確認を行ったところ，基本的な土層は，神社が存在していた郭の南側では表土の直下は地山になっており，北側では表土，黄褐色粘質土（５郭の整地層），地山となっている（第Ⅴ-３図参照）。５郭の整地層は郭の中央部から北側でみられ，北側に向かって徐々に厚くなり北端では0.5mほどになっている。郭の東西両側や北端では神社の整地層がみられ，神社造営時などに敷地造成が行われたようである。

遺構は，建物跡などの存在を想定したが，調査の結果，明確な建物の柱穴などは確認できなかった。なお，神社に伴うと思われる撹乱坑やピットを主に北側で数か所確認した。

遺物は，土師質土器皿の細片や鉄釘片が１・２区の表土・埋土や５・６区の盛土から比較的多く出土したほか，瓦質土器擂鉢１点，碁石と思われる小石１点，鉄鏃１点，小札１点，棒状及び板状鉄製品数点，鉛玉１点，古銭（天聖元宝）１点，鉄滓４点（大きさ４cm×４cm～９cm×５cm）などが５郭全域の表土や５・６区の盛り土から出土した。また，近世以降の陶磁器・瓦や寛永通宝（12点）など近現代の遺物が調査区全域の表土や神社の整地層から出土したほか，神社に伴うと思われる撹乱坑から焼土や炭化物とともに出土した。

註

(1)　財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曽川2号遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（1）』 2005年



第V-1図　牛の皮城跡北郭群地形図(1:700)
(赤は全体の調査区、アミ目は第4次調査範囲)

2　遺構と遺物

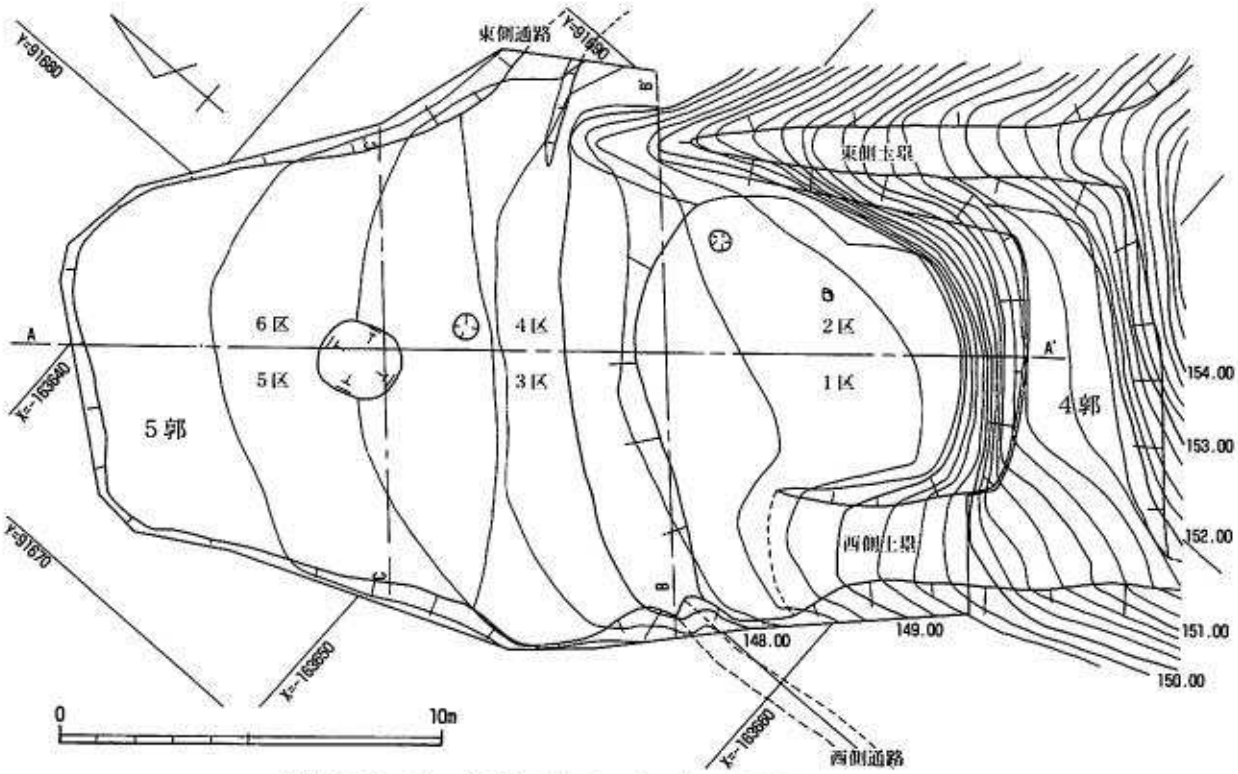
(1)　遺構(第V－2・3図，図版28～30)

5郭は北郭群の北西端で，最も低い地点に位置する。形状は中央部分がやや幅広の長方形状で，規模は東西約13m×南北約23mである。郭の南側(1・2区)では切土，北側(5・6区)では盛土で平坦面を造成している。郭の北側は傾斜角度45°前後の切岸を造っている。5郭と北西側の畝状竪堀群内の横堀との高低差は約13mである。

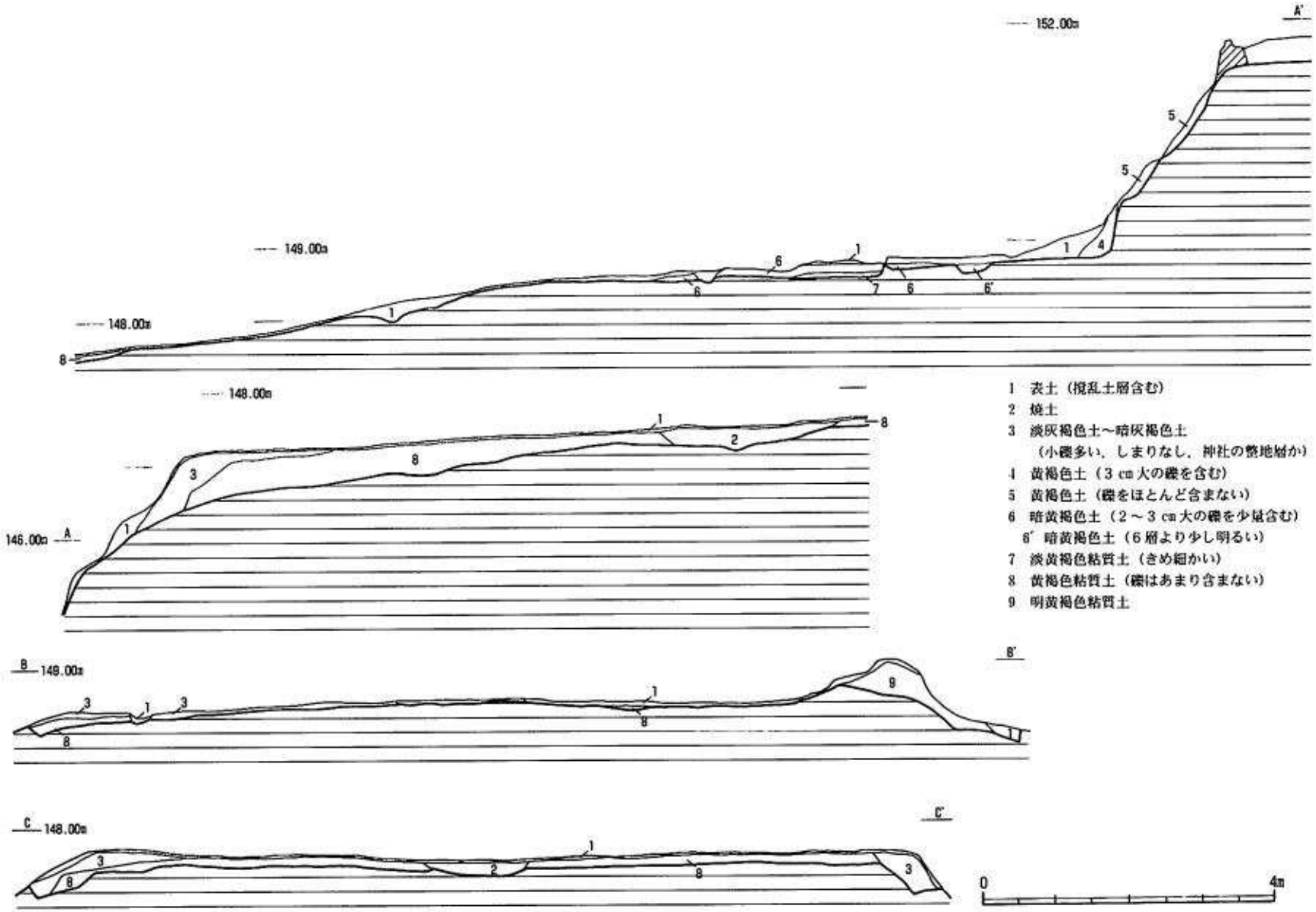
郭の平坦面の形状については，南端と北端との高低差は約2mあり，1・2区と5・6区ではやや平坦であり，この間の3・4区では緩やかな傾斜がある。このような形状は郭本来のものかは不明である。平坦面での遺構検出は第6層および地山の上面で行ったが，礎石や柱穴などの明確な遺構は確認できなかった。遺物の出土状況からも建物跡の位置を想定することはできなかった。このような郭の現状の形状や遺構の有無については，調査前に5郭が神社の敷地として利用されていたことから，神社造営の際の造作の影響が大きいと思われる。なお，神社北側の広場にあたる部分(主に5・6区)では焼土や炭化物を多く含む大小の撹乱坑が数か所みられた。

5郭の東西両側に土塁を造成しているが，東側の土塁は3郭の切岸東端部から始まり北方向に延びている。土塁の規模は，土層断面B-B'の部分で幅約2m，高さ約1mで，明黄褐色粘質土(第9層)を盛土して造成していることを確認した。

東西両側の土塁の北側には下方への通路がある。東側通路は幅1～2mでやや幅広く，麓から神社に通じる山道である。西側通路は幅0.6～1.2mとやや狭く，西側の急な斜面を斜めに横切っ



第V－2図　牛の皮城跡北郭群5郭調査区遺構実測図(1：200)



第V-3図　牛の皮城跡北郭群5郭土層断面図（1：80）

ており，西側斜面の中腹で西竪堀方面から北側の畝状竪堀群方面につながる通路に合流している。

（2） 出土遺物（第Ⅴ－3・4図，第Ⅴ－1・2表，図版31・32）

ここでは，城跡に関係すると思われる土器・石製品・金属製品と，近世の寛永通宝について報告する。

土器（1～7） 土師質土器皿，瓦質土器擂鉢などがある(1)。

土師質土器（1～6）

皿（1～6） 1・2はやや大きめ（口径12.5～13.1cm）の皿，5・6は小さめ（口径8.0～9.2cm）の皿である。3・4は前者に入ると思われる。体部は斜めにまっすぐ立ち上がるものが多く，3はやや内湾して立ち上がる。底部の切り離しは，1・5・6が回転ヘラ切り，2が回転糸切りとなっており，3・4は不明である。

瓦質土器（7）

擂鉢（7） 体部は斜めにまっすぐ立ち上がり，口縁端部は平坦でややくぼんでいる。外面は粗いナデ，内面に斜め方向の粗い擂り目（間隔は0.5cm前後）を入れ，擂り目が交差している部分がある。擂り目の単位は不明である。

石製品（19）

小石（19） 直径が2.2～2.4cmの円形，断面が厚さ0.7cmの扁平な長円形で，灰白色の小石である。石材は玢岩である。全面を丁寧に磨いており，碁石と思われる。碁石の類例は北広島町万徳院跡(2)・同町小倉山城跡(3)の報告例がある。

金属製品（8～18，20～33） 鉄釘，鉄鏃，小札，棒状鉄製品，板状鉄製品，鉛玉，古銭がある。

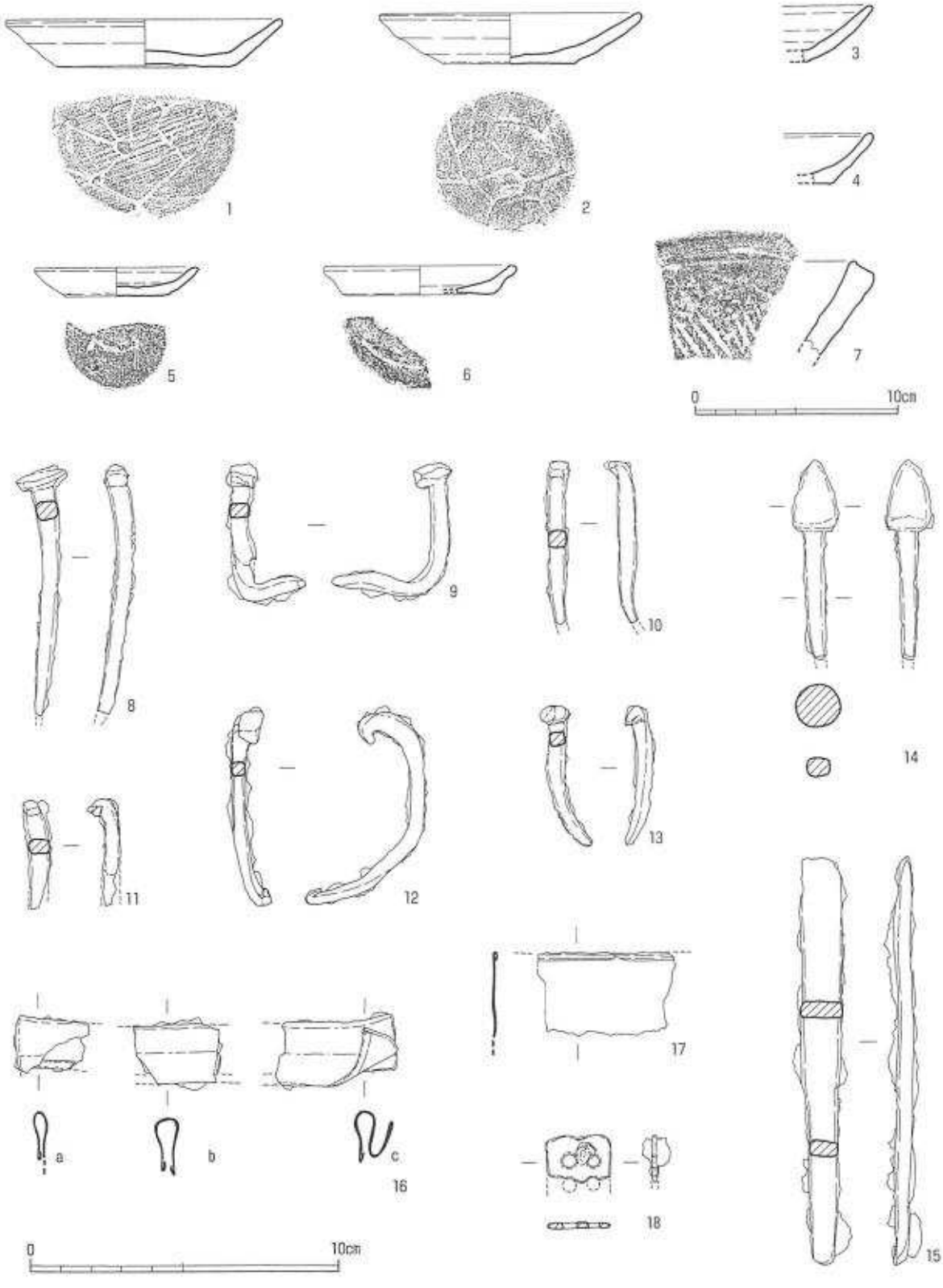
鉄釘（8～13） 8・9は頭部が「T」字状，10～13は「L」字状になっている。断面はいずれも長方形または方形で，厚さが0.5～0.7cmのものが多い。長さは8cm前後でやや長いもの（8・9・12）と，4.5～6.0cmとやや短いもの（10・11・13）がある。

鉄鏃（14） 先端部は断面円形の円錐形で，その下部に断面方形で長い茎状のものがつく。先端部の長さは2.3cm，茎部の長さは4.2cm以上である。類例は広島市有井城跡(4)の報告例がある。

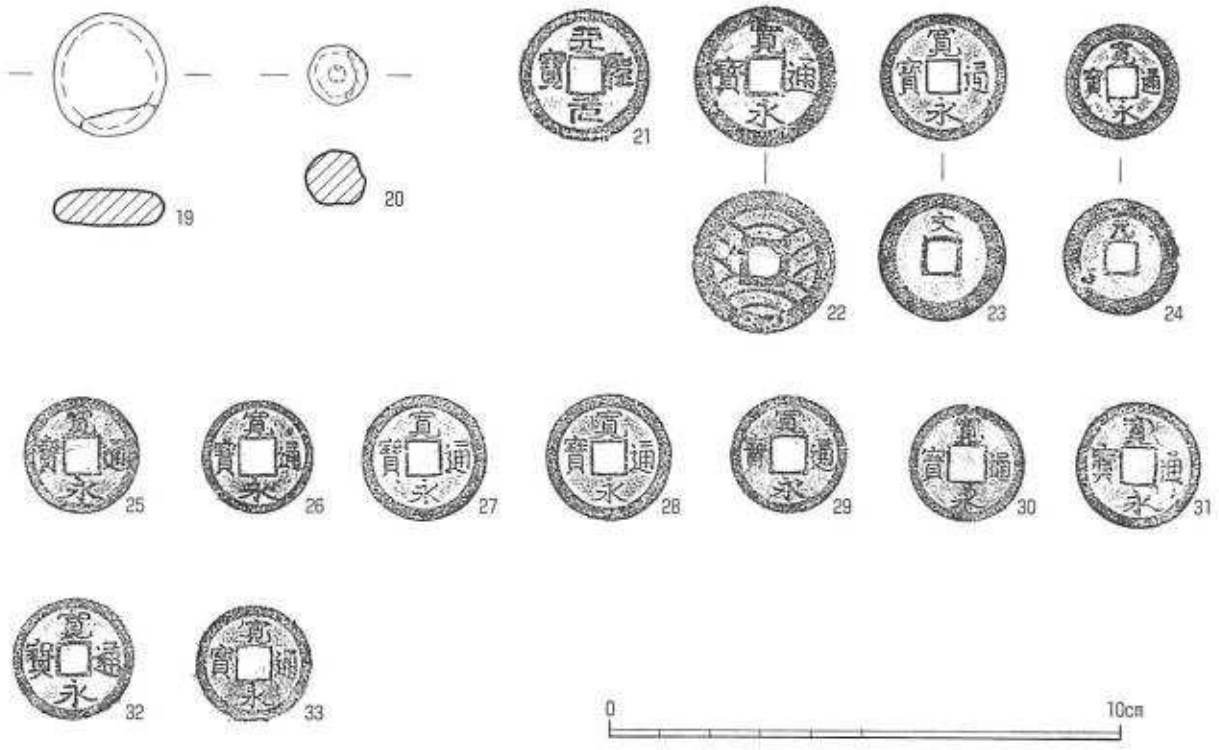
小札（18） 甲冑に用いられた小札の頭部（上部）の破片である。札頭の中央を割り，その左右を丸く作ったもので，伊予札（碁石頭伊予札）に該当する(5)。直径0.4～0.5cmの孔を0.4cmほどの間隔で2列に穿っている。

その他の鉄製品（15～17） 15は棒状，16・17は板状のものである。15は断面が長方形の短冊形をしており，先端が尖り気味で鑿のような形状をしている。側面からみると若干歪んでいる。16・17は薄い板の両側あるいは片側の縁を小さく折り返している。16はさらに大きく半分に折りたたみ，内側部分は断面でみると円形で，棒状のものを挟んだ形状である。16はａ～ｃの３個の破片だが，同一個体で平面形が細長い長方形になると思われる。15～17はいずれも用途不明である。

鉛玉（20） 直径1.1～1.2cmの球形で，平坦な部分や窪んだ部分がある。錆はないが，表面の風



第Ⅴ-4図　牛の皮城跡北郭群５郭出土遺物実測図（1）（1：3、1：2）



第Ⅴ-5図　牛の皮城跡北郭群５郭出土遺物実測図(2)及び出土古銭拓影(2:3)

化が進んでいる。鉄砲玉とも考えられ，類例は北広島町小倉山城跡[6]・広島市有井城跡[7]の報告例がある。

古銭(21～33)　21は「天聖元宝」(初鋳：北宋・1023年)，22～33は「寛永通宝」である。22の背面に波紋，23の背面に「文」の文字，24の背面に「元」の文字がある。22は四文銭(真鍮銭)，23～33は一文銭(銅銭)である。23～33は新寛永の時期で，23は文銭，24～33はその他の新寛永に分類される[8]。21は城跡に伴う可能性があるが，寛永通宝は近世以降の神社に伴うものと思われる。

註

(1)　出土土器については，広島県立歴史博物館鈴木康之氏のご教示を得た。

(2)　広島県教育委員会『万徳院跡-第２次発掘調査概要-』　1994年

(3)　広島県教育委員会『小倉山城跡-御座所跡試掘調査概要-』　1995年

(4)　財団法人広島市歴史科学教育事業団『有井城跡発掘調査報告』　1993年

(5)　小札の分類については，次の文献による。

山岸素夫・宮崎真澄『日本甲冑の基礎知識』雄山閣出版株式会社　1990年

(6)　註(3)と同じ。

(7)　註(4)と同じ。

(8)　寛永通宝の分類については，次の文献による。

兵庫埋蔵銭調査会『近世の出土銭Ⅱ-分類図版篇-』　1998年

第V-1表　牛の皮城跡北郭群5郭出土掲載遺物（土器）一覧表

＊　単位はcm，（　）は復元推定値

番号	種別・器種	計測値 ＊ 口径：	底径：	器高：	調整	色調	胎土	出土地点	備考
1	土師質土器 皿 口縁部～底部	(13.1)	(8.8)	2.3	外面：回転ナデ，回転ヘラ切り 内面：ナデ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒多含	2区埋土	底部に板目が残る
2	土師質土器 皿 口縁部～底部	12.5	6.5	2.5	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：ナデ	外面：淡橙褐色～黒褐色 内面：淡橙褐色～黒褐色	砂粒多含	2区埋土	
3	土師質土器 皿 口縁部～底部	－	－	2.7	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒多含	2区埋土	
4	土師質土器 皿 口縁部～底部	－	－	2.5	外面：回転ナデ？ 内面：回転ナデ？	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒少含	6区盛土	
5	土師質土器 皿 口縁部～底部	(7.8)	(5.0)	1.4	外面：回転ナデ，回転ヘラ切り 内面：ナデ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒少含	2区埋土	底部に板目が残る
6	土師質土器 皿 口縁部～底部	(9.2)	(7.4)	1.4	外面：回転ナデ，回転ヘラ切り？ 内面：ナデ？	外面：黒褐色～暗黄褐色 内面：黒褐色～暗黄褐色	砂粒多含	1区表土	
7	瓦質土器 擂鉢 口縁部	－	－	－	外面：粗いナデ？ 内面：ナデ	外面：淡橙褐色 内面：淡橙褐色	砂粒多含	6区盛土	内面に粗い擂り目

第V-2表　牛の皮城跡北郭群5郭出土掲載遺物（石製品・金属製品）一覧表

＊　長さ・最大幅・厚さ・直径の単位はcm，重さの単位はg，（　）は現状値

番号	種別	器種	計測値 ＊ 長さ：	最大幅：	厚さ：	重量：	出土地点	備考
8	鉄製品	鉄釘	(8.3)	0.7	0.6	(10.2)	3区表土	
9	鉄製品	鉄釘	—	0.6	0.5	7.9	3区表土	
10	鉄製品	鉄釘	(5.3)	0.6	0.6	(4.6)	3区表土	
11	鉄製品	鉄釘	(3.6)	0.6	0.5	(3.9)	5区盛土	
12	鉄製品	鉄釘	—	0.5	0.5	9.2	1区表土	
13	鉄製品	鉄釘	4.5	0.5	0.5	2.9	5区盛土	
14	鉄製品	鉄鏃	(6.5)	1.5	1.5	(15.9)	3区表土	
15	鉄製品	棒状鉄製品	13.3	1.5	0.6	31.2	5区表土	用途不明
16	鉄製品	板状鉄製品a	(2.4)	1.9	0.5	(2.0)	5区盛土	板の厚さは約0.5mm 用途不明
		板状鉄製品b	(3.0)	2.4	0.8	(3.2)		
		板状鉄製品c	(4.0)	2.2	1.3	(4.8)		
17	鉄製品	板状鉄製品	(4.5)	(2.7)	0.2	(3.0)	6区盛土	板の厚さは約0.5mm 用途不明
18	鉄製品	小札	(1.6)	2.1	0.2	(1.3)	5区盛土	碁石頭伊予札の頭部片
19	石製品	小石	直径：2.2～2.4		0.7	5.8	6区盛土	石材は玢岩。全面よく磨いている。碁石？
20	金属製品	鉛玉	直径： 1.1～1.2			6.9	6区盛土	一部が凹む。鉄砲玉？
21	銅製品	古銭（天聖元宝）	直径： 2.6			3.6	神社跡トレンチ	初鋳は1023年（北宋）
22	銅製品	古銭（寛永通宝）	直径： 2.8			4.7	1区表土	真鍮四文銭（18-b～d ？）
23	銅製品	古銭（寛永通宝）	直径： 2.5			3.3	1区表土	文銭（1668～1683年）
24	銅製品	古銭（寛永通宝）	直径： 2.3			2.1	1区表土	新寛永（背元16-1）
25	銅製品	古銭（寛永通宝）	直径： 2.3			3.1	1区表土	新寛永（16-b）
26	銅製品	古銭（寛永通宝）	直径： 2.2			2.6	1区表土	新寛永（16-b）
27	銅製品	古銭（寛永通宝）	直径： 2.4			4.0	表面採取	新寛永？（16-b ？）
28	銅製品	古銭（寛永通宝）	直径： 2.4			4.0	神社跡トレンチ	新寛永？（16-b ？）
29	銅製品	古銭（寛永通宝）	直径： 2.3			2.4	神社跡トレンチ	新寛永？（16-b ？）
30	銅製品	古銭（寛永通宝）	直径： 2.3			1.8	神社跡トレンチ	新寛永？（16-b ？）
31	銅製品	古銭（寛永通宝）	直径： 2.4			2.5	1区トレンチ	新寛永？（16-c ？）
32	銅製品	古銭（寛永通宝）	直径： 2.4			3.3	1区表土	新寛永（16-c）
33	銅製品	古銭（寛永通宝）	直径： 2.3			2.0	2区表土	新寛永（16-e ？）

3 まとめ

第4次調査では，北郭群5郭の平坦面と東西両側の土塁などを検出した。ここでは，第1～3次調査報告とあわせて北郭群の遺構や出土遺物について再検討し，まとめとしたい。

(1) 牛の皮城跡の概要

本城跡は御調川に臨む丘陵部（最高所は標高約230m，比高約150m）に立地し，北郭群・南郭群に分かれている（第Ⅱ-2図参照）。発掘調査結果に基づき県内の中世城館跡の機能を考察・分類した小都氏によれば，本城跡はⅠc類（城の機能で大規模なもの）に入る(1)。Ⅰ類（＝城）は16世紀前半に増加し大型化するようであり本城跡もその一つであろう。なお，言い伝えでは天文13（1544）年，本城に森光新四郎景近が在城していたとされている(2)が，明確ではない。ただ，Ⅱ章でふれた三吉（森光）氏との関係がありそうである。

南郭群は北郭群より高所にあり，本城跡の中心部分と考えられている。南郭群には頂部の郭と北側に1段，西側に4段の郭，周囲に横堀2か所（西側尾根），竪堀多数（西側5条・東側13条・南側9条）がある(3)。南郭群の西端の郭はその両側に土塁を備え，北郭群5郭とよく似ている。また，要所で竪堀と土塁を組み合わせており，堅固な備えにしている。南郭群においては西・南・東方面に対する備えを堅固にし，北及び北東方面の備えは北郭群に分担させているようにみえる。

(2) 北郭群の遺構について

北郭群は最高所から順に1～5郭がある（第Ⅴ-3表参照）。規模は2・5郭が最も広く（220㎡前

第Ⅴ-3表　牛の皮城跡北郭群1～5郭の概要一覧表

＊1　平坦面の面積　　＊2　○：多量，△：少量

	概要							出土遺物 ＊2														
	規模(m)	調査面積(㎡) ＊1	下段との比高	形状	造成方法	切岸	土塁・遺構	土師質土器	瓦質土器	国産陶器			輸入磁器			土製品	石製品	鉄製品			その他の金属製品
										亀山	備前	不明	青花	青磁	白磁			釘	小札	その他	
1郭	8×7	48	2郭より1.5m高	長方形状	削出し			皿○				?碗1	碗1					○		鉄鏃？1 用途不明△	
2郭	20×15	172	3郭より7m高	多角形	南側切土 北側盛土	北側切岸 傾斜45°		皿○	擂鉢7	甕△	甕△		碗△・皿△	碗△・皿△	皿△	土錘8	砥石1	○	9	刀子状1 鎹1 用途不明△	金銅製鋲1
3郭	20×15	164	4郭より5m高	台形	南側切土 北側盛土	北側切岸 傾斜45°		皿○	擂鉢4				碗△		皿△・杯△			○	1	釣針1 ヤス状1 楔状1 石突状1	青銅製鋲1
4郭	10×3	26	5郭より3m高	通路状	切土		東側に土塁														
5郭	23×13	223	横堀より13m高	長方形状	南側切土 北側盛土	北側切岸 傾斜45°	東西両側に土塁	皿○	擂鉢1								碁石？1	○	1	鉄鏃1 用途不明△ 鉄滓△	鉄砲玉？1 古銭1

後)，４郭が最も狭い。２・３・５郭は南側切土，北側盛土で，同じ造成方法である。１郭は削出し，４郭は切土である。切岸は各郭とも45°前後と急斜面にしている。土塁は４・５郭で備えており，東側土塁は盛土で作っている。建物跡などの遺構は各郭とも確認されていない。

堀は，２郭の西側に竪堀１条，５郭の北側に畝状竪堀14条と横堀１条，１～３郭の東側に畝状竪堀９条，１郭の南東側で南郭群に通じる尾根に横堀２条をそれぞれ設けている。郭や堀の状況から北郭群では東方向や北方向に対する備えを強めている様子がうかがえる。

郭に通じる通路は，５郭の東側に通じる山道があるほか，同じ５郭の西側に通じるやや狭い通路がある。北郭群の西側斜面には竪堀が１条しかなく，北側や東側に比べて警戒の度合いが薄いようにみえることから，この西側通路は北郭群と南郭群や西側山麓との間をつなぐ連絡通路の可能性が考えられる。

（３） 北郭群の出土遺物について

北郭群の各郭から多様な遺物が出土している（第Ⅴ－３表参照）。

土師質土器皿は１～３・５郭で多く出土している。いずれも高台がなく，平底のものである。これらは草戸千軒町遺跡での分類によると皿Ａとしている[4]。ここでは１～３・５郭で出土した皿Ａを，皿ＡⅠ（口径7～9.4cm）と皿ＡⅡ（口径11～14.6cm）に分ける。報告したものは，1郭で皿ＡⅠ－７点と皿ＡⅡ－１点，２郭で皿ＡⅠ-10点と皿ＡⅡ－２点，３郭で皿ＡⅠ－２点と皿ＡⅡ－７点，５郭で皿ＡⅠ－２点と皿ＡⅡ－４点である。このことから，短絡的であるが，１・２郭で皿ＡⅠの割合が多く，３・５郭で皿ＡⅡの割合が多い傾向がうかがえる。また，皿Ａの底部をみると，回転ヘラ切り技法で板目の痕跡がよく残っているものが各郭とも多く，１・２郭では回転ヘラ切り技法のみであった。一方，３・５郭では回転糸切り技法のものが数点みられた[5]。このように，１・２郭と３・５郭において，皿ＡⅠと皿ＡⅡの割合の違う傾向があることや，底部切り離し技法の異なる皿が出土する状況があり，このことは郭のもつ性格の違いを反映しているのかもしれない。

瓦質土器擂鉢は２・３郭でやや多く，５郭で少し出土している[6]。

陶磁器は２・３郭でやや多く，１郭で少し出土している。

土師質土器皿・陶磁器の時期については第１～３次調査報告で検討され，全般的に16世紀前半前後とされている[7]。

次に金属製品のうち，鉄釘は１～３・５郭で多く出土している。柱穴が確認されていないことから，各郭に簡易的な建物が設営されたものと思われる。小札は破片も含めて11点出土した。本小札（四目）５点，伊予札（碁石頭伊予札）３点，不明３点である。大きさは札足（長さ）6.5～7.2cm，札幅（幅）1.6～2.2cm，厚さ0.2～0.3cmである（不明のものを除く）。県内の中世城館での小札の出土はこれまで安芸南部の４か所で報告されている[8]。小札が出土した城館はいずれもⅠ類（＝城）に分類されている[9]。また，小梨城跡以外では鉄鏃も出土しており，軍事的な性格を強く示している。ほかに，５郭では鉄滓が数点出土している。５郭では鍛冶の炉跡は確認していないが，城の機能時あるいは廃絶後の神社造営以前の一時，５郭周辺において鍛冶の作業が行われた可能

性がある[10]。なお，２・３郭では釣針・ヤス状の鉄器や土錘などの漁業道具が出土している。県内の中世城館での土錘の出土は８か所で報告されており[11]，海浜部や川沿いに所在する城館の生産活動の一側面がうかがえる。

このように出土遺物は，土器・釘などの生活道具，輸入磁器・小石（碁石？）などの奢侈品，鉄鏃・小札・鉛玉（鉄砲玉？）などの軍事関係，鉄滓や土錘・釣針などの生産関係など多様な要素がみられ，北郭群においてさまざまな活動がなされていたことを示している。

以上，北郭群の遺構および遺物を簡単にみてきたが，最後に北郭群５郭の性格についてふれたい。高所の１～３郭には土塁がなく，低い地点の４・５郭には土塁を備えており，下方からの攻撃に対する警戒の度合いが違っている。遺物の出土状況もやや様相を異にし，高所の１～３郭は土塁もなく生活道具も多いことから，生活の主要な場であったようである。一方，低い地点の５郭は土塁を備え生活道具も少ないことから周囲に対する備えの区画で，周囲の畝状竪堀群とセットなった最前線の区域だったようである。

なお，北郭群５郭では城の一部として使用された時期あるいはその役割を終えた後，鍛冶の作業所となった可能性がある。さらに，その後，神社が営まれ，地元住民に利用される空間になったようである。

註

（１） 小都隆『中世城館跡の考古学的研究』株式会社渓水社　2005年

（２） 是光吉基「牛の皮城跡」『日本城郭体系』株式会社新人物往来社　1980年

なお，『芸藩通志　巻百』によると，「最近は，天文年中，尼子家，三吉攻の日，加勢して，方名ありしものなり」とある。

（３） 広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第３集　1995年

（４） さらに，皿Ａは口径の大きさにより，「皿ＡⅠ（６～10cm程度）・皿ＡⅡ（10～14cm程度）・皿ＡⅢ（13～16cm程度）・皿ＡⅣ（16cm以上）」に分類されている。以上の草戸千軒町遺跡出土土師質土器の分類・分析・編年については，次の文献による。

鈴木康之「土師質土器の編年」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』Ⅴ　広島県教育委員会　1996年

（５） 第１～３次調査報告では，回転ヘラ切り技法は備後南部の瀬戸内沿岸に多いのに対し，御調町末近城跡では回転糸切りが出土している状況の中で，本城跡周辺では回転ヘラ切り技法が多いことを指摘している。

鈴木康之「瀬戸内の中世土器-吉備地域の土師質土器を中心に-」『考古学から見た地域文化-瀬戸内の歴史復元-』株式会社渓水社　1999年

（６） ２・３・５郭で出土した瓦質土器擂鉢は御調町末近城跡など16世紀頃に県内でよく見られるようである。（Ⅴ-２章の註（１）と同じ。財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『末近城跡』　2002年）

（７） 土師質土器の時期について再度みていくと，１～３・５郭の皿ＡⅡの器高指数（口径に対する器高の比率を百分率で示したもの）は13.2～20.0で平均は16.1となる。草戸千軒町遺跡では，皿ＡⅡの器高指数が「Ⅳ

期前半には19～21」,「Ⅳ期後半古段階には16～18程度」になるとされている。これを援用すると１～３・５郭の皿ＡⅡの器高指数は草戸千軒町遺跡でのⅣ期後半古段階の範囲に入り，15世紀末から16世紀初頭の時期が推定される。

(8)　次の文献によると，小札の出土例は，広島市有井城跡（３点)・同市恵下山城跡（２点)・同市亀崎城跡（１点)・竹原市小梨城跡（１点）の報告例がある。小札の形式はいずれも不明である。

小都隆「４　成果のまとめ　(４）発掘調査の成果」『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第４集　広島県教育委員会　1996年

(9)　註（１）と同じ。

(10)　註（１）によると，鍛冶の遺構は定住的な居住施設に伴うか，その跡地が利用される場合が多いということである。また，中世城館跡での鉄滓の出土例は次の15か所がある。

北広島町小倉山城跡・吉川元春館跡・安芸高田市郡山大通院谷遺跡・廿日市市宗高尾城跡・広島市池田城跡・同市伴東城跡・同市国重城跡・同市恵下城跡・同市恵下山城跡・同市有井城跡・東広島市西丁田城跡・同市薬師城跡・同市城仏土居屋敷跡・三原市三太刀遺跡・三次市加井妻城跡

このほか，三次市萩原城跡からも出土している（財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅴ　2003年)。

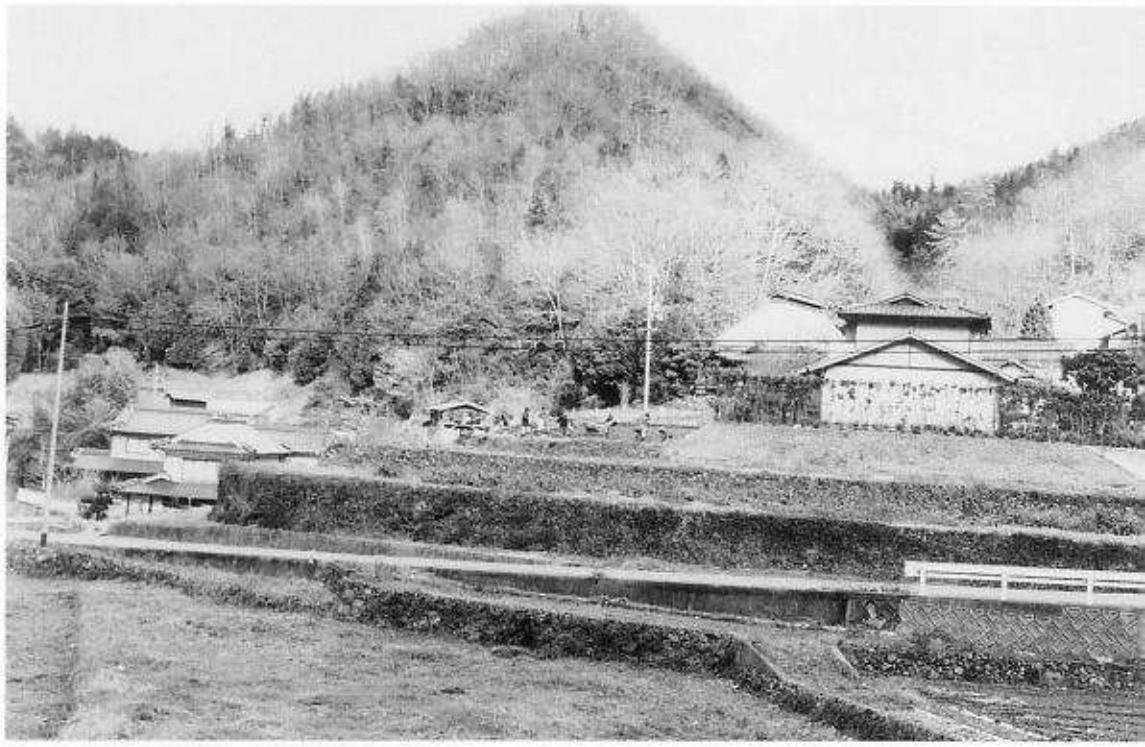
(11)　註（８）の文献によると，中世城館跡での土錘の出土例は，広島市有井城跡・同市亀崎城跡・同市横山城跡・竹原市高崎城跡・福山市大塚館跡・尾道市丸山城跡・三次市加井妻城跡がある。

このほか，三次市萩原城跡からも出土している。

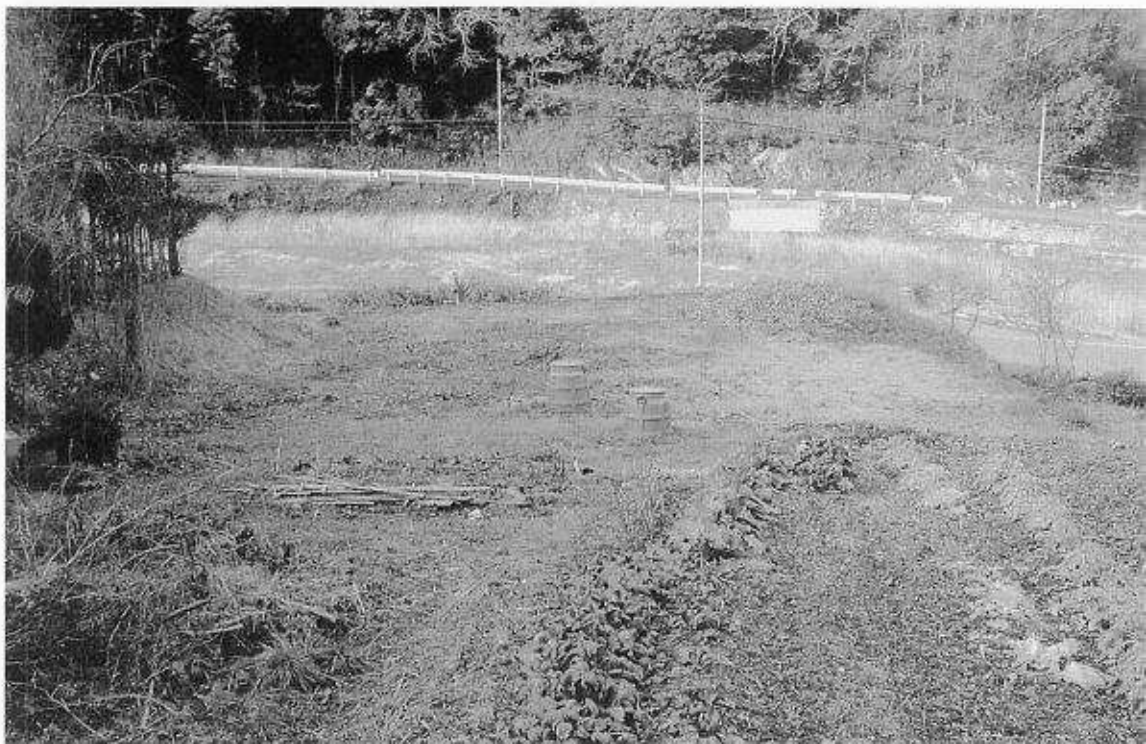
図　　版

遺跡遠景（空中写真，北から）
（○：城根遺跡，△：牛の皮城跡，□：曽川１号遺跡（Ｅ地区））

a　遺跡遠景
（空中写真，南西から）
○：城根遺跡
△：牛の皮城跡
□：曽川１号遺跡
（E地区））



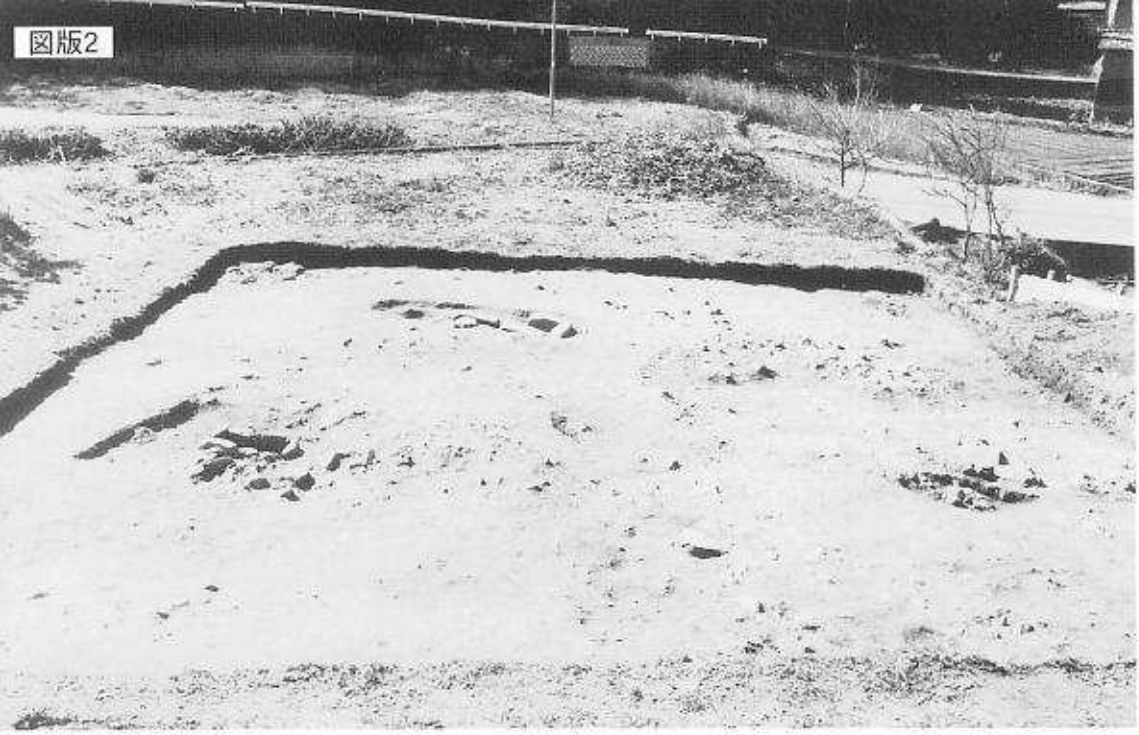
b　遺跡近景
（南西から）



c　調査前全景
（東から）

図版2

城根遺跡



a　調査後全景
（東から）

b　調査後全景
（南東から）

c　1号石棺墓側石
（南から）

a　1号石棺墓側石
（西から）

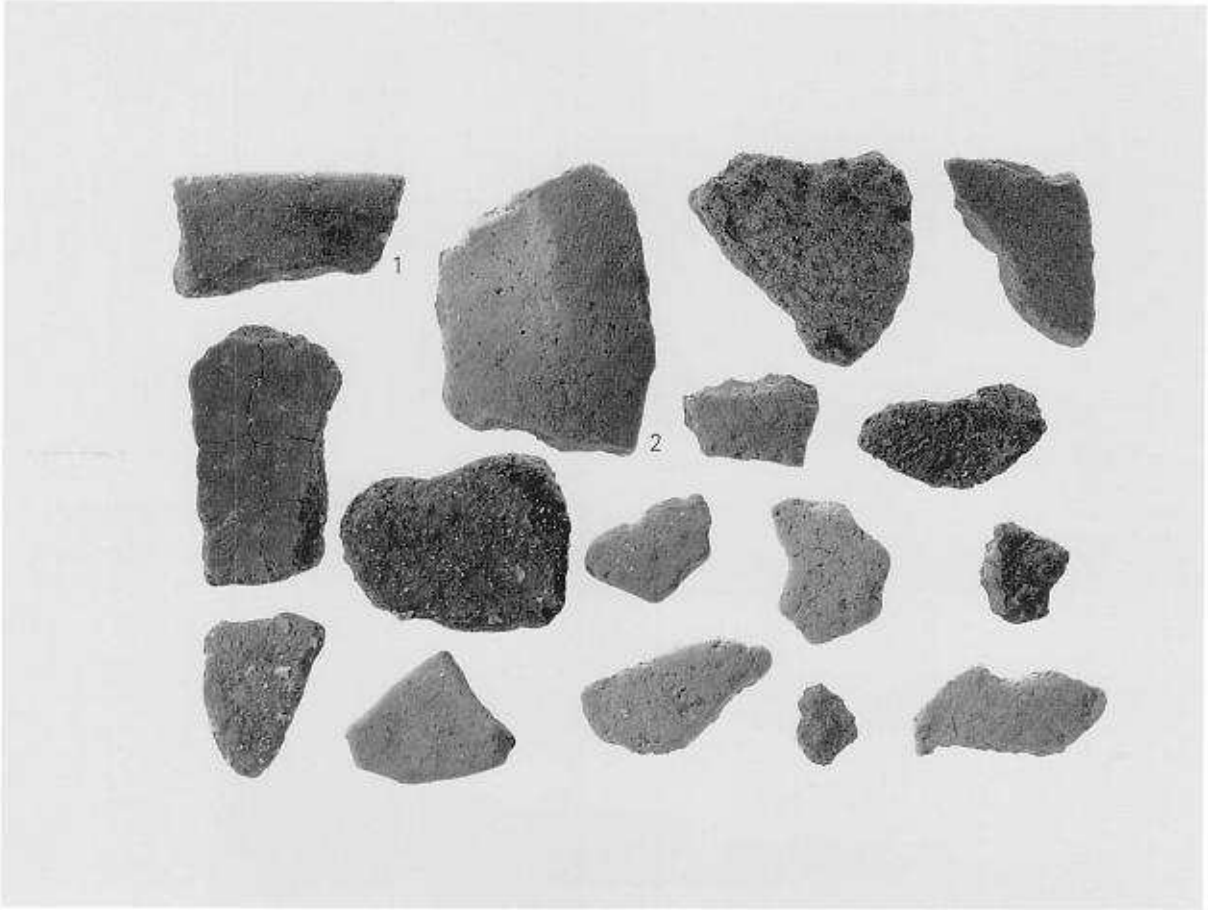
b　1号石棺墓掘方
（西から）

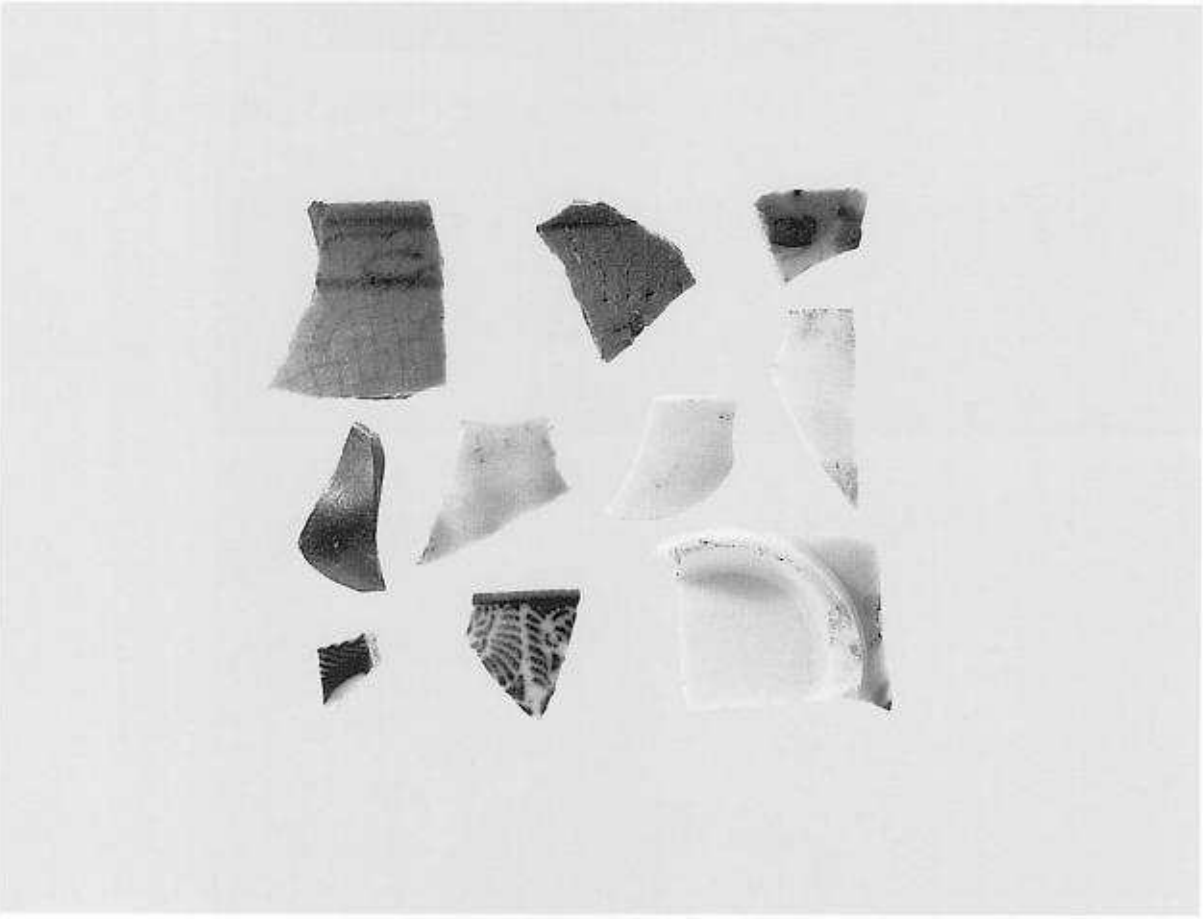
c　2号石棺墓蓋石
（南から）

a　2号石棺墓側石
（西から）

b　2号石棺墓掘方
（南から）

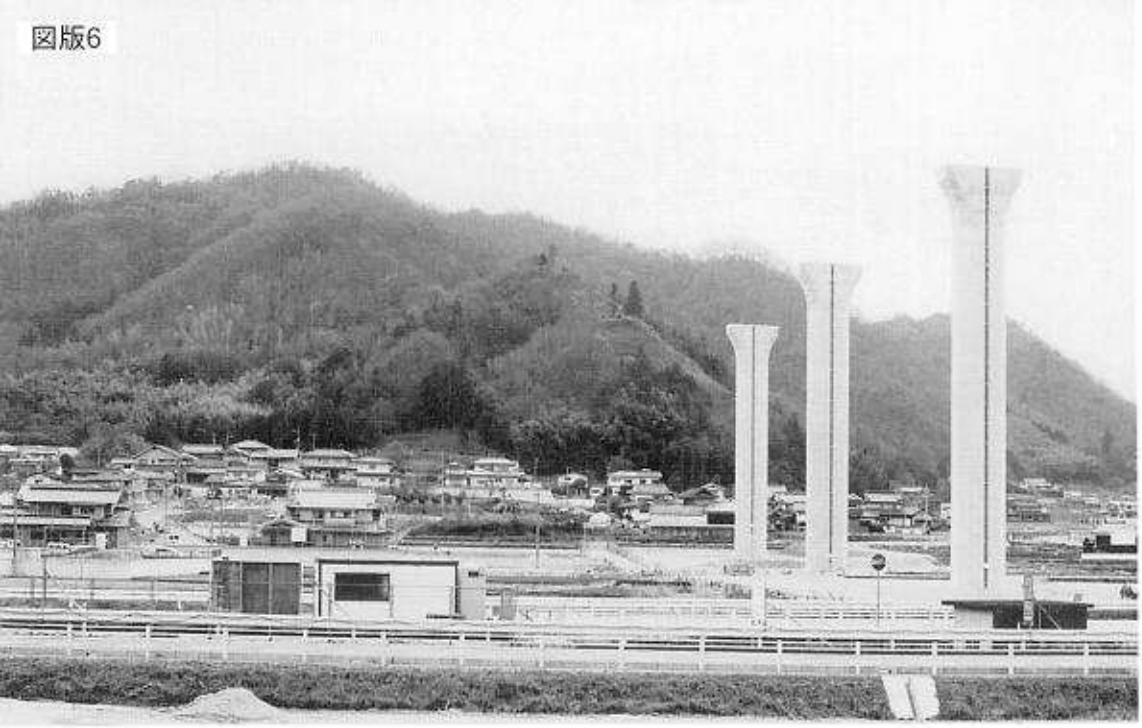
c　土壙墓人骨検出状況
（南から）



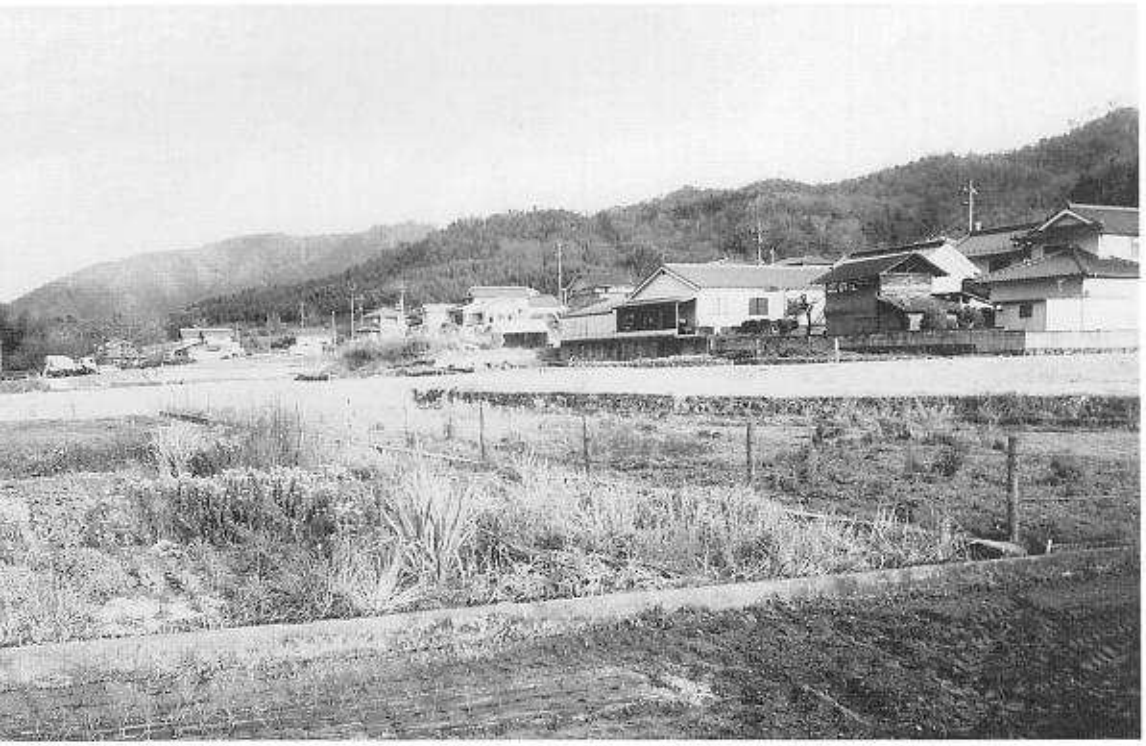


出土遺物

曽川１号遺跡（E 地区）



a　遺跡遠景
（北から）



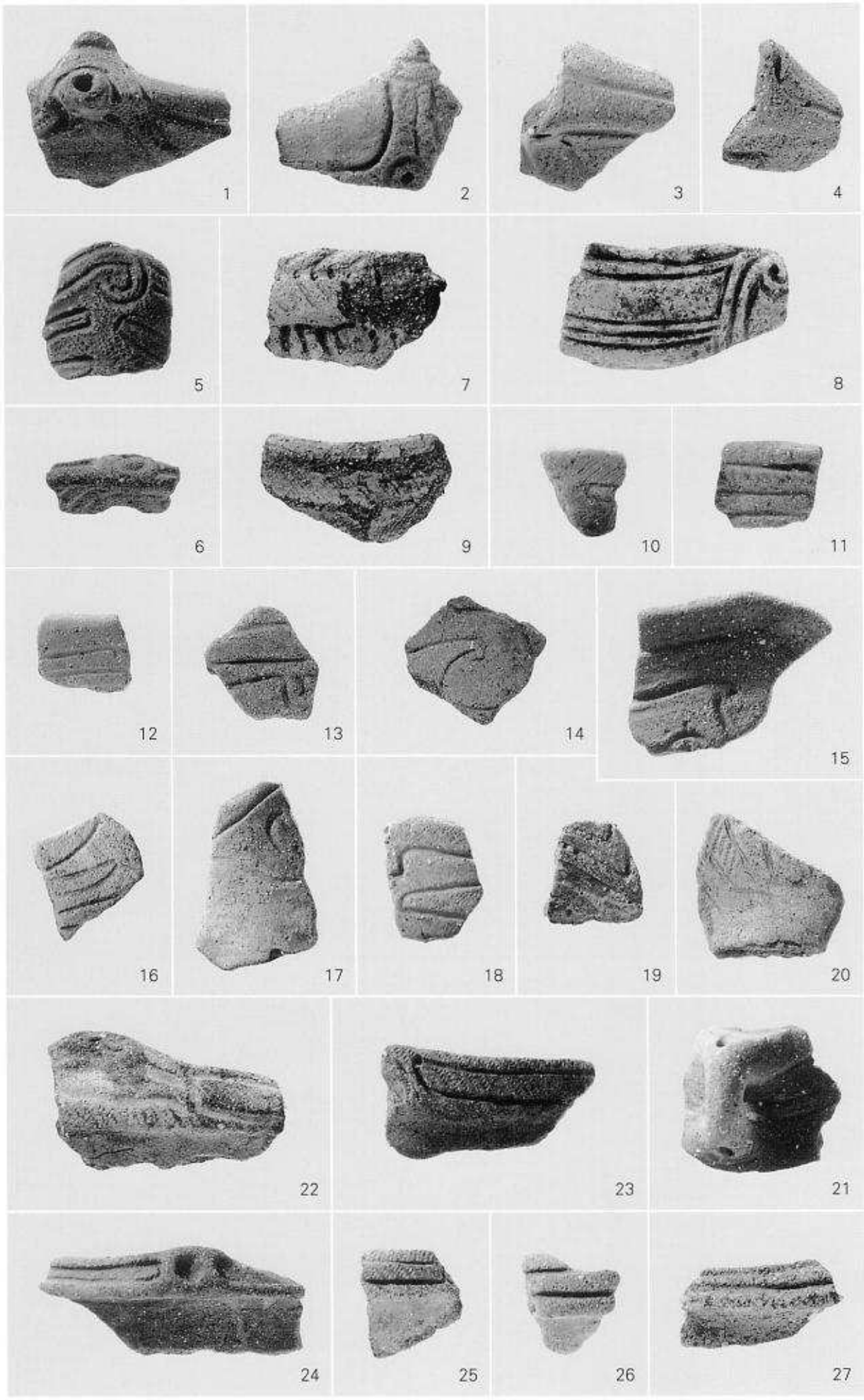
b　遺跡近景
（西から）

c　調査前全景
（東から）

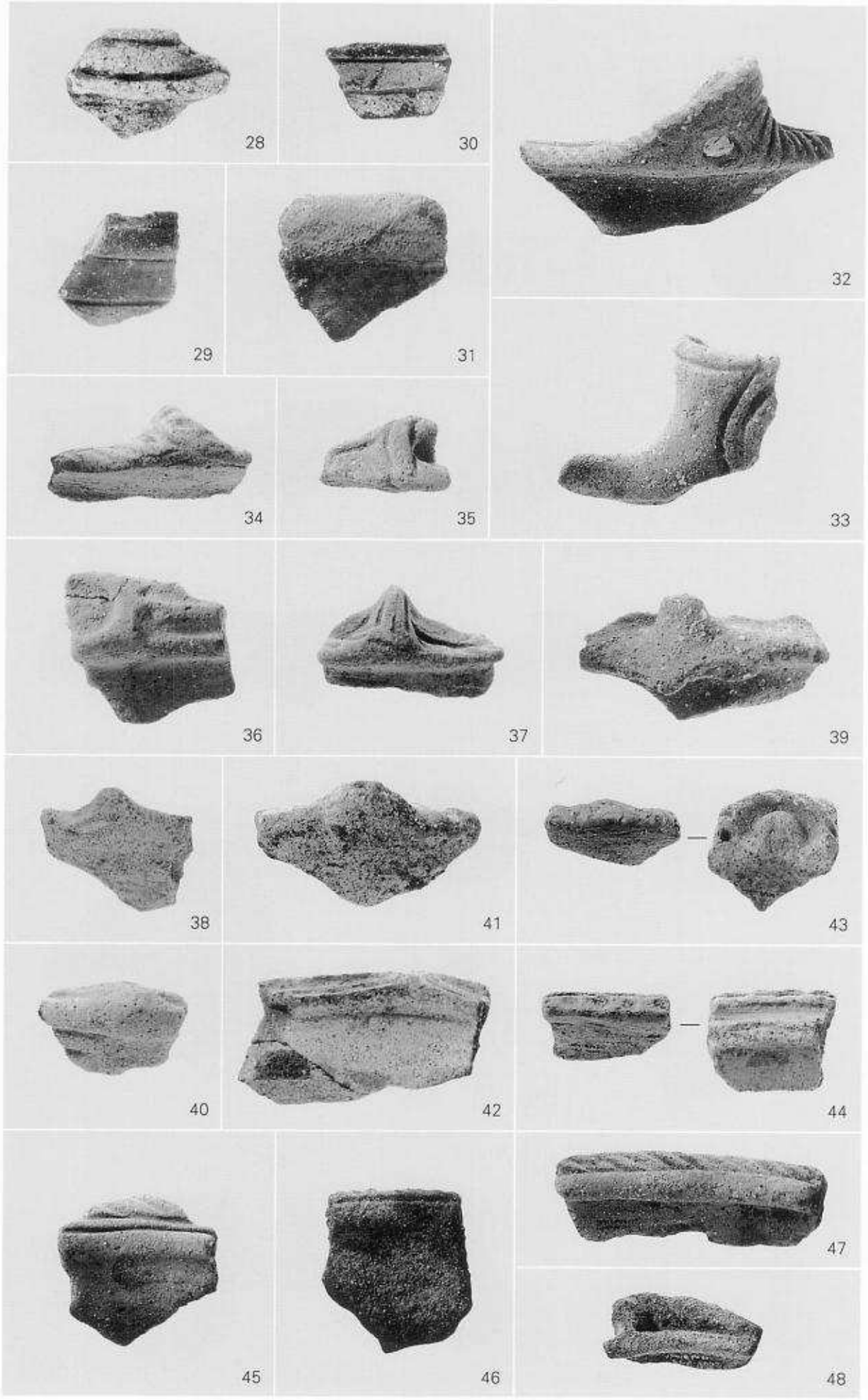
a　調査後全景
（西から）

b　調査後全景
（東から）

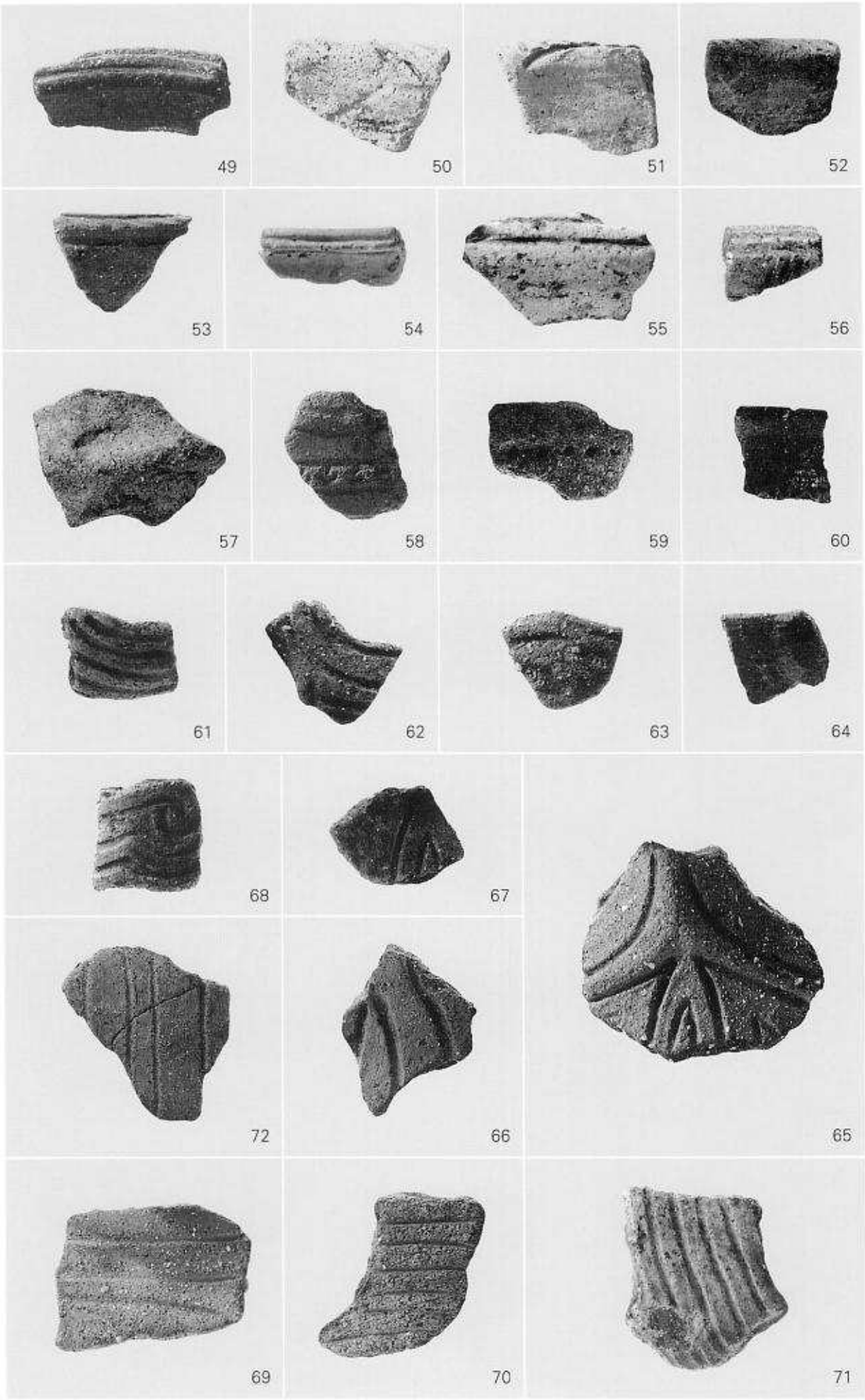
c　北側落ち込み土層断面
（東から）



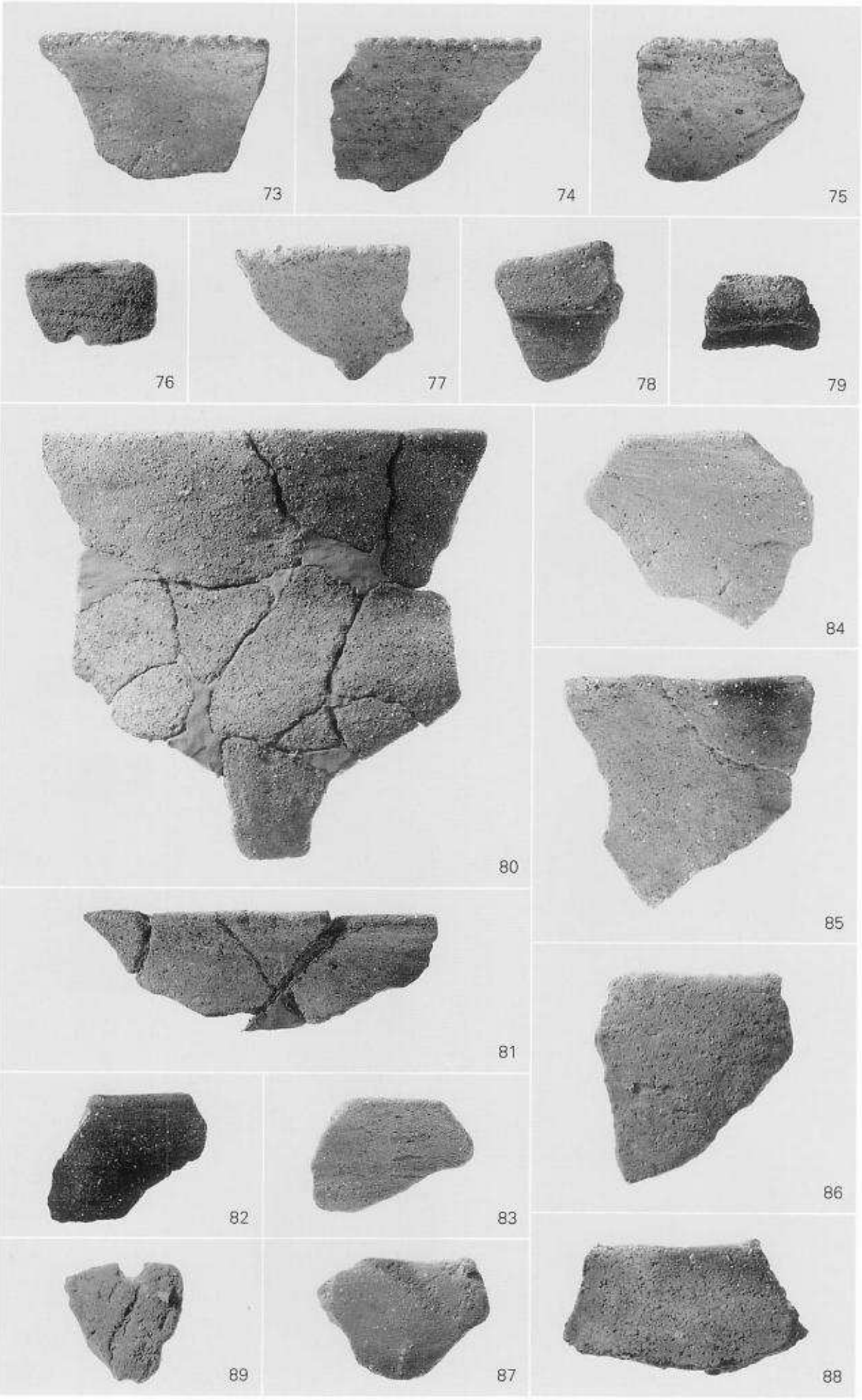
出土遺物（1）



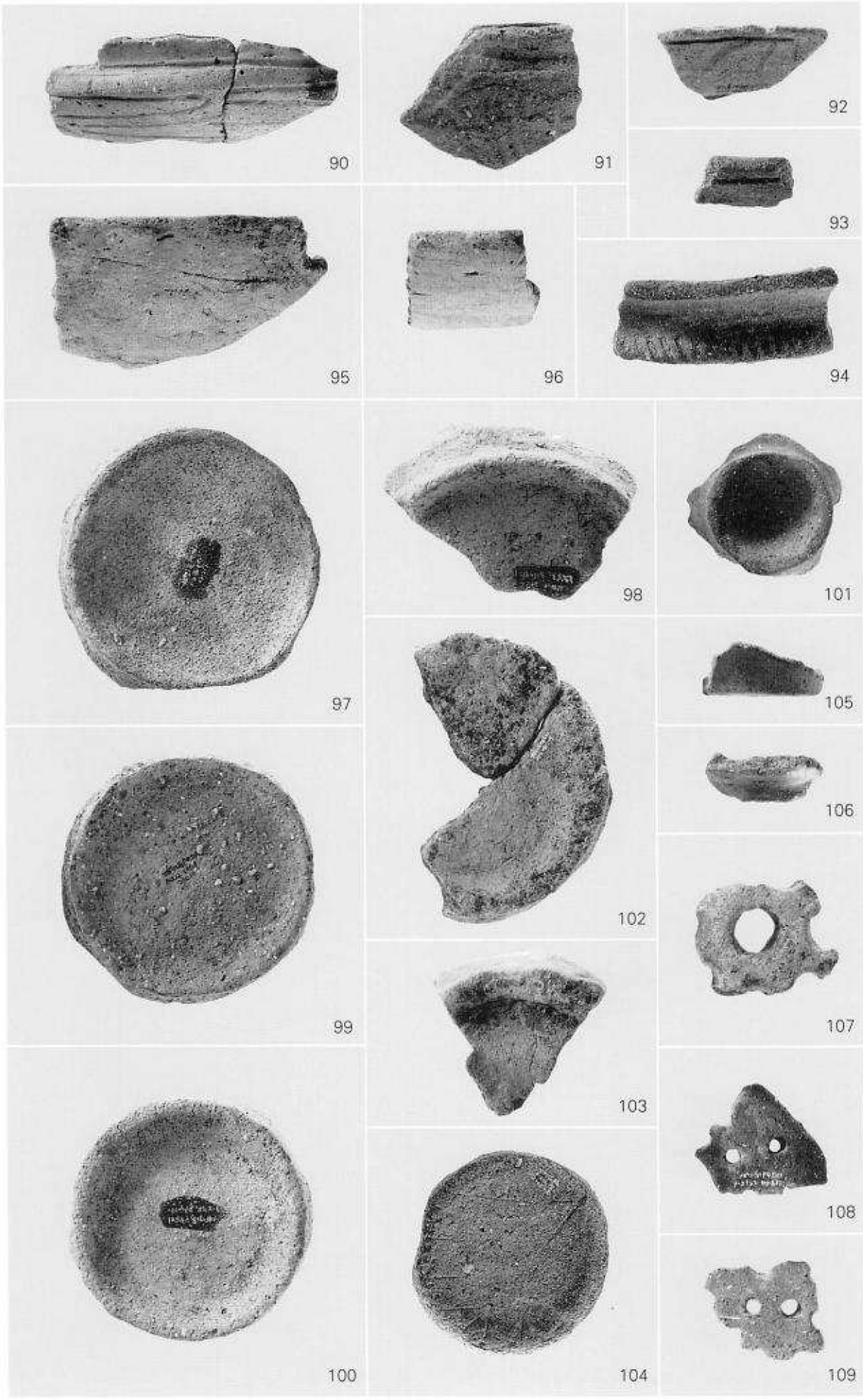
出土遺物（2）



出土遺物（３）



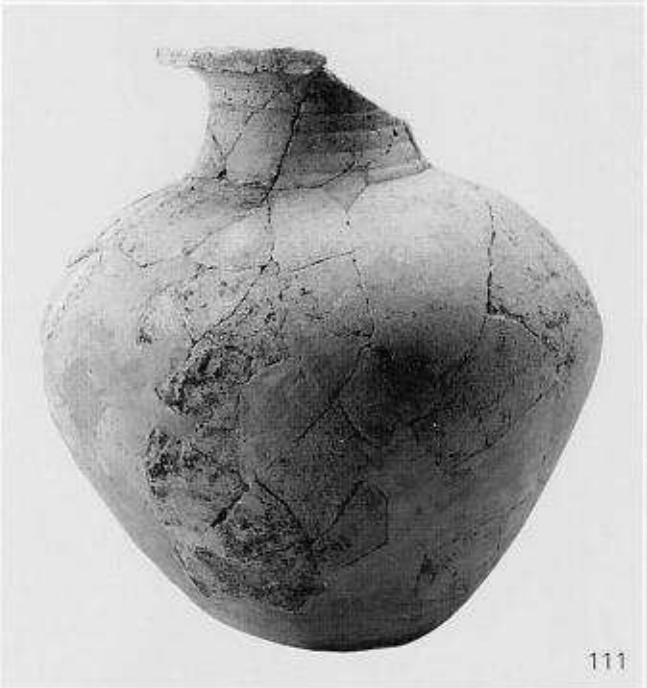
出土遺物（4）

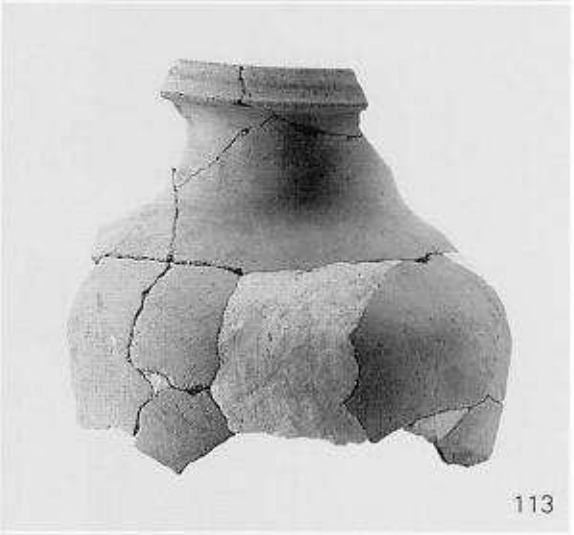

90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109

出土遺物（5）

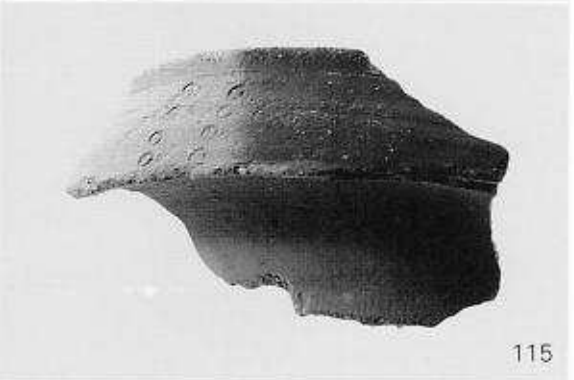
110

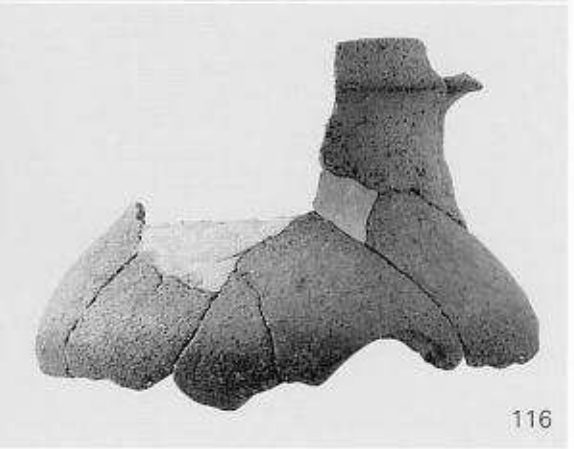
112


111

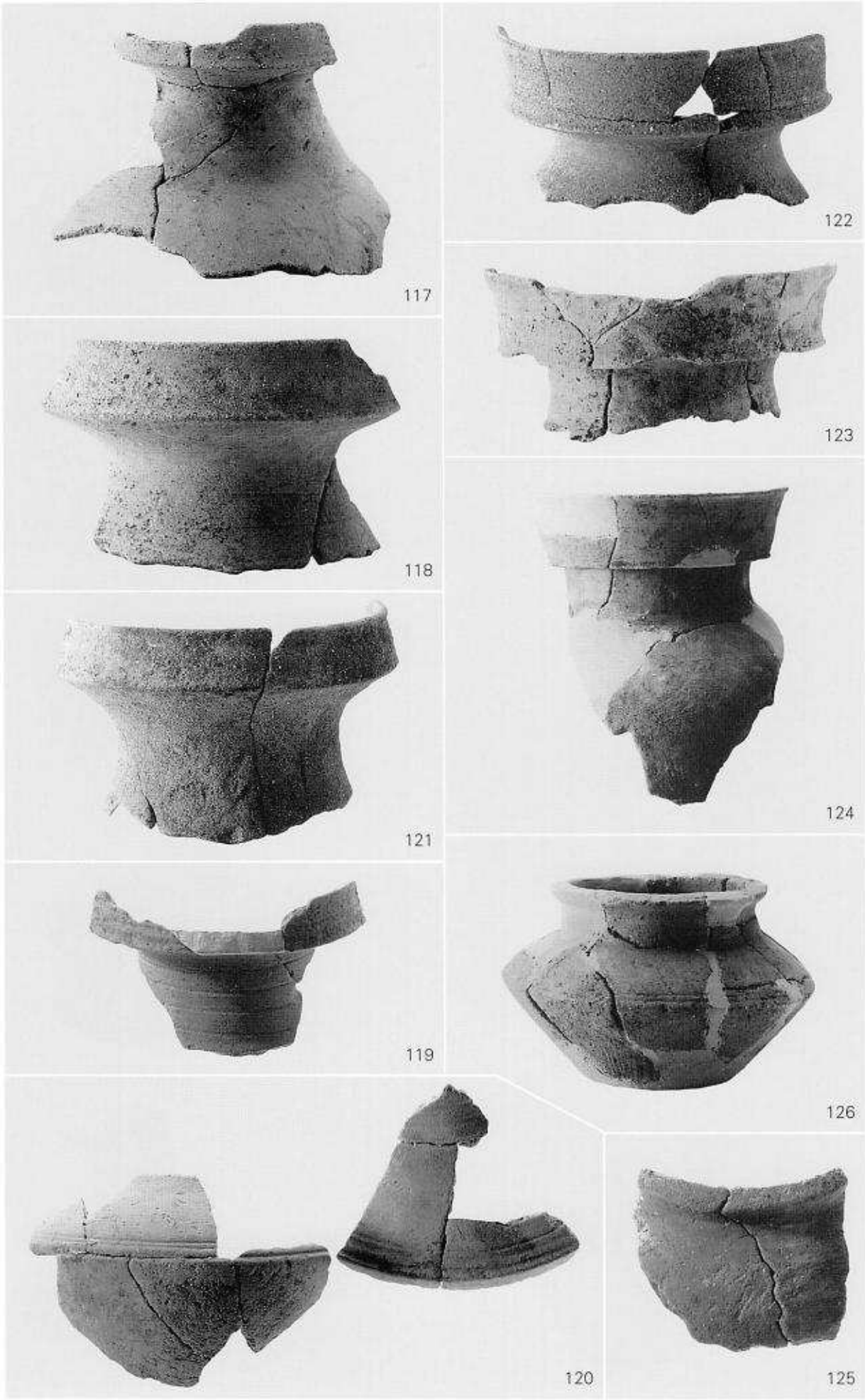

113

114


115


116

出土遺物（6）

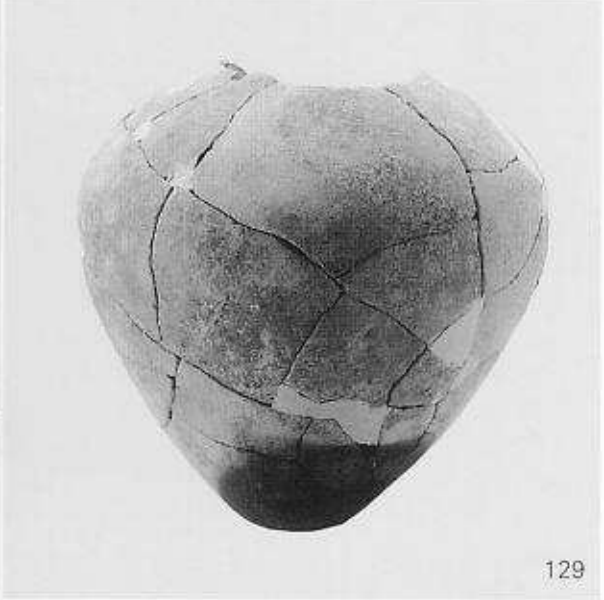


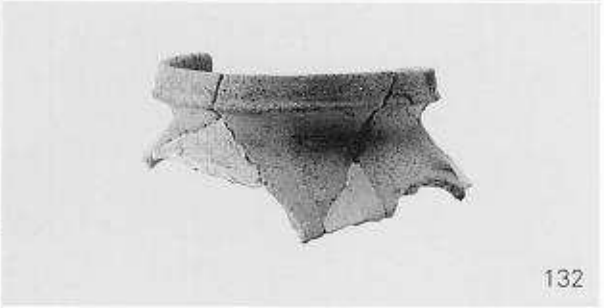
出土遺物（7）

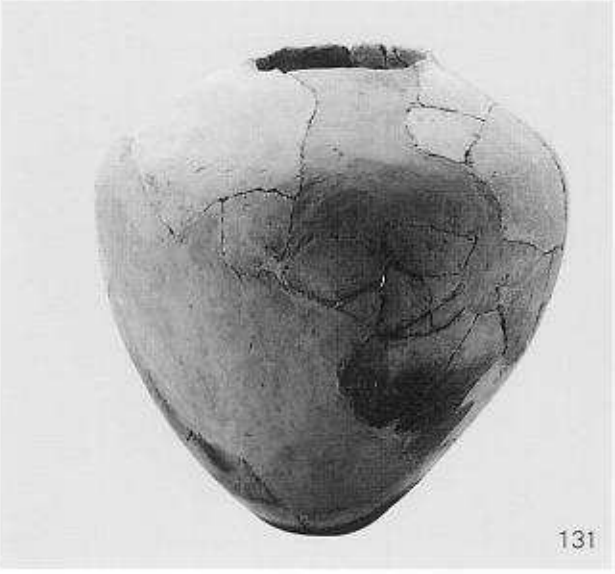
127

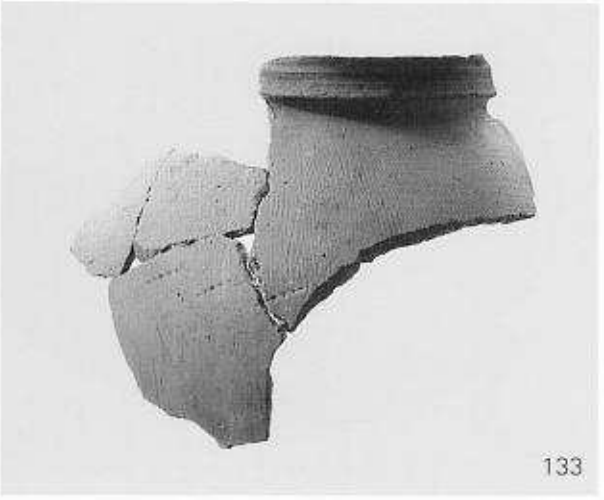
128

130


129


132

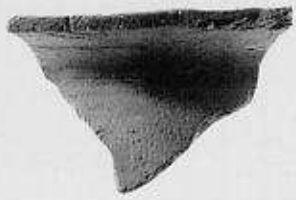

131


133

出土遺物（8）

134

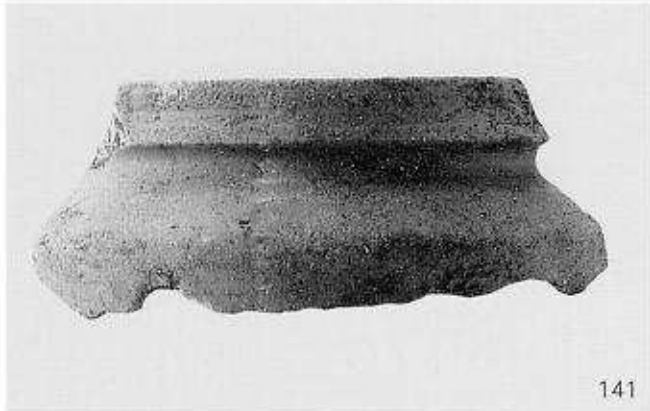
135


136

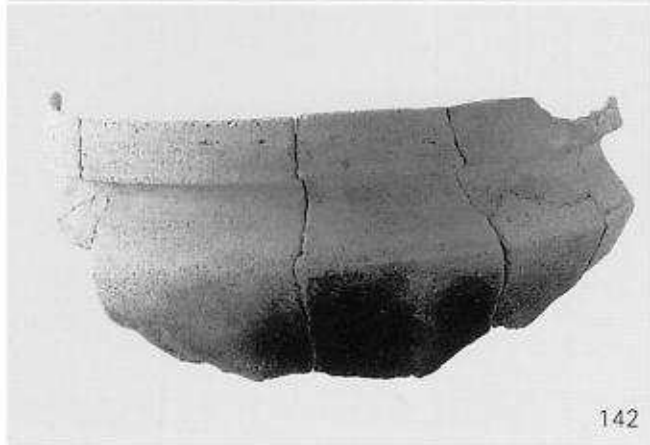
140

138

139

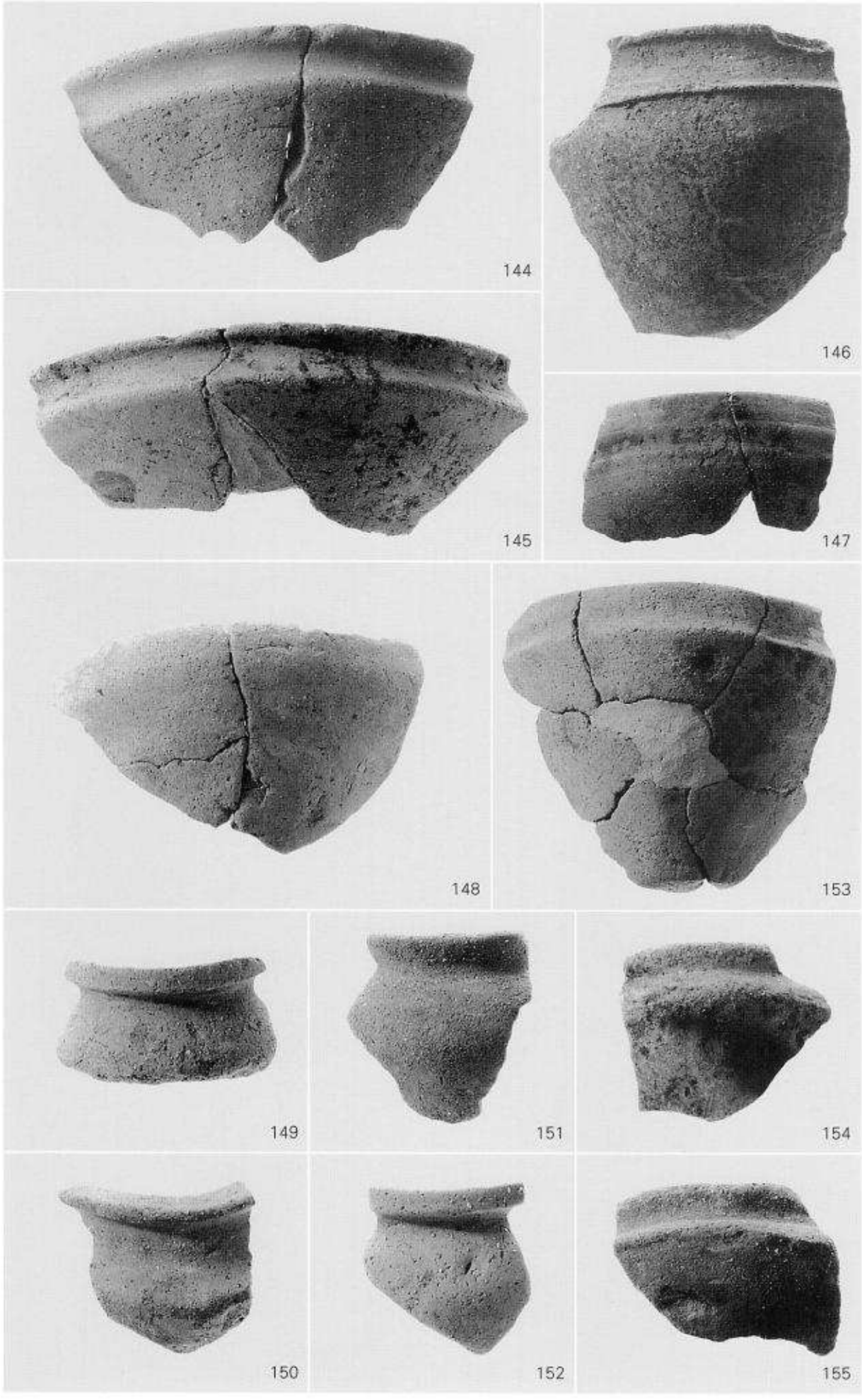

141

137

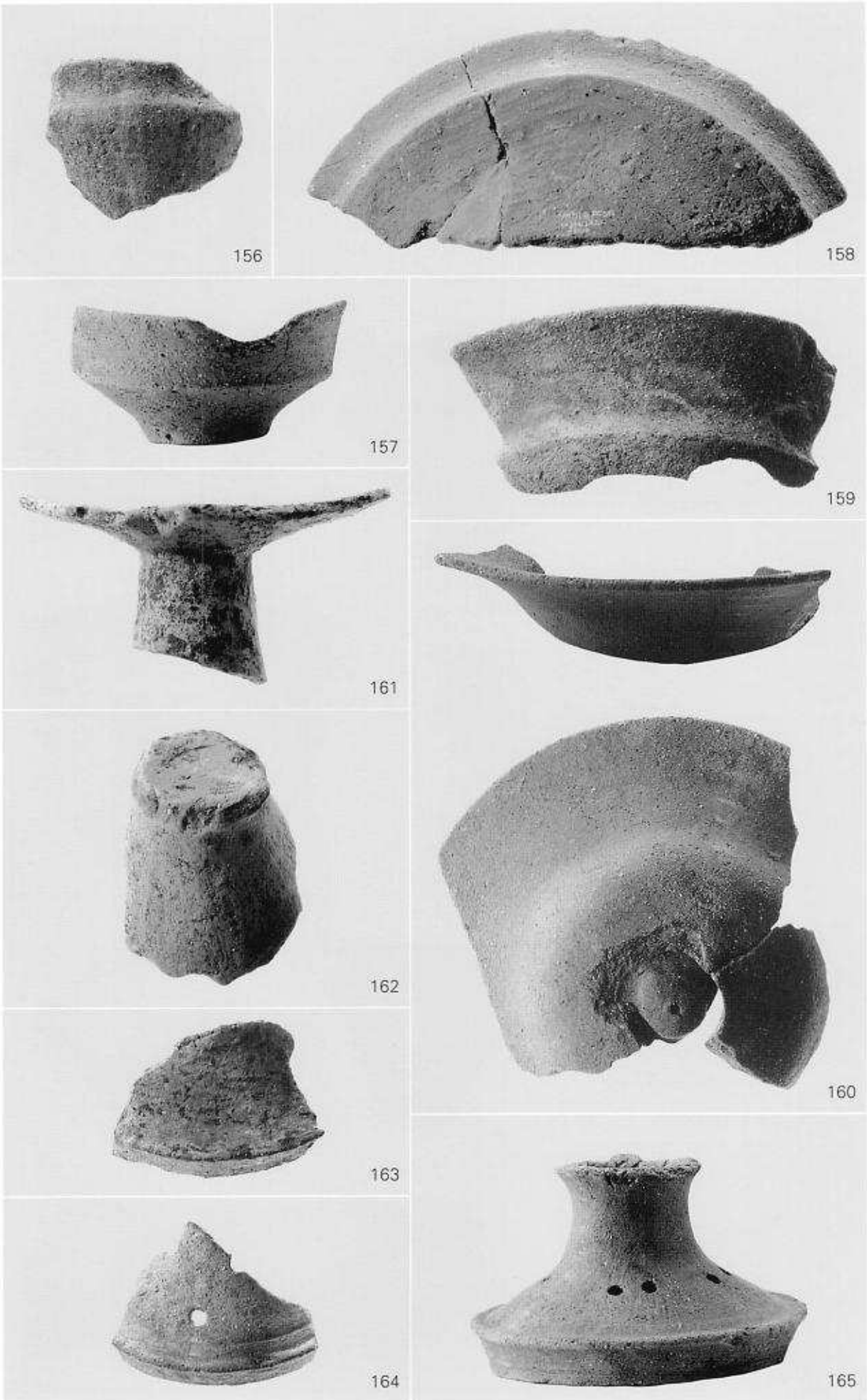

142

143

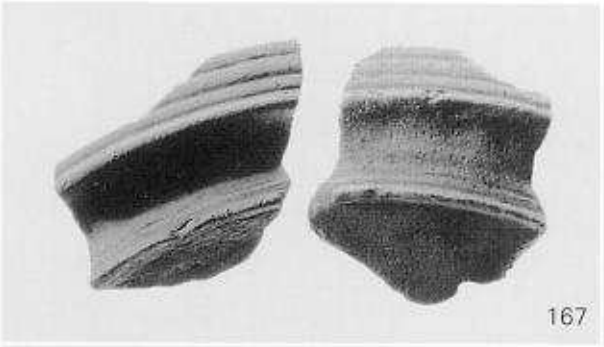
出土遺物（９）



出土遺物（10）

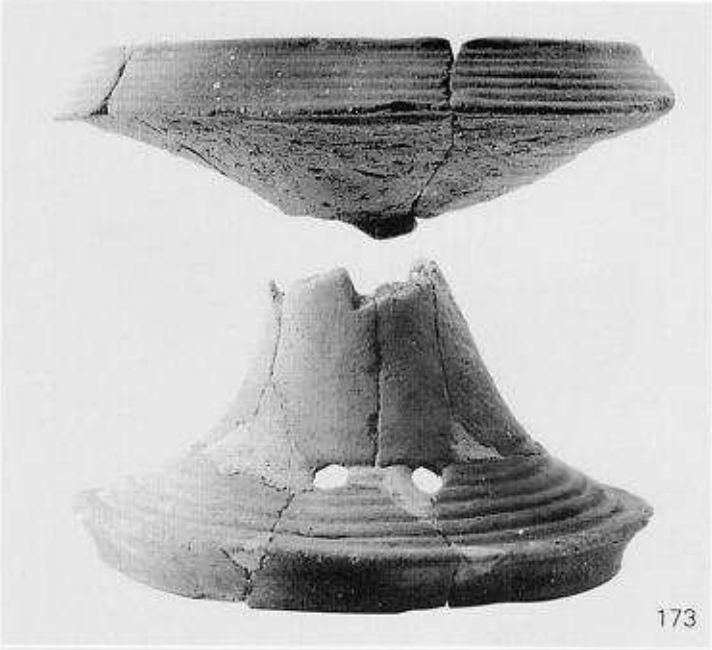


出土遺物（11）


167

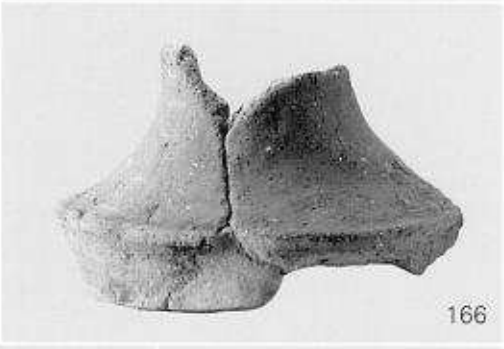
168

171

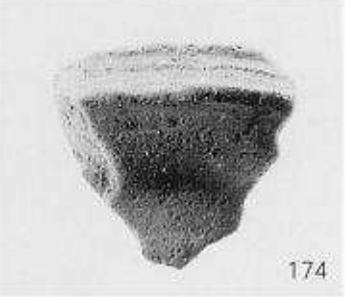

173

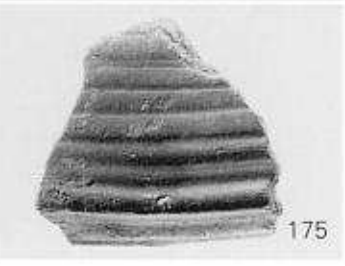
169

170

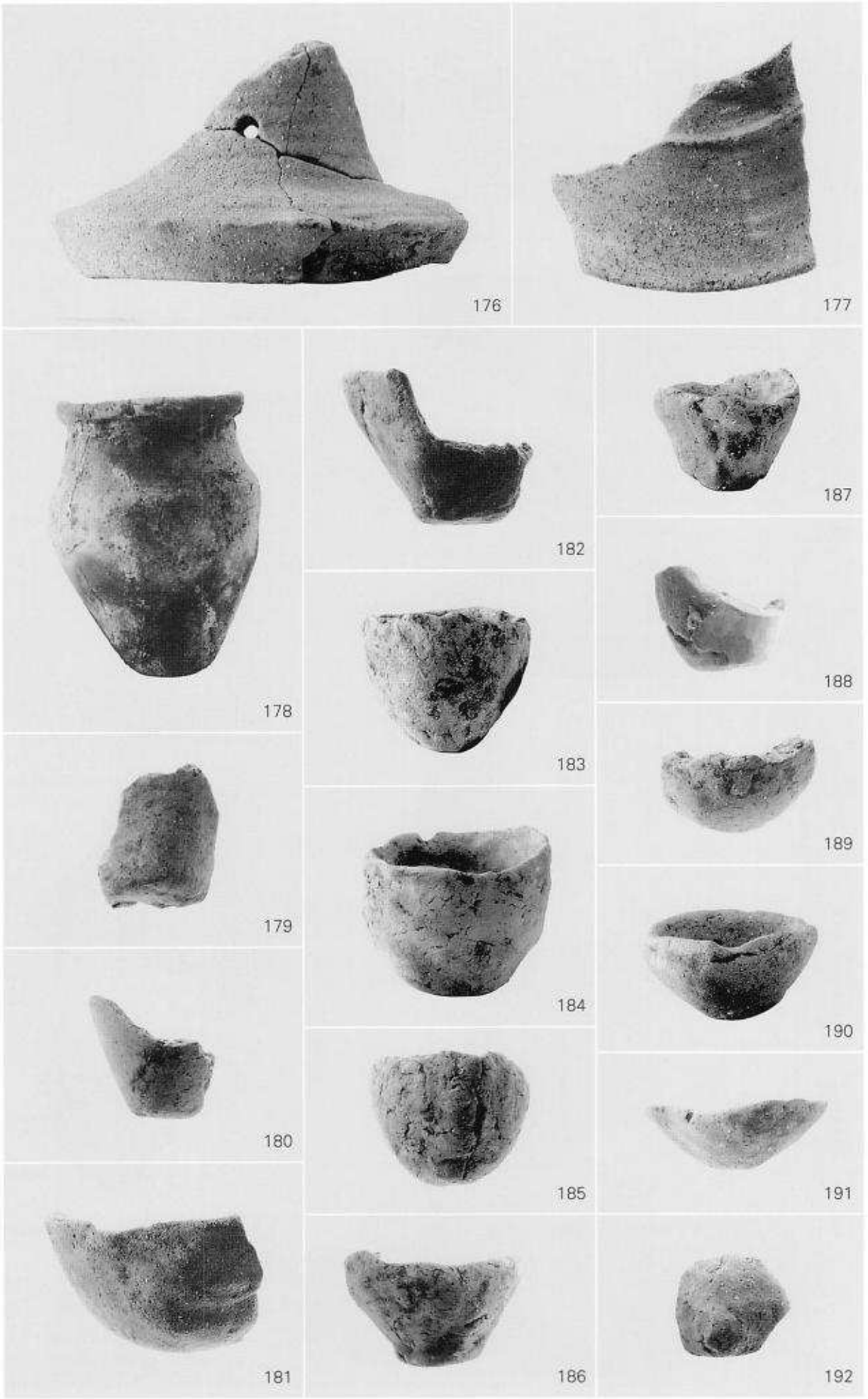

166

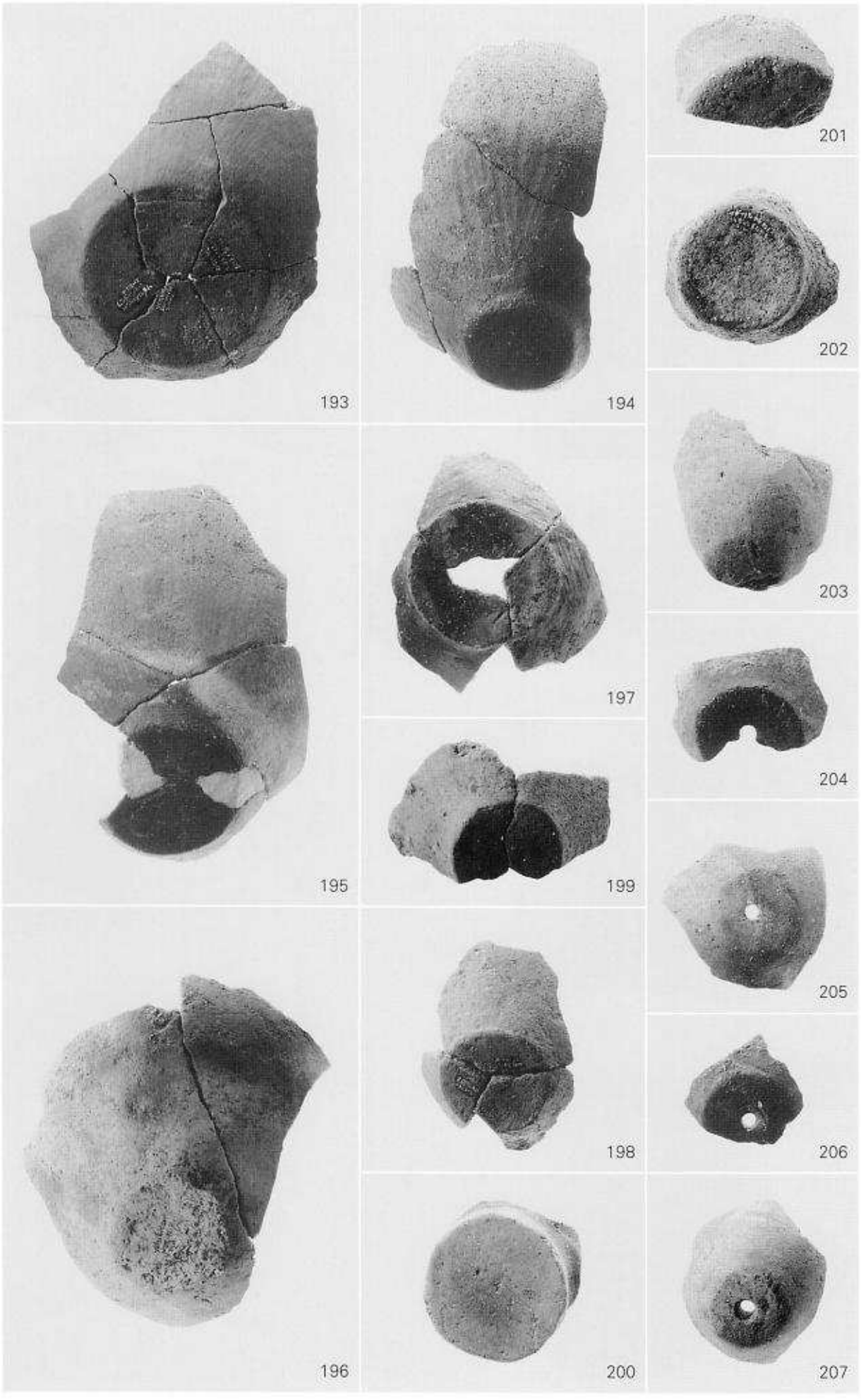
172

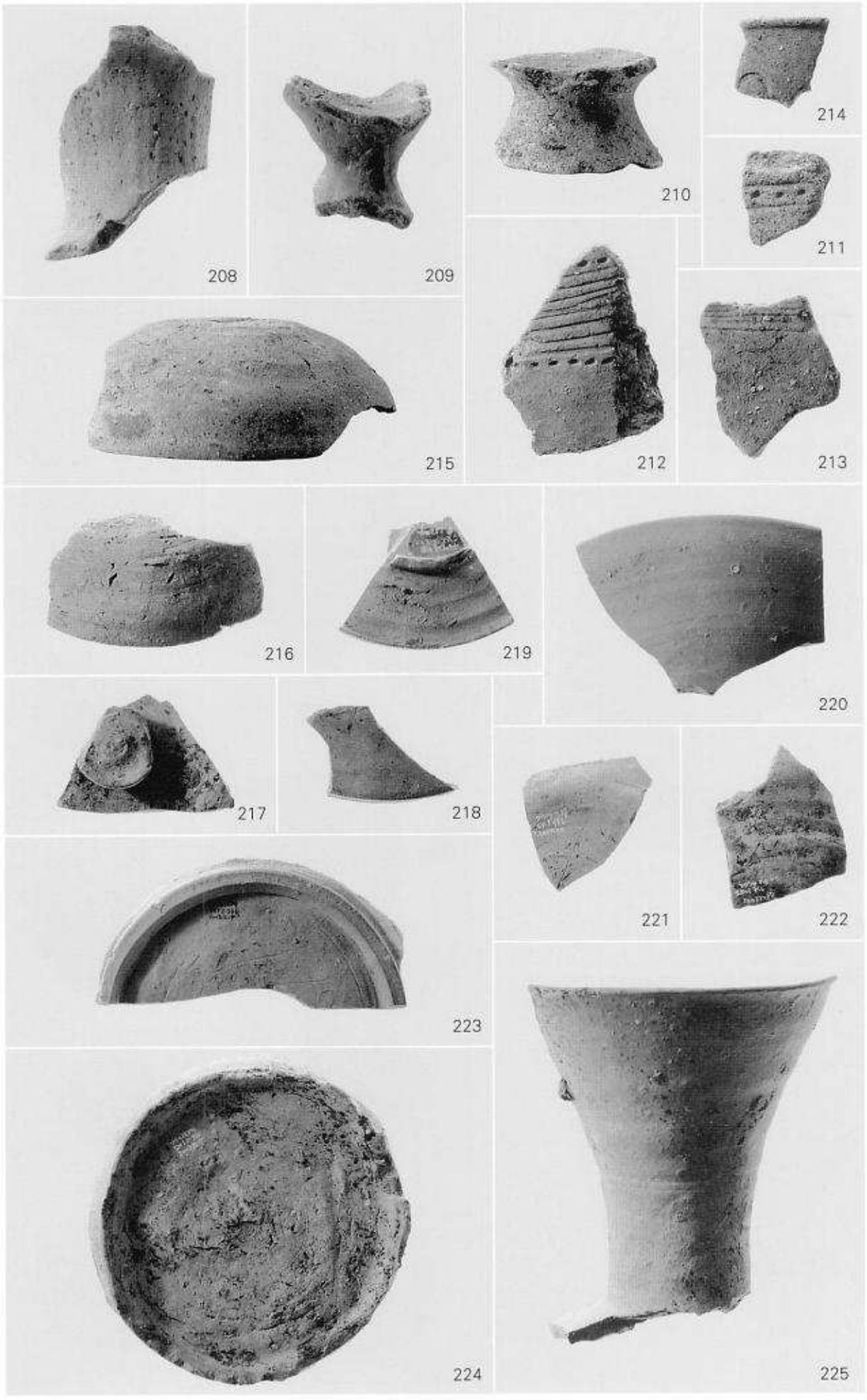

174

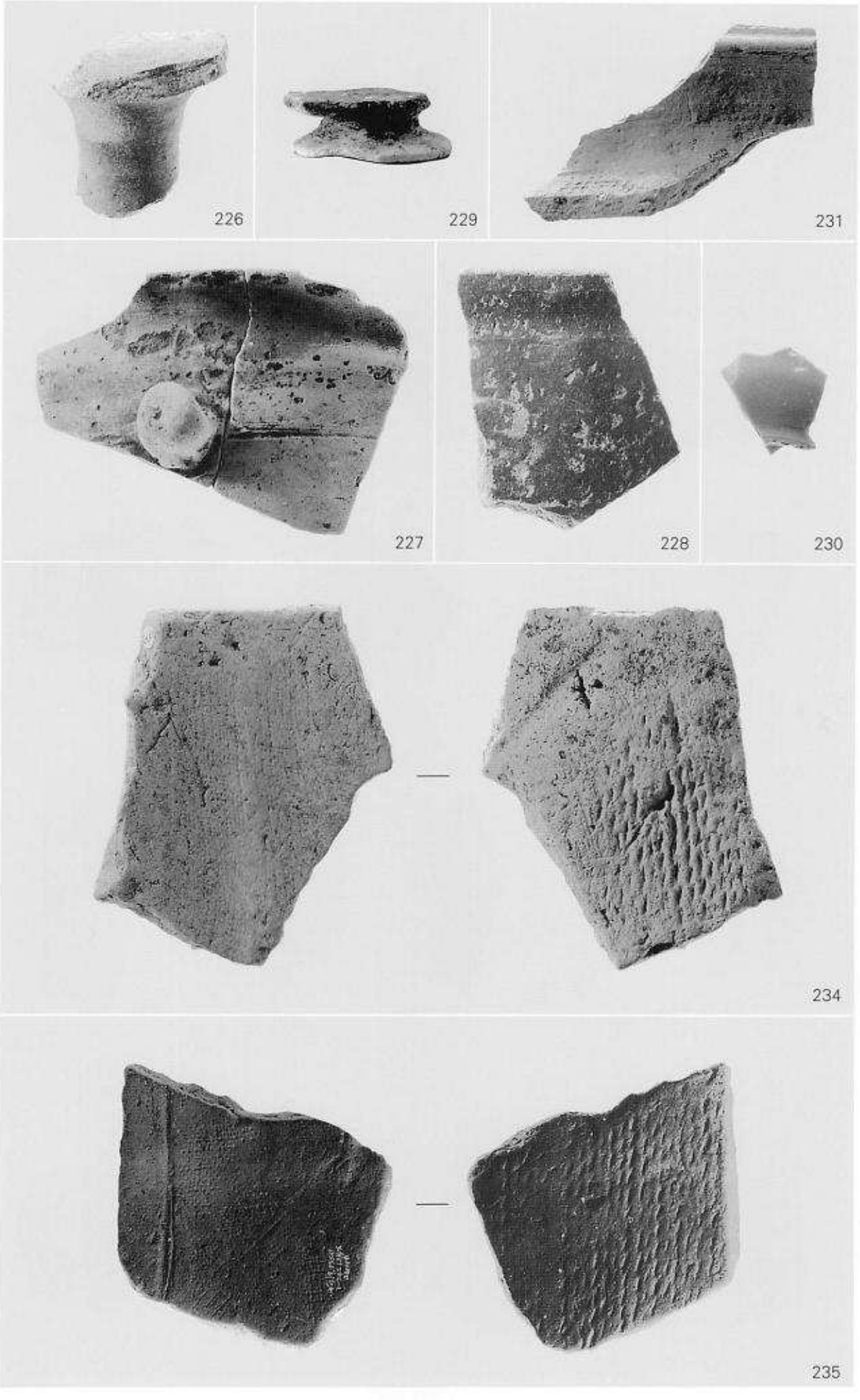

175

出土遺物（12）

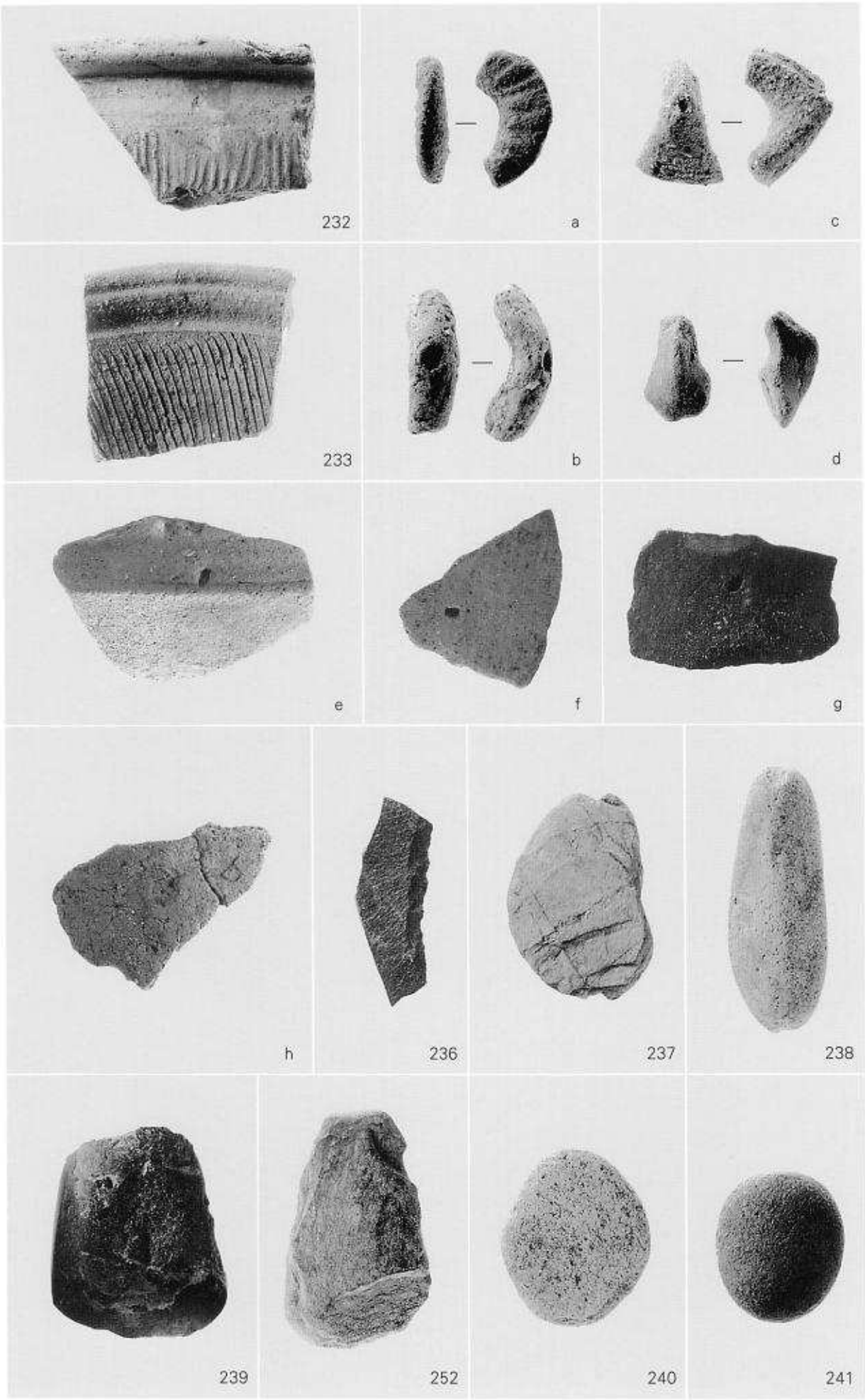

176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192

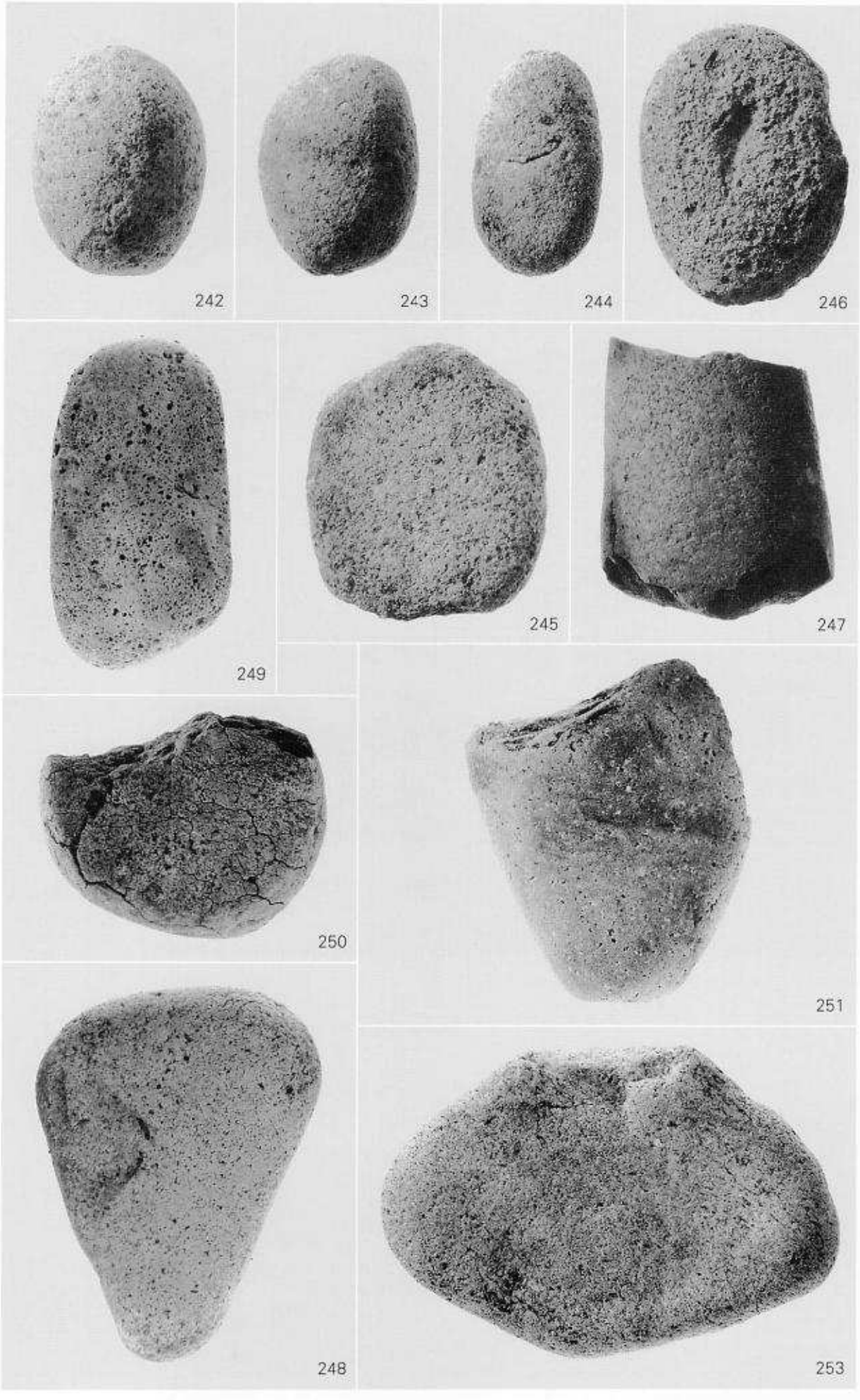

193
194
201
202
203
195
197
204
199
205
198
206
196
200
207


208
209
210
214
211
215
212
213
216
219
220
217
218
221
222
223
224
225



出土遺物（16）

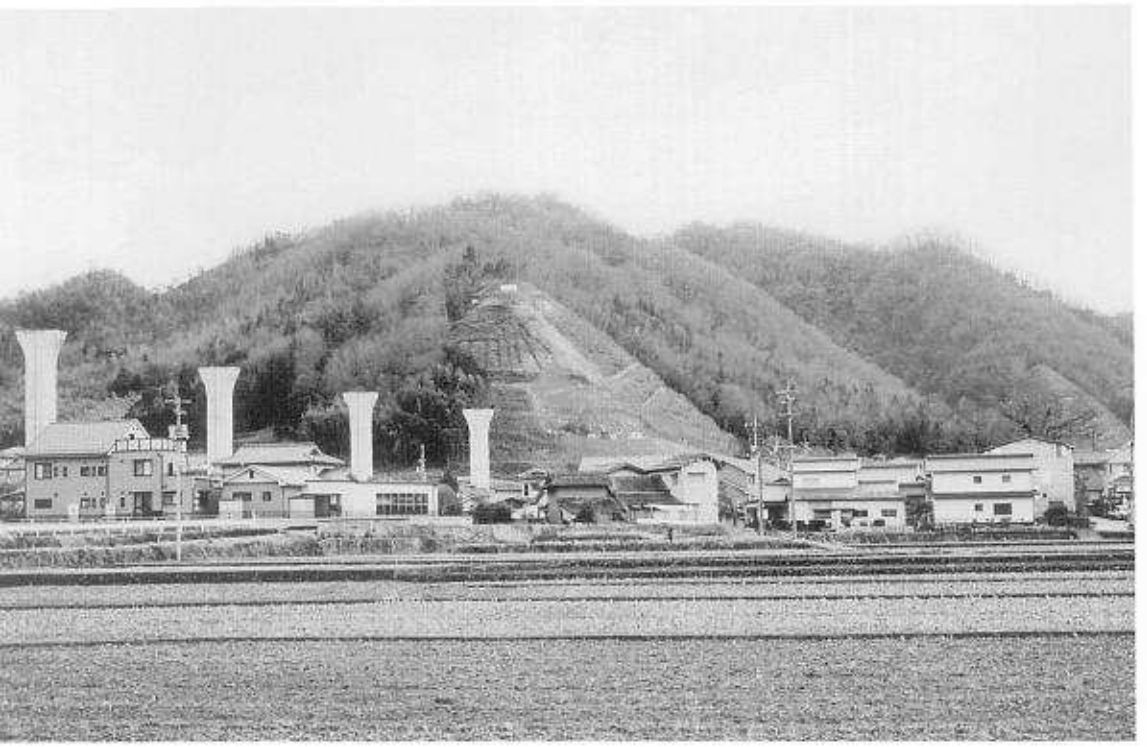

232
a
c
233
b
d
e
f
g
h
236
237
238
239
252
240
241


242
243
244
246
249
245
247
250
251
248
253

図版26

牛の皮城跡（第４次）

a　遺跡遠景
（西から）



b　遺跡遠景
（北西から）

c　遺跡遠景
（北から）

a　遺跡近景
（西から）

b　遺跡近景
（南西から）

c　調査前全景
（南東から）

図版28

牛の皮城跡（第４次）

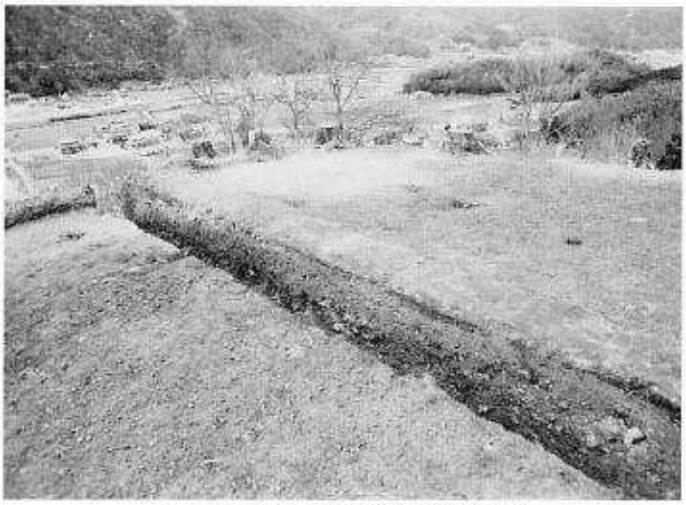
a　調査状況
（北西から）

b　調査状況
（南東から）

c　調査後全景
（南東から）

a　３・４区間土層断面（西から）

b　１・２区間土層断面（西から）



c　５・６区間土層断面（南から）

d　５・６区間土層断面（北寄り，南から）

e　４・２区間土層断面（西から）

f　３・１区間土層断面（北西から）

g　６・４区間土層断面（東寄り，北西から）

h　５・３区間土層断面（西寄り，北から）

a　東側土塁検出状況（北西から）

b　西側土塁検出状況（北西から）

c　東側土塁検出状況（西から）

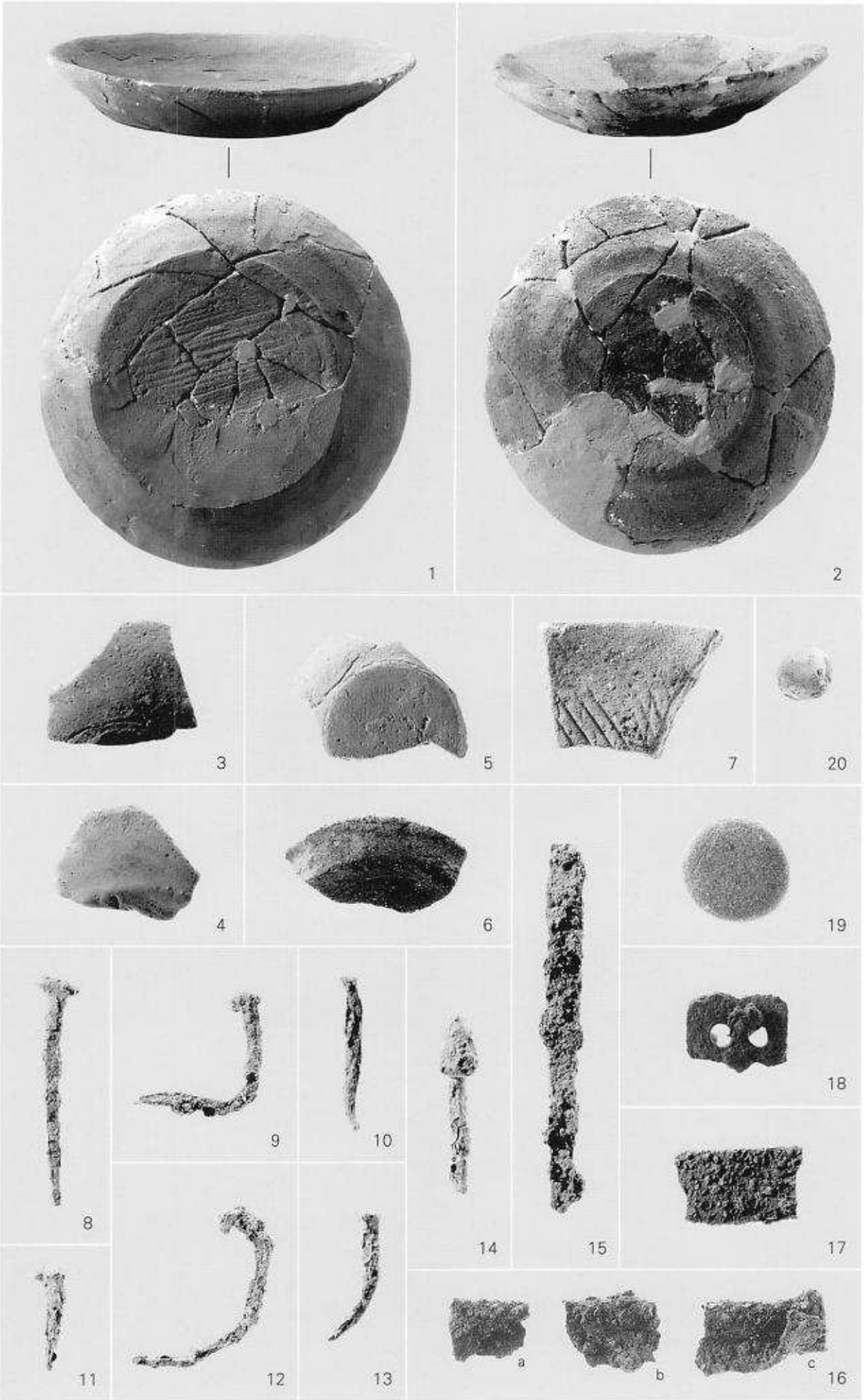
d　西側土塁検出状況（北東から）

e　東側土塁土層断面（北西から）

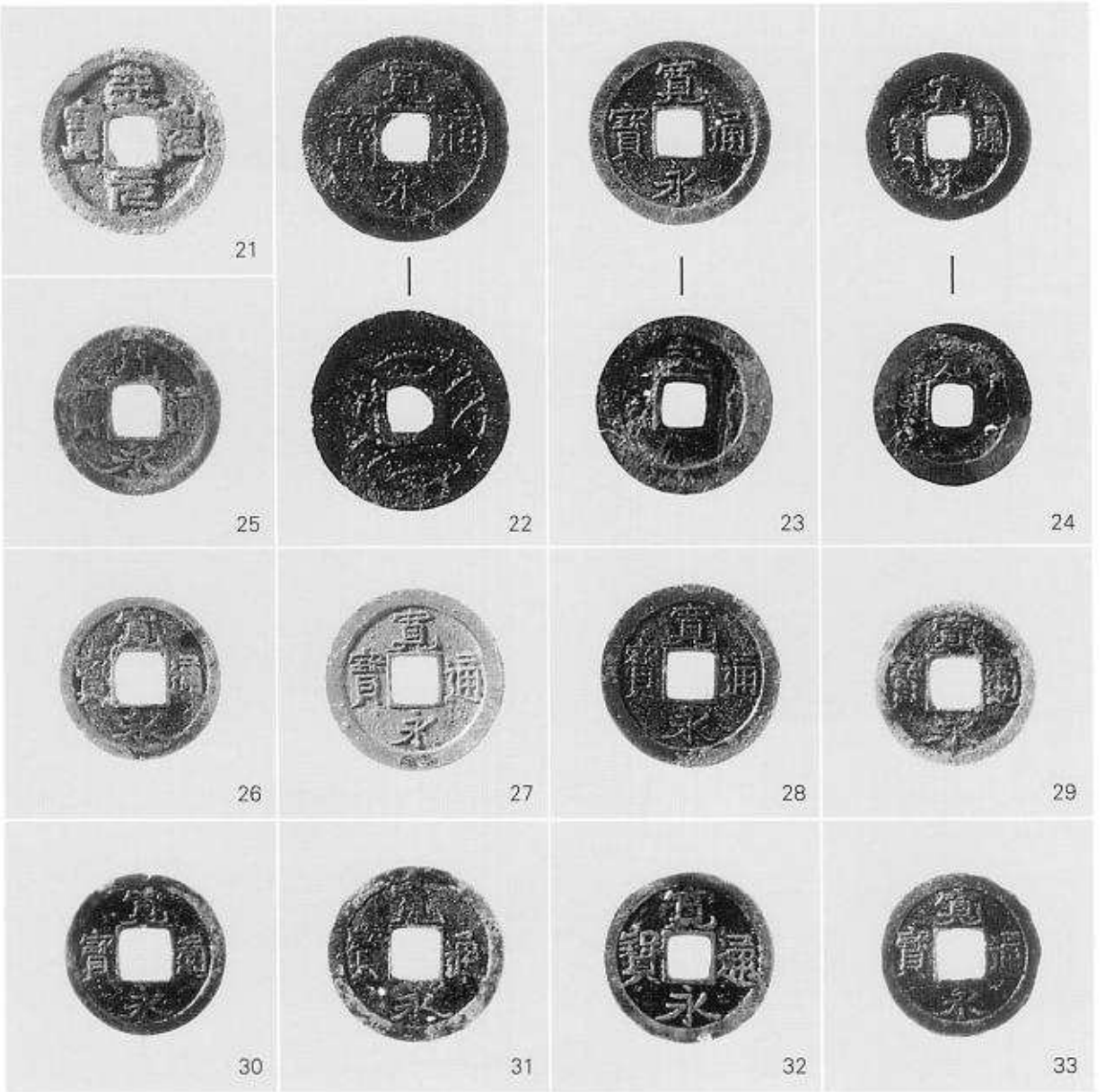
f　西側通路確認状況（北から）

g　東側通路確認状況（東から）

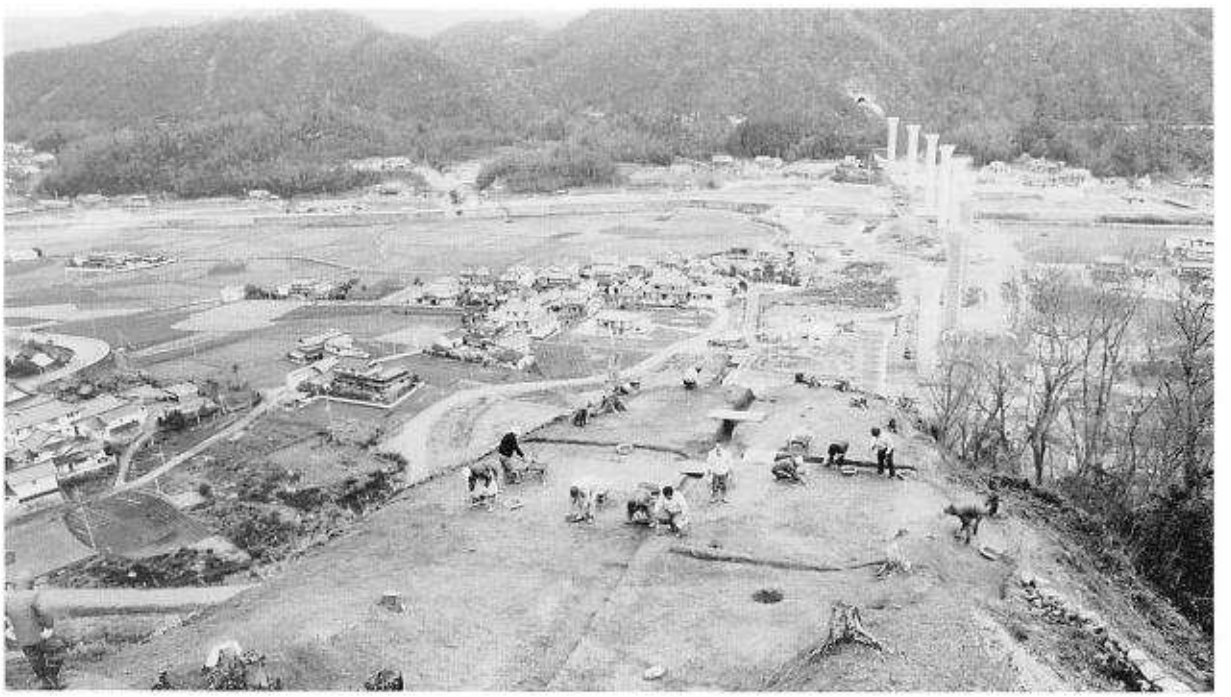
h　西側通路確認状況（南から）



出土遺物（１）



a　出土遺物（２）



b　調査風景（南東から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく　4
書名	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（4）
副書名	城根遺跡・曽川1号遺跡（E地区）・牛の皮城跡（第4次）
巻次	*
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第22集
編著者名	岩本正二・唐口勉三
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所在地	〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号　TEL 082-295-5751
発行年月日	西暦2008年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
城根遺跡	広島県　尾道市 御調町大町	34205	34441-152	34° 31′ 03″	133° 09′ 54″	20030127 ～ 20030307	280	中国横断自動車道尾道松江線建設事業
曽川1号遺跡（E地区）	広島県　尾道市 御調町大町	34205	34441-150	34° 31′ 18″	133° 09′ 52″	20031201 ～ 20031219	280	同上
牛の皮城跡（第4次）	広島県　尾道市 御調町大町	34205	34441-113	34° 31′ 13″	133° 09′ 57″	20060130 ～ 20060224	223	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城根遺跡	墳墓	弥生時代終末～古墳時代前半	箱式石棺墓　2基土壙墓　1基	土師器	箱式石棺2基（成人用・小児用）
曽川1号遺跡（E地区）	包含層	縄文時代後期・弥生時代・古墳時代後期・古代・中世	落ち込み　1か所	縄文土器・弥生土器・須恵器・陶磁器・瓦・石斧・石錘・敲石・磨石など	縄文時代後期・弥生時代後期の包含層。
牛の皮城跡（第4次）	城跡	中世末（戦国時代）	郭・土塁	土師質土器・瓦質土器・鉄釘・鉛玉・小札・古銭・鉄滓など	土塁を伴う郭の調査。

要約	城根遺跡	城根遺跡は曽川1号遺跡から南に約500m離れた谷間の奥にある。舌状に延びた尾根北西斜面（標高95～97m）に立地する。調査の結果，箱式石棺墓2基・土壙墓1基を検出した。1号石棺墓は長さ約1.7mで成人用，2号石棺墓は長さ約0.7mで小児用のものであろう。2基の石棺墓とも側石・小口石は横長に据えつけて構築しており，主軸も似た方向であることから，同じグループであろう。1・2号石棺墓，土壙墓とも築造時期は不明であるが，前者は弥生時代終末～古墳時代前半，後者は近世以降の可能性が高い。
	曽川1号遺跡（E地区）	曽川1号遺跡は，御調川の南から延びる丘陵裾部（標高72～85m）に立地する弥生時代から連続して営まれた集落である。E地区は遺跡の北端で丘陵の先端部に位置する。調査の結果，調査区北側で落ち込みを確認した。この落ち込みの下層から縄文時代後期の土器，中層から弥生時代後期の土器が多量に出土した。
	牛の皮城跡（第4次）	牛の皮城跡は，御調川に臨む標高200m前後の丘陵部に立地し，北郭群と南郭群（本城跡）に分かれている。北郭群は南東側最高所から北西側にかけて連続する大小5段の郭で構成されている（標高145～166m）。第4次調査は最も北西側で最下段の5郭を対象に実施し，郭の平坦面と土塁を検出したが，建物跡などは確認できなかった。遺物は土師質土器や鉄釘が多く出土した。

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第22集
中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告（4）
城根遺跡・曽川1号遺跡（E地区）・牛の皮城跡（第4次）

発行日　平成20（2008）年2月28日

編　集　財団法人　広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号
TEL (082)295-5751　FAX(082)291-3951
ホームページ http://www.harc.or.jp/

発　行　財団法人　広島県教育事業団
〒730-0011 広島市中区基町4番1号
TEL (082)228-8451　FAX(082)228-8441

印刷所　朝日精版印刷　株式会社
TEL (082) 277-5588　FAX (082) 277-1143